木々の語らい　目次


G-Fusion song　新道知樹　０２～１６
クイズ日記（前編）　ホウカゴノテイオー　１７～１９
GOD BLESSING　日高呑　２０～４２
現代の娯楽小説におけるキャラクターポジションの役割についての浅い考察　日高呑　４３～４５
Good-bye Master　小金井ささら　４６～４９
トラゴエディア　八咫烏　５０～６３
Gloaming　夏炉かなた　６４～７１
100 の穴とストロベリー・ワンダーランド　夏炉かなた　７２～９５
編集後記　９６
奥付　９７

# G-Fusion Song

新道知樹

僕の趣味はネットではなく、ただの暇潰しだ。

現にこうやってインターネット上のサイトをうろついていながら言うことではないが、あくまでネットは趣味のための手段でしかない。白状すると僕にとっての暇潰しとは、何か面白そうなことを見つけてそれをすること。要するに、見つけるためのネットという訳だ。今まで、読書やゲームなどの一般的な趣味を実践してみたり、将棋やオセロなどのボードゲームにも手を出したり、お小遣いを貯めて食べ歩きに出かけたり、その他いろいろなことを行ってきた。勿論どれも楽しかった。

だけど、時間が経つと自然と飽きてしまうのだ。どんなに夢中になっても、最初の頃のわくわく感が薄れて他の面白そうなことを探してしまう。僕はそれがなんだか嫌だった。でも心が飽きてしまうのだからしょうがないといつも自分に言い聞かせていた。

目の前の画面には、ルービックキューブの解説サイトが映っている。二ヶ月ほど前、テレビで小学生の子供が十数秒で全ての面を揃えた光景を目の当たりにしたのがきっかけだった。無礼ながら、小学生にできて高校二年生の自分にできないはずがないと思って、次の日からやり始めた。今ではなんとか三十秒台で完成させることができるようになったけれど、あの小学生の早業にはまだ届かない。そこで、ネットでコツを調べているのだ。

（ふぅ、成る程。やっぱりあと八十パターン覚えなきゃなんないんか。時間かかるなぁ。）

ひとまずそんな結論に至ったので、今度は別のサイトを検索して開いてみた。画面をスクロールさせると、これは解説というよりもただの日記だということに気づいた。ねっとでは目的のサイトばかりが見つかるわけじゃない。しょうがないか。少し残念に思いながらも、もう一度検索画面に戻ろうとした。その時だった。

（ん、なんだこれ？）

サイトの下のほうまでスクロールさせて見えた日記に、こんな文章があった。

実は私もDTMはじめちゃいました。　ピアノをやってたので曲が作れないことはないのです。出来たら曲うpするよー。

（DTMって、何？）

## 一

翌朝、教室に友人の鳴瀬（なるせ）が入ってきたとき、僕は声を張って尋ねた。

「鳴瀬ってギターやってるよね？」

「ん、まあね」

かばんから教科書類を出してから、鳴瀬はこちらを向いて言った。相変わらず端正な顔立ちをしている。すがすがしさを感じさせるその風貌は女子に人気が高いらしい。しかもさっき言った通りギターを弾けるのだ。うらやましいぜ畜生。

いきなりだが本題を切り出す。

「なら曲作れるよね？　作り方教えて！」

すると鳴瀬は少し困惑した顔をして、

「今度は作曲に興味を持ったのか。何回お前の趣味は変わるんだよ」

「別にいいじゃん。昨日 DTM なる存在を見つけて調べて、やりたくなっただけだよ。ただ……」
「DTM か。大方曲が思いつかなくて早々に挫折したってわけか。フッ」
「笑うな！　素人に曲が作れるわけがないだろ！」
そう。それが大きな壁なのだ。昨日のことを思い出す。
wiki で調べたところ、DTM とはデスクトップミュージックの略で、パソコンで演奏する音楽、或いは楽曲制作の総称らしい。あの初音ミクもこれに属する。
一番言いたいのは、DTM 最大の特徴はパソコン一台あれば作曲が可能だということである。それは同時に、楽器が演奏できなくても曲を作れるということだ。
それに僕は興味を引かれ、すぐに DTM に関するサイトを開いた。このとき、作曲をするとはどういうことなのか、僕はこれっぽっちも理解していなかった。
サイトには DTM の基礎知識や MIDI なるものの説明、それからあれば便利という機材の紹介、各楽器の打ち込み方など、初心者にはありがたいほどたくさんのことが載ってあった。おかげで覚えるのは一苦労だったが、分かるところだけ読み終えて確信した。
（これなら僕にも出来る！）
今更ながら、そんなわけないと気づけなかった僕は馬鹿だと思う。
さあ曲を作ろう、ということでダウンロードした DTM ソフトを起動する。
見ると、画面左側に横向きになった鍵盤がある。そこから右側のピアノロールというところでマウスをクリックすると、鍵盤に対応した音が入力される。このソフトだと紫色のバーが出てきてその音を画面に示している。ちなみに、バーが長いほど音の長さも長くなるらしい。
（おおーピアノの音だ。すげー。なんか感動するな）
といっても、サイトにはリズムから作ろうと書いてあったので、遊びを中断してリズムの入力画面を出した。
今度は鍵盤ではなく、英語でドラムの名前が何十個も表示された。kick とか snr とか書いてある。ドラムは全然わからないが、ひとまずサイトの説明どおりに打ち込んでみた。
だが、
（おい……めちゃくちゃ大変なんだけど、これ……）
それもそうだ。マウスで一音一音入力するのだから。同じ部分はコピペで済むが、違う箇所はそうはいかない。
サイトに示されたものを入力するだけでえらく時間を消費してしまった。これが DTM の大変なところだと痛感した。
さらに追い討ちをかけたのは、その後だった。
ドラムの打ち込みを終えてひと段落したところで、試しに曲のメロディーを作ろうとした。ただの一般人にも曲の一部分くらい作れるだろうと、高をくくっていた。
だが、
（……どうしよう、思いつかない……）
それから数時間、パソコンとにらめっこを続けていたが、頭をよぎったのはメロディーではなく、眠気だった。
ついに、僕はあきらめた。
「まあこういうことがありまして～」
「よくあることだな」
「……」
苦労話を一刀両断されてしまった。だがくじけない。
「そんな哀れな僕のために少し作曲について教えてくれませんか？」
「曲を作れないことはないけどプロのレベルを要求するなよ。それから……まさかタダとは言わないよな」

ニヤリとこちらを覗き込む。うわ、金でもほしいのかよ。
「それならなんか奢ってあげるよ」
五百円以内に収まるなら何でもいいか。そう思っていたら、
「じゃ本一冊買って。ちょうど欲しいのが発売されたばかりなんだ」
本を奢る、って日本語としておかしいよ鳴瀬。本は食べ物じゃない。
しかしここで拒否したら手伝ってくれないだろう。勉強だってしなくちゃいけないから鳴瀬だって忙しいはずだ。
「分かったよ、買うよ。ただし後払いな」
「いいよ。すぐに完成させるから」
案外返事は早かった。やはりそれほど本が欲しかったのだろうか。まあいいや。ともかくこれで曲を作ることができそうだ。
ひとまず目標としては一曲だけでもきちんと完成させることだ。それくらい出来なければ、こんな僕でもプライドが傷つく。途中で放り出すわけにはいかない。
今回は、できるだけ長く続けたい。そしてちゃんとした趣味としてやっていきたい。もう三日坊主はこりごりだ。
「そうか。ありがと」
「ところで、上原」
鳴瀬がいきなり真顔になって尋ねてきた。どうしたんだろ？　やっぱ無理とか言い出すのではないだろうか。
「ん、何？」
しかし返ってきたのはそんなドタキャンの台詞ではなく、敵に不意打ちを仕掛けて放った矢のようなものだった。
「お前、本当に曲作りたいの？」
なんだろう、この感じ。声のトーンが低いような気がする。いや確かにそうだが、鳴瀬は僕に、ただやりたいだけなのか、それとも本当にやる気があるのか聞いてきたみたいだ。
勝手な憶測だけど、そんな気がした。ならばこちらも真摯に答えなくては友人同士といえど失礼に当たるだろう。
「やるって言ったらやるよ。もちろん本気で。なんてったって趣味は楽しく全力でやるものだからね」
生意気な口調になってしまったが、まあ気に病む必要はないだろう。
しばしの沈黙。鳴瀬は表情ひとつ変えずこちらに眼差しを向けている。僕も目をそらさず、鳴瀬の目を見返す。耳をすますと、いつの間にか生徒たちのしゃべり声が増えていた。もうすぐ朝のチャイムが鳴る。
そして、
「分かった」
「おう」
直後、朝のチャイムが僕と鳴瀬の間に響き渡った。僕はその聴きなれた鐘の音があたかも試合開始のゴングみたいに感じられた。だってまさにこの瞬間から、僕と鳴瀬による作曲が始まるのだから。

## 二

学校が終わってすぐに僕たちは帰宅した。鳴瀬も僕の家に直行すると思いきや、ちょっと必要なもの持ってくる、と言って自宅へ戻った。近所なのでそう時間はかからないと思っていたが、十五分も予想よりオーバーしてやってきた。
「すまん、探すのに手間かかった」
鳴瀬はリュックサックを背負っていた。しかし驚いたのは鳴瀬の両手にキーボードが抱えられていたことだ。カバーとかしなくていいのかと思ったが、そんなことよりも気になるのは。
「鳴瀬、キーボードも弾けるのか？」

「え、知らなかった？」
なんと鳴瀬はキーボードも弾けるというのだ。
「もしかして他にも楽器弾けるのある？」
「んー、EWI とか」
「EWI？」
初めて聞いた楽器の名前だった。見せて欲しいと伝えると、後で使うから楽しみにしてろ、と言われてしまったので、今は忘れることにした。
部屋に入ってパソコンの電源を入れる。すると鳴瀬がリュックサックから何かのコードと謎の銀色の物体を取り出した。
「その銀色のやつって何？」
「UA-25EX。ちなみにこれもう売ってないから貴重だよ」
「日本語でいいよ」
「USB オーディオインターフェースって言えば分かるよな？」
「だから日本語でいいよ」
「フッ、分からないなら素直に言えばいいのに」
「なんだとッ！」
いちいちムカつく奴である。けど分からないのは確かなので悔しいが教えてもらうことにした。
鳴瀬によると、この UA-25EX は USB オーディオインターフェースといって、持ってきたキーボードとパソコンを繋ぐためのもので、音の信号のやり取りに必要らしい。そういえばサイトにオーディオインターフェースという名称が出てきたかもしれない。しかし意味の分からない難しい言葉が頭に残っているほど僕は賢くないのだ。
デスクトップが表示されたところで、鳴瀬はなにやらコードをつなぎ始めた。手伝えるはずもないので、僕はひとまず DTM ソフトを起動した。しかし、
「ああ、それアンインストールしていいよ。こっちにもっといいのがあるから」
マジかよ……。たった一日しか使わなかったが、ちょっぴり名残惜しい。昨日打ち込んだドラムの音を思い出しながら、アンインストールした。
デスクトップにひとつ空きができたところで、鳴瀬が CD-ROM をパソコンに挿入し、新しいソフトをインストールし始めた。
「SONAR って分かる？　この UA-25EX に付属でついてきたんだ。俺はほかにいい DTM ソフト持ってるからこれはまだ未使用。折角だから上原にあげる」
どうやら SONAR という名前の DTM ソフトのようだ。てっきり魚群探知機の方を想像してしまったことは黙っておいたほうが良いだろう。またフッ、と鼻で笑われるに違いない。
数分かかってインストール完了。早速起動する。
そこで僕は思わず口をポカンと開けてしまった。さっきアンインストールしたものよりも、そもそも画面自体が大きく異なっていたし、選択する項目がやたら多い。鳴瀬は無表情で操作を進めているが、僕は見ていても何も分からなかった。ただぼおっとしていただけだった。
「おーいひとまず準備終わったよ」
画面には昨日見たピアノロールが映っていた。そしてパソコンの椅子に座っている鳴瀬の膝の上にはキーボードが乗っていた。キーボードといっても、パソコンのではなく、楽器のほうのだ。
「適当に弾いてみる。問題なければきちんと音が入力されるはず」
キーボードからは二本のコードが UA なんとかに伸びていて、さらに UA なんとかから USB がパソコンに刺さっていた。これで音の信号が伝わるのか。
そして鍵盤がひとつ叩かれた。
それと同期して、パソコンのスピーカーから音がひとつ聞こえた。

ちゃんと伝わったのだ。
「すげー鳴瀬天才！」
思わず声を上げてしまった。鳴瀬には無視された。
「よし、問題ないな。あ、それから少し指慣らしさせてくれない？　弾くの久しぶりだから」
指慣らしとは上級者きどりだな、なんてふと思ってしまった。本人の口から言われるまで鳴瀬がピアノを弾けるなんて知らなかったのだから。
まあ折角の機会だ。その実力確かめてみようじゃないか。下手だったらヘタクソとさけんでやろう。
「いいよ、好きにどうぞ」
いきなり弾くのかと思ったが、鳴瀬は鍵盤をじっと見つめはじめただけだった。精神統一でもしているのだろうか。しかし間もなく、沈黙していた両手をふっと構えて、音を紡ぎ始めた。
指の動きはゆったりとしていたが、それが熟練の指使いであることは、素人の僕でも見て取れた。曲自身の感情を表現するかのように、時に強く、時に弱く力を加えている。どこかや優しさと懐かしさを感じさせる旋律だった。聞いたことはない。でも、これはいい曲なのだと自然に感ぜられた。
（待て待て待て、こ、こんなに上手いのか……）
音楽の先生がピアノを弾く姿は何度も見てきたが、こうやって歳の近い奴が間近で弾いているのを見るのは初めてだ。新鮮な気分に浸る。
曲は終盤を迎える。そこで僕は驚いた。サビであろう部分を繰り返し弾いたところで、突然ジャズの曲調に変化したのだ。なんなんだ、この曲は。言うまでもなく、僕はジャズに詳しくなどない。けれど感じるのだ。ジャズっぽいと。
やがて鳴瀬の指は鍵盤を押したまま止まり、離した。同時に、部屋を縦横無尽の如く飛び回っていた音も、彼方へ去ってゆく鳥の後姿のように、ゆっくりと消えていった。
鳴瀬がこちらを振り向く。
「やべー最後のアドリブミスったよ。聞いてて変だったでしょ。って上原、なんで口なんか開けてるんだ？」
「あ」
言われて気づいた。あまりの凄さに曲の途中から口を開けながら聞いていたんだった。でもそれを言うのは恥ずかしかったので、
「ああ、ミスは良くないね。日々の努力が足りないからこうなるんだ。肝に銘じておけ！」
虚栄を張ってしまった。見苦しいぞ、自分。
ふと鳴瀬を見ると、ため息をついて、お前何様だよ、と呟いている。ごめんなさい。
「とにかく、この程度は俺弾けるから、多少難しい曲を作ろうとしても大丈夫だ」
「頼もしいな。それじゃあ早速作ろうか！」
「はいよ」
そう返事した鳴瀬は、リュックサックからノートとシャーペンを取り出して、僕の机に置こうとした。だが、机を見てからこう言った。
「……机汚いんだが。もっと整理しろよ。てかノート置く場所くらいあってもいいんじゃないのか？」
「男子高校生の机なんてこんなもんでしょ」
「フッ、俺の机はもっときれいだぞ」
ムカついたので心の中で舌打ちをしてから、机にある本やらプリントを片付けた。鳴瀬はノートを机に置いて、椅子に腰掛けた。
「僕の椅子なんだけどね」
「別にいいだろ」
教えてもらうのは僕のほうだけど、やけに生意気だと思うのは気のせいだろうか。

少し目を細めて鳴瀬を見ていると、彼はシャーペンを持ちながらこんなことを聞いてきた。
「どんな曲を作りたいのか教えて。出来るだけ細かく言ってくれればありがたい」
成る程。曲の構想を練るわけか。だがそう言われても、僕の頭の中ではさっきの鳴瀬が弾いていた曲しか思い浮かばない。
いつもウォークマンで聞く曲とはかけ離れたものだったが、僕はその曲に惚れてしまったのかもしれない。
「さっき鳴瀬が弾いていた曲みたいなのを作りたい」
のちに、僕はこの一言が本当の始まりであることを思い知らされるのだ。勿論、今の僕が知る術など全くないが。
「え、あーゆーのがいいのか？」
疑問の言葉を言った割に、鳴瀬の顔は満面の笑みを浮かべている。恐らく、自分の好きな曲が他人も気に入ってくれたのが嬉しいのだろう。
「うん。初めて聞いたけど、いい曲だな～、って思ったから」
「いいセンスしてるな」
それって自画自賛になるんじゃないのか？
「あれはTAKARAJIMAって曲。今弾いたのは俺がピアノ用にアレンジしたものだ。曲自体はTHE-SQUAREってグループが作ったんだが、知らないよな」
呆れた眼差しをこっちに向けるな。
「そんなのはいいから、ともかくああいうのが作りたい」
ここで鳴瀬は腕組をして首を傾けた。かすかにうーん、と悩みの声を発している。何か問題でもあるのか。
「作曲教えるとか言っちまったけど、これはお前には無理だな」
断言されてしまった。だがここで僕の負けず嫌い精神が異議ありと申し立てる。
「やってみないと分からないぞ。」
「いいや、無理だ。もっと簡単なのを作ると俺は思ってたからな。俺なら作れないこともないが、
お前じゃ論外。」
そこまで言われては仕方ない。まあ、そもそもプロレベルの曲を素人が作るなんて無理な話だ。でもやっぱり、
「……頼むよ、鳴瀬。僕はさっきの曲に感動した。だから僕も作りたいんだよ」
「と言われてもなあ……」
鳴瀬の表情は難しそうなままだ。クソッ、やっぱり無理なのか。また中途半端で放り出すのかよ。まだ音一つ打ち込んでいないんだぞ。ここで終わったら、情けなさ過ぎる。
僕は無意識に歯軋りしていた。もう、金輪際だった。飽きてすらいないのに、やってすらもいないのに、やろうとしていたことを投げ出すのは。
無意味な葛藤をしていると、ついに鳴瀬が口を開いた。
「ならこうしよう。打ち込みは俺がやる。そんでお前は俺に指示するんだ。もっと明るい旋律にしろ、とか、ギターの音が目立ちすぎるから音変えろ、とか。そうやって出来た曲は、お前が作った曲だって堂々と言えるんじゃないか？」
「いや、でも……」
それじゃあいくらなんでも鳴瀬に悪い。それに、自分で作ったという実感が果たしてあるのだろうか。
「俺もアドバイスはするぜ。間違いにはツッコミも入れる。ただ、そこに俺の意志は入らない。お前の感性とかセンスで作られるお前自身の曲だ。それに、どの道お前はDTM初心者だから、俺を参考にして勉強したらどうだ」
「う～ん」

よく考えてみると、鳴瀬の言うこともっともだ。曲をイメージするのが僕で、それを具現化するのが鳴瀬。成る程、これなら作曲したのは僕になるのかもしれない。ついでにDTMの勉強にもなる。

「鳴瀬は、それでいいのか？」

「もちろん」

またもや了承の返事がすぐに返ってきた。そこまで僕に協力する意味が分からない。なんでだろう。

しかし折角やってくれると言うのだから、そんなことは気にしないでおこう。

「了解。それでいいならそうしよう」

ここで、やはり僕は引っ掛かりを感じた。やっぱり鳴瀬の言い分には無理がある。当たり前のことだけど、これから作る曲は僕が作るんじゃなくて、僕たちが作るのだと。僕の曲ではなく、僕たちの曲なのだと。九割は鳴瀬が作るようなものだけど、一割しか僕は作らないようなものだけど、合わせないと十割にならない。

鳴瀬は、あくまで作曲するのは僕であると言っていた。だが、そんなわけがない。僕一人では大層な曲は作れないし、貧弱な曲しか作れないだろう。それにDTMを殆ど扱えていない。

プロのアーティストもそうなのだろうか。一曲のために様々な人の協力を要する。完成した曲の作曲者の名義がアーティスト自身だとしても、編曲者や作詞者、プロデューサーなどがいなければ、その曲は作曲者の頭の中でしか生きられない。

これから作るのは、僕の曲じゃない。僕たちの曲だ。それが完成したとき、きっと趣味以上の何かを得ることができる。目の前にある二つの瞳を見ていると、そんな予感がした。

## 三

その日はTAKARAJIMAという曲を基にして、これからどう作曲するのか鳴瀬から教えてもらっただけで終わった。具体的には、曲をまとまりごとにA、B、C、と分けて、まずAを、次にBを、というように作っていくとのことだった。A、B、C、というのはイントロやAメロ、サビなどとイメージしてもらえればいい。

ただ鳴瀬は、「曲を部分ごとに分けるべきじゃないんだがな。曲は曲で一つのものだから、俺がお前にやらせる方法は好みじゃない。ただ、このほうが分かりやすいだろ？」と言っていた。深いようなそうでないような。

それから、改めてどのような曲にしたいのかを聞かれた。TAKARAJIMAみたいな曲がいいともう一回言ったら、あからさまに舌打ちされた。しょうがないので、じゃあ聞いてて楽しくてヤッホーイってなるのがいい、と答えた。今度は舌打ちされない代わりに、例の哀れみの目で見られた。なんだんだよ。

次の日になって、今度は楽器編成を決めた。曲のイメージを基にして鳴瀬が選んだ楽器の中から使いたいものを選りすぐるのだ。ここで僕は鳴瀬チョイスを無視して、オーケストラ風にしたいと要求した。が、オケ曲はかなりの労力が必要で大変だ、とか、そもそも俺は管弦楽法を習っている途中だから無理、と即座に却下された。余談だが、管弦楽法とはオケ曲の楽譜を書くための技法らしい。初めてその言葉を聞きました。

激論の末（僕があれこれやりたいと言って全て却下されただけだったが）、使う楽器は、ピアノ、エレキギター、ベース、ピアニカ、シンセサイザー（ただし音はいくつかある）、ドラム、そして謎の楽器EWI。早く詳細を教えて欲しいものだ。

その次の日になって、ようやく本格的にDTMをやり始めた。鳴瀬

も一般的なやり方で、ドラムから音を打ち込んでいく。今日はひとまずA のところを完成させるようだ。ちなみに僕は DTM 上達のために鳴瀬を見て学んでいるだけだ。手伝うことは鳴瀬にお菓子やジュースを提供することぐらいだ。そこ、パシリとか言うな。

ドラムは基本的に繰り返しが多いからコピー&ペーストする箇所が多く、他の楽器より比較的早く終わる。はずなのだが、

「何でコピペしたところいくつも修正してんの？　そんな必要ないじゃん」

何故かコピペしたところを丁寧に細かく作り変えているのだ。しかも小節の半分以上をも。コピペの意味がないような気がする。

「いや、おかず作ってるだけだが」

ああ、おかずか。ならしょうがないな。うんうん。……え、おかず？

「料理は台所でしろよ」

言う前に気づくべきだった。鳴瀬が脈絡のない言葉を発したときは大抵（というかもはや全て）僕がその言葉を知らなくて恥をかくパターンであることを。

言うまでもなく、フッという聞くだけ損な擬音が聞こえた。悲しくなんかないぞ。

「おかずってのは、ドラム叩いてるときに少し変化をいれることだ。ジャズとかフュージョンに多用される」

「……解説ありがとう」

悲しくなんか……ない、ぞ。ぐすん。

細かい作業にも関わらず、ほんの十分すら経たないうちにドラムの打ち込みが完了した。それから、ピアノ、エレキギター、ベース、シンセサイザーと順番に音を挿入していく。

ピアノロールに色のついたバーが増えていき、曲に命が吹き込まれる。早く聴いてみたい。

最後に、主旋律であるピアニカのメロディーラインが入力され、そして、

「ふぅ～。ひとまずA は終わったぞ。あ、そこのコーラとって」

鳴瀬にコーラの缶を渡して、僕はすぐさま、

「ねえ聴かせて聴かせて！」

と駄々をこねた。ピアノロールを見ただけではどんな曲になったのか分からない。

左手でコーラを飲みながら、鳴瀬は右手でマウスを操作し、三角形の再生ボタンをクリックした。目を閉じて、耳に意識を集中させる。

ピアノとドラムの語り合いが聴こえてきた。最初の小さめの音は徐々に大きくなり、メッゾピアノからメッゾフォルテへと移行する。

そこへエレキギターの歪みとベースの地鳴りが加わり地殻変動を起こすと思いきや、同時にストリングスのようなシンセサイザーのなめらかな波が全てを調和させ、曲は四方八方揺れながらも平穏を維持する。

ドラムのはっきりとしたフィルインが決まると、ピアニカが他の楽器の先頭に立つように歩き始めた。エレキギターやベースにピアニカが果たして合うのか不安だったが、そんなものは曲の歩みに踏み潰された。

ここでA の部分が終了し、曲の足の動きが止まった。

僕は笑っていた。鳴瀬も満足そうな笑みを浮かべていた。

それから一週間ほど過ぎた。B、C、と完成していき、残りはG だけになった。ただ、D から謎楽器 EWI が使われるはずなのだが、そこはいまだ空白のままだ。多分全部終わってから生で録音するのだろう。

それにつれて、僕もいろいろなことを覚えていった。DTM の使い方だけでなく、ちょっとした作曲技法も鳴瀬から教わった。

「コールアンドレスポンス？」

「ああ。一人が問いかけて、もう一人ないし他全員がそれに答えるような演奏をすることだ」
「ちょっとよくわかりませんね」
「なら聴いてみろ。なんとなくそんな感じがするはずだ」
聴いてみると、ああ成る程、と思った。上手く言えないが、メロディーを途中のまま放り出して、それを別の楽器が引き継いで演奏するのを何回か繰り返している。まさにコール（呼びかけ）アンド（と）レスポンス（返答）。
他には、
「この響きいいね」
と出来たメロディーを聴いているときに言うと
「よく使うものだよ。分散和音の一種でアルペッジョって言うやつ。似たようなものだとアルベルティ・バスとかがあるけど、知らなくていいや」
と答えてくれた。ドミソという和音を例とすると、同時にドミソを弾くのではなく、ド、ミ、ソと順番に分けて弾くものだ。
「そのアルペッジョっての綺麗だからもっと使ってよ」
「いや、この曲だとあんまり多用はしないほうがいいかな。あくまでここぞというときに装飾的に使うのがベスト」
とも言っていた。東方というゲームの曲ではかなり使われているらしい。あとで聴いてみよう。
まだまだ覚えたことはある。
「そのドラムの打ち込み間違ってると思うんだけど」
ピアノロールを見たとき、音がやたらずれた位置にあったので鳴瀬に言ったところ、
「これはこれでいいの。ポリリズムにしてるから」
「ポリリズムって何？　そんな名前の曲があったような気がするけど」
「曲名じゃないぞ。俺が言ったのは、複数のリズムが同時進行で組み合わさって演奏されることだ」
と彼は答えて、別にピアノロールを開いて新たにドラムの音をすぐさま打ち込み、
「ひとまずこれ聴いてみろ」
と言ってきた。というわけで再生ボタンをクリック。四拍子で叩かれるトン、トン、トン、トン、というドラムの音が聴こえてきた。僕も心の中でそれに合わせてリズムに乗る。至って普通のリズムだが、ある部分にきたところで一気にずれて、四拍子ではなくなった。リズムに乗っていた僕は途中でついていけなくなった。
「やっぱり間違ってるよ」
すかさずつっこんだ。そうにしか聴こえない、というか感じられない。が、
「あのな、よく聞け。途中から聴こえてきたのは実は五連符だから、あれは最後まで四拍子のままなんだ。俺が手拍子で四拍子に合わせるから、五連符のところをもう一回聴いてみろ」
怪しがりながらも僕はもう一回聞いてみた。今度は鳴瀬の手拍子も聴こえる。そしてついに、ずれていると僕が言ったところにきた。
すると不思議なことに、ドラムの音は鳴瀬の手拍子四回につき五回鳴っており、決してずれてなどいなかったのだ。何故か規則的になっている。
「なんか不思議なリズムだな」
「そうだな。DTM だからたくさん使っているけど、実際は拍の取り方が難しいから演奏するとメチャクチャ難しいんだ。これは簡単な例だけど、BAD MOON くらい難しいレベルの曲になると、プロですら弾きたがらないんだ」
「へぇ～」
とまあ、いろいろなことを僕は知ったのだった。あと、シンセサイ

ザーは音を作る楽器だということも学んだ。元からある音を他の楽器のように弾くだけだと思っていた僕にはびっくりすることだった。

そしてある日、ついに、鳴瀬がEWIを持ってきた。

「フルートみたいだな」

あれだけ見るのを楽しみにしていた僕だが、いざ見るとそういうセリフしかでなかった。

「全然違うんだけどね……」

そんなにがっかりしないでくれ。

しかしパソコンを起動し、いつものセッティングを終えると、鳴瀬は普段以上にやる気の満ち溢れた表情になっていた。

「弾いている間は絶対に邪魔するなよ？」

「分かってるって」

そういうと、いよいよ録音を始めるのか、EWIを両手で持ちながら、そのボタンをクリックしてくれ、と僕に頼んできた。

いつもの再生ボタンとは違うボタンだ。鳴瀬に目配せをすると、こくりと首を縦に振った。僕もそれにうなずいて、そしてボタンをクリックした。

A、B、Cと曲が進み、ついにDのところになった。

そのとき僕は、鳴瀬が初めて僕の前でキーボードを弾いた以上に、驚愕した。

突然鳴瀬の指が高速で動き出した。それに伴ってシンセサイザーで作られたような音が聴こえてくる。速い、とにかく、速い。ここまで人の指が速く動けるのかというくらいに、速かった。

しかもメロディーは適当ではなく、きちんとしたアドリブだった。ジャズを彷彿とさせながらも、ロックのようなかっこよさも兼ね備えており、僕は自分自身が燃え上がるような衝動に包まれるのを全身で感じていた。

今、鳴瀬はこの曲の支配者になっている。アドリブであるDが終わると、規定のメロディーを弾くEに突入したが、それでも、主旋律のピアニカに勝るぐらいにその存在感を示していた。

二回目のサビであるFでピアニカとユニゾンしたとき、ボルテージは最高潮となった。それまで以上に膨れ上がったグルーヴ感はとどまることを知らず、部屋という空間に溢れていっぱいになる。

そしてラストのサビ、G。鳴瀬のアドリブが満を持して炸裂した。D以上に暴れまわるEWIの音は、まるで新世界を創造する神のように神々しく感じた。神がかりしているのだ、鳴瀬には。彼も興奮しているのか、体をくねくねさせながら演奏している。それは音楽と人間が一体化している様を表しているようだった。

曲の終焉を告げたのは、僕が録音の停止ボタンを押したクリック音だった。

「……完成、だね」

「ああ、完成だ」

この日、ついに僕たちの曲は、完成した。

## 四

それから、僕は曲にG-Fusion Songという名前をつけた。Gは曲の中でGのところが一番かっこいいからで、Fusionは単にフュージョンの曲だからで、Songはなんとなくつけると語感がいいから。

GとFusionの間の-が気になると鳴瀬が質問してきたが、それについては……うん、あれだ。説明すると長くなるから後で話すことにした。

個人的に、曲の完成度はプロ並に高いと思う。TAKARAJIMAに

も引けをとらない。
だが、その思い込みによって僕があんなことをしたせいで、ちょっとしたゴタが起こってしまったのだ。別にたいしたことはないことなのだが、人の音楽観はいろいろあるのだと思った出来事だった。
それは学校でのことだった。
昼休みに、僕はウォークマンをポケットから取り出した（持ってくること自体校則違反だが）。完成した曲、G-Fusion Songをクラスの友達に聴かせたかったからだ。
男女ともにそれなりの程度の交友関係があるので、クラスのほぼ全員に聴かせることが出来た。何これカッケー！、と言ってくれた人もいれば、微妙……、という評価の人もいた。反応に一喜一憂しながらも、誰かに作った曲を聴いてもらうのはとても嬉しい。
だが、ここで調子に乗るべきではなかった。聴かせてはいけない人物が、このクラスにはいた。
彼女の苗字は、平井。名前は知らない。
合唱コンクールでいつもピアノ伴奏をしており、噂だと音大最難関である東京藝大を目指しているだとか。
悲しいことに、僕が彼女について知っているのはこの程度だ。故に彼女の趣味嗜好好みなど分かるはずもない。
知っていれば、僕は彼女に聴かせることなんてなかったのだ。
「ねえねえ、平井さんも聴いてみてよ」
そのセリフが命取りだった。
「嫌だ」
虚を突かれる思いがした。ただ聴くだけなのに拒む理由がどこにあるのだろうか。
そこで素直に引き返したほうがよかったのだが、あきらめきれなかった僕は、
「まあまあいいじゃん。はいイヤホン」
すると彼女はしぶしぶイヤホンを手に取り、耳に近づけた。汚いので入れようとはしなかったが。
僕は再生ボタンを押す。それから、今頃曲のこのあたりだろうと予想しながら彼女の様子を眺めていた。
しかし、曲が一分も経たないうちに彼女はイヤホンを僕に返した。まだ終わってないよ？
「もういい。つまらない」
そのぶっきらぼうな一言はあまりにもショックだった。クラスの友達にあまり良い評価を貰えなかったときと違って、何か過剰に曲を否定された気がした。
言い方というものがあるだろう。怒った口調で僕は彼女に問いかけた。
「ちょ、そこまでつまらないのか？　どこがつまらないのか言ってよ」
「全部」
「なんだと！　適当なこと言ってんなよ」
すると、彼女は表情一つ変えず批判をまくし立てた。
「まず曲の方向性がはっきりしない。あちこち動きすぎてるから聞いてて疲れる。そしてそのわりにはつまらない。馬鹿みたいにテンション使いまくってるからかしら。あとピアノはちゃんと録音するべき。音が機械っぽくて気持ち悪い。それに……」
と、僕の精神を挫くには十分すぎるほど辛辣な言葉を浴びさせられた。時々知らない音楽用語使ってくるし。なんなんだよ、ちくしょう。
これに気づいたのか、鳴瀬がこちらにやってきた。おお、救世主。
「あれ、ドイツ音楽至上主義者が何語っちゃってるの？」
ここから、鳴瀬対平井の論争もどきの貶し合いが始まってしまった。
「何それ、初めて聞いた言葉だわ」
「お前のことだよ。クラシックが音楽の全てじゃねえんだよ。全く、

他人の曲によくもまあそこまでケチをつけられるもんだ」
「わけの分からない和音弾いて喜んでいるような人には言われたくないわ」
「あの響きが理解できないとは残念な感性の持ち主だな。和声法とか対位法を信頼しすぎるなよ」
「理論は先人たちの集大成なのにそれを無視しろと？　バッカじゃないの？」
「無視しろとは言ってませ～ん。人の話はよく聞きましょう。ほんと頭固いね。だから提示部とか展開部とかの概念のない曲を受け入れられないんだよ」
「そこまで分からず屋じゃないわ。ソナタが作れないから負け惜しみを言ってるだけでしょ」
「悪いが俺は楽式勉強したからそこらへんちゃんと理解してるぜ。なんなら今からリトルネロ形式の曲でも書こうか？」
　全然会話についていけない。が、僕がツッコミを入れるときがついにやってきた。
「つきあってられないわ」
「そうかい。ならとりあえずあの曲作った上原に謝れ。お前ごときにいちゃもんつけられたんだからな」
ん、あれ？　なんかおかしくないか？
「はあ？　何で謝らなきゃならないのよ？」
「ふざけるなよ。もう一度言うが、あの曲を作ったのは上原だ」
ああ、そういうことか。鳴瀬、それは違うよ。あの曲は僕が作ったわけじゃない。僕だけが作ったわけじゃない。
「違う、違う！　作ったのは僕じゃないぞ！　僕たちだ！」
そうだ。前にも思ったことだが、これは僕だけが作ったのではない。僕たちが作ったのだと。
鳴瀬は親切心からか、自分はただ手伝っただけだと思い込んでいる。だが、それは僕の立場で言えるかは分からないが、絶対に間違っている。
　鳴瀬の協力がなければ曲は作れなかった。僕の意志がなければ曲は作れなかった。つまり、二人で、僕たちで曲を作ったということだ。
「鳴瀬、僕のために怒るな。自分のために怒れ。貶されたのは僕だけでなく、鳴瀬もなんだから」
　言ってから、かなりかっこつけたことを口にしたのだと気づいた。やべぇ、恥ずかしい。
　ふと見ると、このときの鳴瀬の顔はテレビで全国のお茶の間に流したいほどの間抜け面をしていた。無論、こんな顔は初めて見る。
　平井は、さっきの僕のセリフに対し、ウッザ、と正しい感想を告げてから、席を立ってしまった。もう帰ってくるな。
　とまあ、こんな出来事があった。
　ついでに語ると、その日の放課後に教室で鳴瀬が話しかけてきたのだが、
「悪かったな、首突っ込んで」
「いや、悪くないし、気にするほどのことでもないでしょ」
　そう返事すると、鳴瀬はフッ、と笑った。だがそれは、いつもの嘲笑とは違って、なんだか可笑しく感じられた。
　それから、彼はゆっくりと語りだした。
「……なんで平井があんなに罵詈雑言浴びせたのか、分かるか？」
「カルシウム足りないからじゃないかな？」
「違うわボケ。……あのな、それは平井が生きてきた『環境』が一番の原因だと俺は思う」
「ふむふむ」
「平井の家って音楽一家なんだ。母親はピアニストで父親は指揮者。業界じゃそこそこ有名なんだぞ」

「そうだったのか！　てかなんでそんなこと知ってるの？」
「同じピアノの先生に師事していた時期があったんだ」
「え、じゃあ鳴瀬も昔っから音楽をやってたの？」
「まあな。……話を戻すぞ。だから生まれたときから平井はピアノを強いられてきた。本人の意志とは関係なく。毎日八時間も練習させられ、遊ぶことも許されず、何度も腱鞘炎になりながらも、ピアノを弾き続けていた。恐ろしいぐらいにな」
「……」
ここまで聞いて、おどけていた気持ちは吹っ飛んでしまった。そんな辛い生き方をしていた、いや、させられていたのか。
「これが奴の『環境』だ。まあ、そのがんばりもあって今じゃ相当のレベルになったがな。だが、やはりクラシックしか聴いてこなかったから、J-POPとか俺の作るフュージョン曲を理解しがたいんだ」
「……」
「世の中ってのは不都合なことに、音大に行く人は必ず幼少の頃から親に強制的にピアノをさせられていたのが大半だ。だから音大に行きたい気持ちのある普通の中学生や高校生は『環境』を体験していないから、そのときから猛練習しても行けるのはレベルの低いところだけだし、入れても実力が足りなくて、将来音楽で飯を喰っていけない。『環境』に耐え抜いた奴らの中のさらにごく一部だけが、音楽家として生きていけるんだ。気持ちだけじゃ音楽は通用しない」
僕は、このときの鳴瀬が悲しそうに窓の外の景色を眺めていたのをはっきり覚えている。鳴瀬、お前はどういう人生を歩んできたんだ？
「だからさ、結局、楽しんだ者勝ちなんだ。音を楽しむのが音楽だろ？」
「そうだな。僕はあの曲作って、聴いて、すごく楽しいぞ」
「それが一番だ。最初、お前のやる気を確認して、俺はきっと音を楽しめるような曲を作れると思った」
「……なあ、鳴瀬」
「ん、何だ？」
「来月あたりにまた曲作ろうよ」
一瞬、鳴瀬が微笑んだように見えた。思わず僕も微笑んでしまう。
「いいけど、今度はお前も打ち込みやれ。あれ結構重労働なんだぞ」
「はいよー」
「あと本奢る約束だろ？」
「げっ、覚えていやがった。分かったよ、いくら？」
「二千円」
「ふざけんな！　よりによってハードカバーのを買うなよ！」
「お釣りは返すから、いいだろ？」
「そんなの当たり前だ！」
時計を見ると五時を回っており、教室から見える空は少し赤みがかっている。ようやく季節が秋だと実感できる頃になってきた。
大空を背景に黒の点が二つ三つ泳いでいる。カー、カー、という音が微かに聞こえてくる。おまえらいつも元気だな。
僕はこの光景をピアノロールに見立てようとしていたが、その前に無理だと気づいて、今度は楽譜に見立てようとした。だが、白色の雲と薄い赤色の空が五線譜に見えるはずもなく、真っ黒のカラスが音符に見えるだけだった。ここであきらめた。
隣で鳴瀬も同じ空を見ていた。僕のような想像はさすがにしていないだろうが、空に何か思いを馳せているだろうことははっきりと分かった。
右端の方を見ると、太陽と目が合った。この時間帯だと、眩しいとは感じなかった。
おい、昔の自分よ、聞いているか。僕は趣味なんてちっぽけなもの

以上のものを手に入れたぞ！
　そこの太陽もついでに聞いておけ。お前が夏至にいくら輝こうが、僕の見つけた輝きには何億光年とかけても敵わないぞ！
　そして空よ、そんな僕をこれからも見て、宇宙の歴史に刻み続けろ！
　それから、カラス。頼むから僕の家の近くで鳴くな。その声は異性にでも届ければいいんだ！

　悔しいけど、心の声はというものは届くはずがない。だが、僕の中では届いたことになっている。今そう勝手に決めつけたのだから、少なくとも僕の中では届いたのが事実になったのだ。ざまあみろ。僕はニヤリを笑った。
　不審に思ったのか、鳴瀬がこちらを見た。すると、彼はフッ、と口を軽く歪めて言った。今回は嘲笑なのだろうか。それとも、あの可笑しい笑みなのか。はたまた、別のものなのか。僕には分からない。
　お返しに、僕はいつもの鳴瀬の嘲笑を真似してフッ、と言い返した。全然似ていなかった。すると鳴瀬は声を上げてハハハッ、と笑った。なんだか僕も無性に笑いたくなったので、二人して笑いあった。
　完全下校の時刻を告げるチャイムが鳴った。僕はその聴きなれた鐘の音があたかもKOのゴングみたいに感じられた。勝者は僕と鳴瀬。だが敗者は誰だろうか。
　もしいるとしたら、それは昔の僕だろう。笑いながら外の景色を見て、そう思った。

## あとがき

こんにちは、新道知樹と申します。この度文芸部部長となりました。よろしくお願いします。

今回は音楽小説を書きました。はっきり言って曲の描写には苦労しました。時々表現が過大な部分もありますが、どうか暖かい目で、そういう表現もアリかな、と思ってくだされば幸いです。幸いが一番なのでそう思ってください。ともかく、改めて自分の作品を見ると、少なくとも去年よりは成長したな、と思うことができました。良かったです。

さて話は変わりますが、私はこの作品において「フュージョン」という音楽ジャンルを取り入れてみました。単に自分の趣味であるからです。

全くご存知でない方がほとんどだと思われますので、フュージョンについて説明します。スルーしてもらっても結構ですが、ぜひこの説明を読んでフュージョンについて少しでも知っていただけたら嬉しい限りです。

「フュージョン（Fusion, Jazz Fusion）は 1960 年代後半から現在に至るまでのジャズを基調にロックやファンク、R&B、電子音楽、ワールドミュージックなどを融合（フューズ）させた音楽のジャンルである。時には以下のようにクロスオーバーとも、AOR とも称されるときもあるが、一般的には、ジャズジャンルから確立されたものの一種に位置づけされている。」

「」内はウィキペディアから引用しました。この二文がまさにフュージョンの概要なのですが、私なりに補足説明させていただきます。

日本で有名なフュージョンバンドを紹介しますと、T-SQUARE、CASIOPEA、DEMENSION の三つが主に挙がります。ことに T-SQUARE に関しましては、F1 の曲でお馴染みの TRUTH や、OMENS OF LOVE、そして作中でも出てきました TAKARAJIMA が特に有名です。いずれも私たちで言うお父さん世代の方々がよくご存知ではないかと思います。

しかし残念なことに、フュージョンは現在においてあまりポピュラーではありません。テレビでフュージョンバンドが演奏するような番組はめっきりなくなり、また新しい世代のフュージョンバンドの登場が減少し、その存在自体が薄れています。かわりに、今の日本では昔以上に J-POP が日本音楽のウェイトを占めているのです。それも今は侵略されつつありますが。

とまあ、日本についてのみ書くとこのようになります。海外のフュージョン事情には疎いので書きません。まあ、Jeff Lorber Fusion や、Joe Sample、Jorge Dalto は大好きですが。

あとがきの範疇を超えていないか非常に不安ですが、ひとまず説明は以上です。できれば、CD をご購入いただいてくだされば尚嬉しいです。

本当はこの「木々の語らい」にフュージョンについて書いた小論文でも載せようと考えていたのですが、夏休みの時間の使い方を誤ったがためにおじゃんとなってしまいました。いつか書きたいです。

最後に、ここまで読んでくださって真にありがとうございます。他の部員の皆さんの作品がまだまだありますので、ぜひ読んでみてください。

# クイズ日記（前編）

ホウカゴノテイオー

プロローグ

時は2022年夏、場所は宇都宮の病院。双子の兄弟が産まれた。それから半日、双子の姉妹も産まれた。神様の悪戯とは恐ろしいもので二組の双子の母親までも双子の姉妹であった。

兄弟の名前は佑介と康太。姉妹の名前は順子と由香子。この先いったいどうなることやら。

1～2027年(五歳)～

こんにちは、由香子です。まだ五歳なんですけど、大人並の会話ができるので今回の語り手に抜擢されたようです。ちなみに、夢は高校生クイズ出場です。

大人並の会話ができるということはテレビだって内容を理解できるし、クイズ番組だって問題の意味は分かりますよ。答えられる知識はまだないですけどね。最近のお気に入りはお昼のワイドショーなんです。変わった子どもだとよく言われます。

外で元気に遊んでいるのが、お母さんのお姉さんの息子の佑介と康太です。いつ見ても元気ですねえ。それで二人を見ながら本を読んでいるのは姉の順子です。少々体が弱いのが心配なところですが、今日は調子がいいようですね。さてさて、私はクイズ番組を見ましょうか。二十五枚のパネルを奪い合うあの番組です。三十分待っていただけますか？この番組は集中したいので。

・・・・・・ふぅ。あ、お待たせしました。この番組は一年半ほど見てますけど面白いものですね。いつか出場したいです。

「なんだ、またこれ見てるの？」

「それ面白いの？」

佑介と康太が来ました。やっぱり五歳の兄弟ですから、面白さは伝わってないんでしょう。最近はピタゴラスイッチがお気に入りのようですし。

「それなら次の見ようよ。パネルの色が変わるのもおもしろいよ。」

「そっかー。じゃあ次のとき呼んでねー。」

これでこの兄弟もクイズに興味を持つでしょうかね。持ってくれれば高校生クイズも夢じゃないです。

すぐにやってきました放送日。二組の双子がテレビの前でスタンバイしています。始まりましたね。今週も三十分お待ちくださいね。

・・・・・・終わりましたけど、反応が薄いかな・・・・・・。やっぱり早かったかな。まだいいか。

2～2032年(十歳)～

初めて四人でクイズ番組を見てからもう五年ですか。早いですねぇ。三人がクイズに興味を持ち始めて、多くのところから知識を詰め込み始めても一年が経ちまして、少しは解答者よりも早く押せるようになったんですよ。やればできるものです。そのためにどれだけネットサーフィンをしたことか・・・・・・。ただ「クイズ」と検索しただけでは遊びのクイズのサイトばかりでしてねえ。競技クイズではないんですよ。探しに探した分、厳選されたサイトばかりなんです。最近はこれを四人で読みあうだけで楽しくて楽しくて時間も忘れるほどで

す。
　毎年夏の終わりごろに放送される高校生クイズの参加も本気で狙っていますけど、あれは三人一組でしたね。どうしましょう。しかもこの栃木県で何年も全国大会連続出場してる宇都宮高校は男子校じゃないですか。ほんとにどうしましょう。

### 3～2034年(十二歳)～

　男子校の壁をどう乗り越えるかで悩み続けて早2年ですか。皆さんに言う必要もないところを省くと短いですねえ。
　時事ネタ探しのための「朝刊ざっと読み」ですごいもの見つけてしまいましたよ。見てください。『県教委、宇高・宇女共学化へ』ですって。えーと、ふむ・・・・・・宇都宮高校が「宇都宮第一高校」、宇都宮女子高校が「宇都宮第二高校」になるんですか。これで高校生クイズへの壁が一つなくなりましたね。……そうすると誰が一人チームには入れませんよね。余計深刻になってませんか？

### 3.5

　えーと、こちらは天国です。天国からお話しさせていただきます。あ、失礼しました。突然すぎましたかね。
　私、由香子は事故で皆さんの世を去ることになりました。飲酒運転に巻き込まれました。でも、佑介たちを見守れということでしょうか、成仏する気配がありません。だから天国というよりは狭間の世でも言ったほうがいいかもしれません。
　あら、そうするともめ事なく三人一組出来上がりじゃないですか。物事はまとまるところでまとまるんですかね。この三人についていけば参加もできるんじゃないですか？皆さんの世では誰一人として私が見えないのですからね。四人目になれるんじゃないかと、ひそかに期待しています。

### 4～2037年(十五歳)～

　皆さんの世と天国の狭間から由香子がお伝えしております。この世界は十分に年を取ってから来るべきですよ。私はもう成長しないんですよ。もうちょっといろんなところが成長してもよかったじゃないですか。悲しいですよ。
　おやおや、三人が高校の話をしてますねえ。聞いてみましょうか。
「二高の方が面白いと思うぜ。無名校が強豪をぶち破るってほうがいいじゃねえか。ロマンだロマン。」康太です。スリルを求めたがる子でしてねえ。ずいぶん手を焼きましたよ。
「やっぱり一高行くべきじゃないのか？高校生クイズで全国狙うには実績あるほうがいいんじゃないかと思うんだ。県外の強いとこも交流があるわけだし。由香子のためにも全国行ってやらないと。」佑介は優しいですね。私のことを考えてくれることは嬉しいですよ。
「でも、佑介さ。このままじゃ二高しか行けないよ？あと半年で一高レベルまで上げられんの？そこまで甘くないからね。」順子は自分にも他人にも厳しいです。確かに佑介の成績では一高はギリギリです。
「分かってる。康太も順子も十分な点数は行ってるんだよな。俺はちゃんとがんばるから助けてくれるか？」

「ふん、やっと腹くくったわね。私の特訓は厳しいけどあきらめるんじゃないわよ。」
「兄貴のスイッチは相変わらず遅いな。でも、今なら間に合う。俺もスパルタだからね、弱音吐くなよ。」
「お前ら、俺の体を壊すなよ。」
佑介はスイッチさえ入ればできる子です。これで安心ですね。のんびりと見守りましょうか。

5～2038年(十六歳)～

春です。康太と順子による地獄を抜けた佑介は無事に一高へと進むことができました。
もちろん康太と順子も一高です。「この三人で高校生クイズ」の夢はまだまだ続きますよ。

来年度に続く

あとがきという名の言い訳

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。読んでいただいた時間に合わせて、おはようございますとこんにちはとこんばんはも付けておきましょうか。名ばかり副部長ことホウカゴノテイオーです。平成22年度の宇高文芸部誌には、原稿が間に合わなくて載せなかったダメ部員でもあります。

さて、今回の話ですが、クイ研所属ってことでクイズ小説にしたつもりです。「つもり」というのは、本編を読めばわかりますけどクイズ要素ないんですね。何やってるんでしょう。本当はクイ研っぽい問題も載せるつもりでした。本当です信じてください。

それでは次回予告でもしますか。次回が「表現」を表すのか来年のこれを表すのかはわかりません。過大表現八割です。

佑介たちに襲い掛かるエリート集団！成仏されそうになる由香子！やっと出てきたクイズ問題！感動かつ衝撃の結末！……その他多数。

来年も読んでいただけたら幸いです。

# GOD BLESSING

日高　呑

某日　天界　神殿

天界の中央、城山の頂に存在する、レンガ造りの荘厳な建造物。
そのレンガの壁に、純度百パーセントのクリスタルグラスが叩き付けられ、破片をまき散らす。
「ちょっとアンタ、これ、背中にまでキスマーク付いてんじゃないのよ！」
「な、いや、違うんだ！　事故なんだよ、事故！」
背中にまでキスマークを付けている金髪の若い男が、光り輝く剣をかざす女から逃げ惑っていた。
「さっきから事故事故、んなごまかし通じないわよ！　頬首胸腕ときて今度は背中にキスマークつけやがってこの浮気者が！」
「待て！　待て！　包丁ならともかくエクスカリバーは洒落にならないよ！」
浮気した男が窓から飛び出した刹那、その窓枠ごと聖剣エクスカリバーが吹き飛ばす。
「え、ちょ、何その威力、エクスカリバーってそんなにつよ、っておうわあお！」
投擲槍よろしく投げられたエクスカリバーが目で追えない速度で飛び男の耳にかすった。
「こここここ殺される助けてえええええ！」
「逃げんなこの色情魔があああああ！」
逃げる男と追う女。飽くなき闘争、あるいは逃走が火ぶたを切った。

「というわけで、逃げてきました」
「神様……なにやってんですか……」
天界の居住区の一画にある、豪奢な一軒家で、神の訪問を受けた天使エゼキエルは呆れていた。
「奥様を怒らせないでくださいよ。この前も神様がウィンディーネと腕を組んで歩いていたとかで激怒して、八つ当たりにパウロをレーバテインで灰にしかけたんですよ？」
パウロとは、神の夫婦に使える天使にして使徒である。好きな食べ物はハンバーグである。

そして、レーバテインとは武器である。全てを燃やしつくす炎がうんたらかんたらという能力を持つ、八つ当たり屋喧嘩に使うには危険極まりない代物だ。

「レーバテインならまだましな方だろ。なんとか避けられるし、エクスカリバーと違って即死もしないでしょ。俺なんかこの前ミョルニル使われちゃったもんね」

「あの自動追尾武器を使われて、なんで生きてるんですか？」

「グングニルで相殺したよ。ヒビ入ったけど」

「……北欧から借りている武器をぶっこわさないでください」

「壊れても直せるでしょ？」

「修繕費で一年分の食費が吹き飛びますよ？」

「大丈夫、大丈夫。いざとなったら、リンゴ、億単位で創ってやるって」

「知恵の実だけで暮らせと？」

アホな会話をしているが、この二人は一応神と天使である。

「……リンゴで思い出したけど、この家、お茶はないの？」

「切れています」

エゼキエルは即答した。

実のところ、切れてはいなかったし、仮に切れていても神が訪問したのだから急いで買ってきてお茶の一つも出すのが礼儀だが、一事が万事この調子の神様に貴重なダージリンを出す気は起きなかったエゼキエルだった。本来ならば、即、不敬罪で堕天を強制されるところだが、今の裁判長ミカエルも神の蛮行にはほとほとあきれ果てているのを、エゼキエルは把握していた。

「それにしても、過激だなあ、あの女。別れた方がいいかな？」

突拍子もないことを言う神である。

「そんな物騒なこと言わないでください。神様の離婚となると責任問題や名門同士の派閥争いが……」

「ええー。縦社会って面倒だなあ……」

「創ったのはあなたでしょう。それに、そのヒエラルキーの頂点にいるから好き放題できるんですよ。食事とか女性とか」

「縦社会って素晴らしいなあ！」

「……」

天使エゼキエルは「とっとと死なねえかなこの神」と思った。

「それで、与太話をしに来たんですか？」

「いやいや、マイワイフから逃げるために来たんだよ」

「逃げると言っても、捕まって死ぬのは時間の問題では？　それに夜になれば職務上神殿に戻らないわけにはいかず、そこで死ぬでしょう？」
「なんで俺が死ぬって決めつけてんの……？　まあとにかく、俺は逃げる。絶対に捕まらない場所にな」
「いや、だから天界では女神様に分からない場所など……」
「それが、違うんだな……」
神は不敵に笑う。
そのにやけた顔を鬱陶しく思うエゼキエルだった。

六月八日　私立宇高学園高等部

青田聖司は、普通の高校生だ。身長一七六センチ、体重六〇キロ。髪は染めておらず、ピアス経験、喫煙経験、万引き経験、性交渉経験、以上の経験の全てがない、悲しいくらい普通の男子高校生だった。
（……そうだったはずだ。なのに、どうしてだろう）
声が聞こえる。姿が見える。なんかいる。
「あの、もしもし？　気付いていますよね？　天使相手に放置プレイですかこの変態高校生め」
人間の姿をしたのが空中に浮いていて、天使をかたっている……のが見える。金髪碧眼の少女だ。
どうやら見えるのは俺だけらしいな、と青田は推した。こんなのが授業中の教室に浮いてるのに教師からクラスメイトまで全員が全員スルーしていることを鑑みるに、そういうことだろう。
（……もしかして、ヤクでもうたれたのかな俺……）
無論、青田には覚せい剤や麻薬の経験もないが、もしかしたら寝てる間にうたれたかもしれないな、と彼が危惧するには十分な状況だった。
そんな青田の被害妄想的な心配をよそに、少女は彼に一人まくし立てている。
「……私ラファエルっていうんですけど、エゼキエルに言われて青田聖司とかいう青二才のもとに行けって言われたんですけど、あなたがその青田聖司さんですか？　というか、そうですよね？」

今は授業中であり、青二才こと青田が答えられるはずもなかったし、青二才と言われて青田の答える気が更に失せたのだが、ラファエルは露知らず。
「あー、もしかして私が貧相だから無視してるんですか？　釘をさしておくと、まだ発展途上段階にあるだけですからね？　まな板ストンとか言ったら、即、血祭りですからね？」
関係ない情報をペラペラしゃべる浮遊少女に対し、青田はガン無視を決め込んだ。
（授業の邪魔……でもないな。数学なんて文系のやるもんじゃねえよ。というかベクトル考えた奴なんなんだよ。こんなの絶対おかしいよ。わけがわからないよ）
最近友人に勧められたアニメに頭の芯からはまってしまっていた青田だった。
そしてそのまま、ラファエルの努力もむなしく、両者が言葉を交わすことなく七時間目は終了し、放課となった。

「……あの、青田聖司、本当に気付いていないんですか？　顔も名前もエゼキエルから貰った情報と一致してるんですけど、なんとか言ってくださいよ。もしかして幼女にしか興味ないとかですか？」
自称天使光臨から三十分後、青田家。
ラファエルこと天使少女は帰宅する青田の後をふよふよ浮いてついていき、遂には家の中まで来ていた。
「まあ一致してない情報もあるんですけどね。女っ気なし、将来の魔法使い候補なんて知らされてたのに、なんか女の子の幼馴染いるし、一緒に帰ってるし、エゼキエルの話と違って顔以外勝ち組ですよね、青田聖司」
「……」
顔以外勝ち組こと青田は周りに誰もいない（両親は共働き）のを確認して、無視をやめようと決めた。
「……あの、青田せ」
「なあ」
「わあおっ！」
オーバーリアクションで金髪少女が引っくり返った。空中にいるのに打ったはずのない腰を擦りながらラファエルは口を開く。
「いきなり話しかけないでください。驚くじゃないですか。……というか、見ました？」
「……ショートパンツじゃ引っくり返っても下着見えねえよ」
「私は下着のことだとは一言も言ってませんよ。これだから思春期は」
肩をすくめ、明らかに舐め切った目線を向ける金髪天使。
「それで、天使とやらが俺に何の用？」
「今まで無視してたのに急に何ですか童貞野郎。というか、案外あっさり天使だって認めるんですね」

「天使かどうかはともかく、ふよふよ空中に浮いてるやつが人間のはずがないからな」
「ご明察（笑）」
「……用があるのか喧嘩売りに来たのか、どっちなんだ？」
「後者だったらどうします？」
『やんのかコラ』って殴るぞコラ」
青田のそのセリフに驚き、ラファエルが距離をとる。
『ヤんのか』ですって！　いや！　いやらしい！　変態！」
「な、ちが、てめえ変な意味に取んじゃねえよオイ！」
「いやあああ！　犯される！　助けてエゼキエル！」
「あーもー、騒ぐなよ、ってうおわあ！」
驚愕の声が部屋に響いた。
というのも、無理はない。青田の目の前に、突如、巨大な火の球が現れたのだから。
「なにこれっ！」
そう叫ぶも、青田の疑問は解消されぬまま、その赤い球体が露骨に彼を狙い飛来する。
「ちょ、ま、やばっ！」
初撃を間一髪で回避し、迂回して来た二撃目を手近にあったフライパンで弾き、
「ったく、なんだよなんだなんですかこの状況は……」
言いかけて、絶句した。
居間に、無数の火球が射出準備中。
「……。……。はい？」
（あれなに？　殺す気？　フライパンじゃさばききれない？　飛ばしてるの誰？　たしかさっきあの天使がエゼキエルとかなんとか言ってたけど……）
エゼキエルだ、と青田が閃く。
「違う！　違うぞ！　俺は無実だエゼキエル！　あいつが勝手に変な意味に取ったんだよ！」
どこにいるのか分からないエゼキエルとやらに、とりあえず上を向いて話し掛けた。
すると、なんとか言葉は通じたのか、今の火球達が一斉にしぼみ、そして消えた。
「……た、助かった……」
「エゼキエルは相変わらず過激ですねえ。ベッドの上でも独りよがりな人なんでしょうか」

火球が出た途端姿を消して、また戻って来たラファエル。発言の後半が少々いがわしい。
「ま、間違っても私を襲おうとはしないことですね。私の後ろ盾には強力な天使がいますからね、今みたいなことがおきますよ。いけずの丸焼きの出来上がりです」
「いや、お前が早とちりしただけだよ。俺にそのつもりはない」
「どっちだっていいじゃないですかー。細かい男は、もてないぞう☆」
キラッ☆
「……」
女を本気で殴りたいと思ったのは、青田にとっては生まれて初めてだった。
「さて、それじゃ仕切りなおして」
ラファエルは小さく咳払いをすると、腰に手を当てて話し始めた。
「私は天使ラファエル。天界にいるエゼキエルに言われて下界に来ました」
「それはもう分かった。別の情報を求む」
「合点承知！」
少女は胸を張って答える。
「で、私の任務は神様を天界に連れ返すことです」
そこで止め、一息ついて、また口を開いた。

「以上」

「いやいやいやいや」
青田のつっこみに首を傾げるラファエル。
「ん？　なにか情報足りませんでしたか？」
「むしろ足りた情報の方が少ないぞ」
「おや、分からないことは手取り足とり教えて教えてー、ですか。くたばるがいいゆとりめ」
「ゆとりもくそもねえよ。天界のことなんか調べようがあるか」
「ググレカス、と言いたいところですが超天使美少女ラファエルさんは聖母の如き慈悲を持っているので答えてあげましょう。何か質問は？」
「んー、まずお前が超天使なんたらだとか聖母の如き慈悲だとか色々あるけど、それはおいておくとして」
しばし思案し、質問をまとめる。

「まず、神様を天界に帰すってどういうことか」
「そのまんまの意味ですが。チャレ〇ジ一年生からやり直した方がいいのでは？」
「殴るぞ？　俺が訊きたいのは、そもそもなんで神様がこっち来てんのかだよ。というかお前人間界の文化に詳しいな……」
「浮気したのを奥さんに咎められたからです。あと、私が詳しいのはエノクっていう天使から教えてもらったからです」
「……」
青田の中で、天界の神聖レベルが色々と急激に下がった。
「まあいい、次の質問だ。なんでそのお前が俺のもとに来たのか」
「ああ、それですか。単純なことですよ。貴方の周りの人間に神様が憑依したからです」
「なるほど……って、おい」
「他に質問はありますか？」
「いや待て、俺の折角のノリツッコミをスルーかよ。てか、今のなんだ、神様が憑依？」
「はい」
ラファエルはこほんと小さく咳払いをして、
「ところで、喉が渇きました」
「……」
黙ってコップを差し出す青田。それに満足してご満悦のラファエル。
「神様には特別な能力があるんです。端的に言いますと、神様が人間と契約して、その人間の願いをなんでも一つ叶えるんです。その代償に、契約した人には神様が憑依して、神様の仕事の一部を一年間担わなければなりません」
「か、神様の仕事って、もしかして魔女を倒すとか？」
「いえ、主に書類整理です」
妙なところで現実的な神様だった。
「……話を戻そう。神様が俺の知人に憑依した。そこからなぜ俺に来る？　直接お前らが探せばいいだろ」
「そうそう、それですが、言い忘れたことがあります」
ラファエルがジュースを飲む。いつの間にか、青田家の冷蔵庫から勝手に取り出していた。
「ジュースおいしい」
「……話が止まるからつっこまない。だから喋れ」
「はい。えーさっきの契約の件ですが、神様は人と契約している間、神様は契約した相手、もしくは神様が契約したいと思う相手にしか認識できないんです」

「……なにその無駄な能力。というかさ」
「なんでしょう、不能青田」
「神様が見付からないなら、なぜ人間界に来たとか俺の知り合いと契約したとか分かるんだ？　あとキレるぞ」
「ああ、単純です。誰とも契約してないうちは見えますからね。それで、このあたりにいたのが見付かったんです。その後すぐに契約したようで、どこにも見えなくなりました」
「なるほど。で、神様はその見えなくなる能力、なんで創ったんだ？」
「神様が仕事をさぼるために創ったものですもの。……ごくっ、ごくっ」
オレンジジュースの二杯目を一気飲み。飲み終わった後、少女はまた口を開く。
「そこで、その神様を探すために、我々天使も独自の契約を人間相手に持ち込むわけです」
「……契約」
「はい。前述の通り、契約中の神様は見えません。ですが、神様と契約してる人間は見えます。そこで、その人間が神様と契約してるか否かを判断するために、我々は考えたんです」
「ほほう」
「神様と契約している人間は、神様の仕事を一部担わなければならない。つまり、『何らかの特殊能力』を持っている。ならば、その人間に危険が及べば、自己防衛するために『神の力の片鱗』を行使する。そこをおさえれば、神が見つかる……と」
「よし分かった。契約した人間を加害者にさせるんだろ」
「大当たりです！　ピンポン！」
「ピンポンじゃねえよ。人に押し付けんなよおい」
「天使は原則として下界の住人に干渉してはいけないんです。特に、危害を加えるなんてもってのほか」
ラファエルは続ける。
「だから、その危害を加える役割を人間に代行してもらうんです。勿論報酬は出ますよ？」
「報酬……。報酬って何？」
「ランダムです。契約終了時、働きに見合った、けどランダムな報酬が天界から与えられます」
「……過去にその契約をした人は何人いるの？」
「六人ですね。あ、私自身が契約を持ち込むのは初めてです」
「ほう」
青田は頷き、
「畢竟すると、俺に契約しろと」

「イエス！」
「……危害を加えるのって、具体的には？」
「お、契約する気満々ですね？」
「契約内容を十分ご確認の上でお申し込みくださいって、偉い人が言ってた」
「いい心がけです。で、その危害を加える方法ですが」
ラファエルは手近にあったポテチの袋を青田の許可なくビリッと開けた。
「神様の契約同様、『特殊能力』を与えます。能力はランダムに決まります」
「例えばどんなのがあるの？」
「言えません。禁則事項です。ですが、まあ、目的が目的ですからね。かなり迷惑ですけどしょぼい能力ですよ」
話は一通り終わったようで、ラファエルはポテチを無断で漁り始めた。
一方の青田は微妙な表情で、
「……いいや、契約しない」
と言ってのけたので、ラファエルがポテチをひっくり返した。
「こ、断られた！　な、なぜ！　ここまで聞いておいて、なぜ！」
「いや、大した能力貰えるわけじゃないし、報酬もすごくなさそうだし、面倒だし」
「……そうですか……」
よほど契約してもらえる自信があったのか、ラファエルはがっくりとうなだれた。
「残念です……」
「気の毒だけど、他を当たってくれ。ジュースとポテチの無断飲食は問わないでおいてやるから」
「……分かりましたあ……」
落胆した少女がふよふよと浮いて玄関に向かう。
青田がそれを見送りに行くと、
「そうだ、言い忘れてました」
背中越しにラファエルが呟いた。
「言い忘れた？」
「……天使との契約を拒否すると、その人は異性からは一生愛されなくなり、代わりに同性から愛さ」
「契約するぞラファエル」
ラファエルの言葉を遮った青田の言葉には、言い知れぬ恐怖が見え隠れしていた。

「……ここか……」
青田がラファエルと契約した翌日。
早速ラファエルが神様契約者候補リストを渡してきた。
当の少女は相変わらずのショートパンツとティーシャツの姿でふよふよ浮きながら、
「へえ、休日なのに学校に来て体いじめてるマゾヒストが佃煮にできるほどいますね」
毒舌が火を噴いた。
「部活だよ。うちの学園は野球とラグビーが強い」
「ラグビーってあれですよね、男達が火照る体を気合いで動かして、汗だくになりながらお互いの体をぶつけ合うハッテン的な競技」
「お前は色々誤解している。特に『ハッテン』の部分」
「野球はあれ、ジャンケンで負けた方が服を脱ぐという、どう考えても女性に不利なセクハラ競技」
「それは野球拳だ。……お前やったことあんの？」
「ないですけど、下界でそういう遊びがあると聞きまして。理不尽ですよね。女は男の裸なんて見たくないのに、男は女の下着でも喜べるんですからね。隠すところも女の方が多いし」
「そもそも男女混合でやる方が間違ってるけどな。ありゃ野郎だけで夜中のテンションでやるもんだ」
「えっ……？　男だけで、夜中に、やる……？」
「妄想をやめろ頬を染めるな腐女子天使」
呆れつつ青田はリストを見る。
ところでこの二人の会話だが、ラファエルの姿や声は他の人間には認識できないため、傍から見ると青田の独り言にしか見えない。周りに誰もいなかったのが幸いである。
「……まずは……」
青田はリストの一番上の名前を見る。

・赤山佑作　宇鷹学園三年生　漫画研究同好会所属、同副部長

「んあ？　なんだ青山珍しいな、何か用か？」
「ああ、ちょっとな……。あと青山じゃない、青田だ」

相変わらずものでぐちゃぐちゃの漫研部屋を眺める青田に、
「青田、早めに仕事を終わらせるために、さっさと能力使って終わらせてくださいよ」
ラファエルが耳元で囁いた。

それは昨日、青田聖司の部屋での話。
「……で、ここにサインして……はい、これで契約完了です！」
この世のものとは思えない材質でできた契約書に必要事項を記入し、アオタとラファエルの契約は成立した。
「うんうん、記入漏れなし！　では、これで能力使えるはずですよ」
「……期待はしてないけど、一応尋ねる。俺の能力って何になったの？」
「えーとですね、名前は……『プレイルーム』だそうです」
『プレイルーム』か。して、その能力は？」
「はい、えー、『子供の遊びを現実にする能力』だそうです」
「それ、某マンガでそんな能力あったような気がする……」

ということで、早速『プレイルーム』使用開始。
「えーと、頭の中で遊びの名前を唱えます。で、その遊びに勝つと相手にダメージが行くというわけです。まずは『かげおに』でも試してみてください」
ラファエルの説明された通り、頭の中で『かげおに』と唱える。
「唱えたら、『かげおに』の遊びで勝つんです。つまり相手の影を踏んでください」
ラファエルの言った通り、赤山の影を踏む。
その刹那、
「って、痛っ！　あ、足釣った！」
赤山が大声を上げて跳びはね、勢いで机にぶつかり、狭い部室内をのたうち回った。
それを見たラファエルは、
「おおー、面白い能力ですね。でも、他の能力と比べると攻撃性が高すぎるんじゃ……」
と独語した。
（……やり方にもよるだろうけど、結構洒落にならない気がするぞこの能力）
「そうですね……」

（だよな。……って待てお前、俺の心読むなよ）
「いいじゃないですか。男が床転がってんの見ても面白くないですもん」
（……まあいい。これで他に人がいてもお前と会話できるし）
「そうですね。さて、次はですね、『たかおに』やってみてください」
（……『たかおに』）
青田は『たかおに』のルールにのっとって、そこらにあった古雑誌の上に乗り、赤山がいる位置より高くなる。
すると赤山は、今度は腰を机に盛大にぶつけて悶絶しだした。
その様子を見て天使少女が一言。
「うっわ、いたそー」
自分が指示したことである。
「よっし、じゃあ次ですが……」
（いや待て）
青田がラファエルの言葉を遮る。
（そもそもこれって神がいるかいないかを判別するためのものだろ？）
「はい」
（……だったらもういいだろ。こいつは、能力があったらみせびらかすタイプだ）
「そうなんですか？」
（そうだ。というわけで、次だ）
「分かりました」
ラファエルが了承した所で青田は赤山に向き直り、一言。
「俺もう帰るわ」
「あ、そう。てかお前来てから五分も経ってないのに何しに来たの、ああいってえ」
「ちょっと部長の方に用があってな、いないならいいんだ」
適当に嘘をついて、二人は部屋を後にした。

二人目。
・四天王寺龍之介　宇鷹学園三年生　十八歳未満のエロ本購入合法化推進会所属、同会長

「よう青田。ここに来たと言うことは、即ち我が推進会の意向に少なからず賛同するとみなしていいな？」
「相変わらず残念だなお前」
今現在青田の目の前にいる四天王寺という男は、高身長イケメン、運動能力抜群、成績は学年三位、という勝ち組みまっしぐらなステータスを持つ男だ。
ただし、所属している会から分かる通り、拭いきれない欠点が一つある。
「残念とは失礼だな。我が推進会は俺が設立して以来、様々な活動を行い、結果を残している。実質部員は五名だが、名簿だけの部員なら八十六人いるぞ」
「全員男だろ」
「ところがぎっちょん、女子が七名もいる。時代は変わったものだ」
毅然として豪語する四天王寺を前に、ラファエルが引いた。
「……あれですね。どんな綺麗な宝石でも傷が一つ付いてたら売り物にならないってやつですね」
（腐った林檎が樽全体をダメにするってか）
「それは若干違うような……」
ラファエルと意思疎通している最中にも、四天王寺は立て板に水。
「そもそも、なぜ我々はエロ本を買えないのか。子供に悪影響を及ぼすと言うが、それは中学生までの話だろう。正常な高校生は本になど影響されないし、されるヤツは大人になっても影響される。畢竟するに……」
「これ黙らせてください」
（よしきた。『いきとめ』）
単純なルールだ。発動時から長く息を止めている方が勝ち。
その遊びで、さっきから喋り続けている四天王寺に負けるはずなどなく、
「つまりエロとは芸術であり……って、なんか急に背中痒くなったんだけど」
効果発動。
（続いて、『かたあしだち』）
「そこから得られる……、ってお前なんで片足立ちしてんの？　というか、頭痛くなってきた……」
（『かくれんぼ』）
「急に体調が悪くなってきた……。腹も痛い……」
（よっし、次は……）
「って、青田！　なんか四天王寺の様子が！」

（……うん？）
促されるままに四天王寺を良く見ると、顔が青ざめている。
「や、やべ……まじ腹が痛い……で、出」
二人はマッハで逃げた。

その後、一日中候補に当たって能力を使ってみたものの、結局成果は無かった。
「はあ……」
流石のラファエルも疲れた様子で、いつもよりも低空飛行していた。
（なんだかなあ……。色々やったけど結局迷惑かけただけだったし、あいつらに申し訳ないな……）
「はい……。どれもこれも神様が浮気するから……」
（……）
そういえば事の発端はそんなことだったなあ、と思い出す。
「まあ、まだリスト全部当たったわけじゃないですし、希望はありますよ」
（いや俺は別に見付けなくてもいいんだけど）
「え？」
（契約しない場合のペナルティはあったけど、見つからなかった場合のペナルティはないだろ？）
「いえ、私のボーナスが関わってます。もしこの件でボーナス減額になんてなったら、青田を全裸でオカマバーにテレポートさせますよ」
（気合い入れていくぞ！）
夕日を背景にラファエルとどうしようもない談話を繰り広げていると、不意に青田の携帯電話が着信音を発した。
誰だと思いつつ画面を見ると、そこには幼馴染の名前。
「……もしもし」
『もしもし聖司？　今日一日中いなかったけど、どこにいんだ？』
「学校にいた。今から帰る」
『は？　なんでアンタが学校？　赤山のとこでも寄ってた？』
「まあそんなかんじ。お前こそどうしたんだ？　電話かけて来るなんて明日は雨か？」
『アタシは猫か？　……まあいい。何時頃に着く？』
「ざっと五時ってとこだな。で、なにお前、俺に用？　宿題なら俺も分からんからパスな」

『アンタに見せてもらうほど落ちぶれちゃねえよ。……でさ、まあなんだ、ちょっと聞いてほしいことがあってさ』
「俺に？」
『ああ。隆二のことで、ちょっと……』
隆二と言うのはこの幼馴染の弟だ。小学四年生の生意気なガキである。
「隆二がどうしたって？」
『……電話口でする話じゃないんだ。裏の公園で待ってるから、早めに来いよ』
「……？」

というわけで、来ました公園。
「さあてリア充、ここで幼馴染の悩み解決してフラグゲットですよ。このままプールのデート、夏祭りでエンディングですよ、リア充」
（リア充言うな）
青田が幼馴染と電話してからというものの、ここまで来る際、ラファエルはずっと青田のことを「リア充」と呼んでいた。（※リア充……現実での生活が充実している人のこと。主に恋愛事情に対して用いられる。）
「リア充でしょう？　昨日も幼馴染と一緒に帰ってたり、今日は直々に悩み相談受けたりしちゃって」
（だからあいつはただの幼馴染だって言ってんだろ）
「鈍感な男は皆そう言います。きっと好かれてますよ」
（はいはい、そういうことにしとくよ）
適当に受け流しているうちに、向こうから走り来るブレザー姿が見えた。
「おう、来たか」
「あー、アタシから呼び出しといて遅れちゃって悪いな。隆二のことでちょっと母さんと話してたんだ」
「……隆二、どうかしたのか？」
「それがさ……その、なんつーか……」
口ごもる幼馴染をいぶかしむラファエル。
「口に出して言い難いことなんでしょうか。……まさか、情事？」
（お前は黙ってろ）
ラファエルを睨みつけ、青田は幼馴染に向き直る。
「どうしたんだ？　言いにくいなら言わなくていいけど……」
「……絶対に言いふらさない？」

「勿論だ」
「……」
幼馴染は不安そうに青田を見詰めると、か細い声で喋り出した。
「隆二のヤツ……、たまに何か知らないけど変な書類に変な判子押してたんだ。それで気になってちょっと調べたらベッドの下に持ってるはずもない大金が隠してあったんだよ」
「……」
「一体あいつ怪しい宗教か、あるいはヤクザにでも関わってるんじゃないかって思ったんだけどさ……」
「……」
「それで問い詰めたらさ、何て言ったと思う？」
「……まさかとは思うが、『神様と契約した』なんて言い出したとか？」
「は？」
（あ、この反応は違うな。まさかとは思ったけど違ってよかった。隆二がそんなことするわけ……）
「な、なんで分かった？　アンタ、もしかして何か知ってんの？」
神様が見付かりました。

「神……様……？」
青田の幼馴染は、呆然としていた。
無理はない。青田から神様が浮気して逃げて来ただの隆二は神様と契約しただのと耄碌した老人でも言わなさそうな馬鹿話をされたのだから。
ただ、その馬鹿話が事実であるのが厄介だった。青田自身にとっては神様を見付けて終わりにしてそれでいいのだが、幼馴染とその一家の不安は残ってしまうため、仕方なくラファエルに許可をもらい、こうして天界事情について打ち明けたというわけだった。
なお、話に信憑性を持たせるため、ラファエルの姿は青田と幼馴染一家の計五人に見えるように取り計らってもらった。
「突拍子もない話ね……」と幼馴染母。
「だが、現に聖司君の隣に女の子が浮いているわけだしねえ」と幼馴染父。
「綺麗な子だなー」と幼馴染。セリフが棒読みなことと青田の脇腹をつねっているのは気のせいではない。
ちなみに、契約相手を特定された神様はエゼキエルという天使によって契約を強制解除され、そのまま天界へと連行されていった。
「とりあえず、うちの隆二が大金を持ってたのは神様の影響だったんだな。ヤクザとかじゃなくてよかった」
「だから神様だって言ったじゃんかよー！」
「いきなり言われても信じられないのよ。それより全部で三億円でしたっけ？」
「誰にもやらねーよ！　あれは俺のもの！」
「ダメよ。お母さんがとっくに全部回収したわ。二億円はうちの家計、老後のための貯蓄、及び美代と隆二の教育費です。残りはあんたたち二人で半分ずつ、貯金口座に入れたわ。大人になったら自由に使わせてあげる」
「そんななんでｋｄｆんｆｌんｋさ、ｆｍさ；ｌｇん。ｓｌさｆｋｌ！」
隆二が奇声を発してうなだれた。一方、美代（幼馴染）は嬉しそうだった。
「……おばさん、さすがにそれは隆二が可哀想じゃ……」
「聖司君、これはうちの方針なの。甘やかすとロクな子供にならないわよ、覚えときなさい」
「はあ……」
「それに二人には五百万も与えたんだし、十分よ。まあ聖司君も将来お世話になるから気になるのは分かるけど……」
美代の母はそう言って娘をにやけた顔で見たものだから、娘は耳まで赤くなった。
「な、なんで聖司がうちのお金にお世話になるんだよ！」
「うっわ分かりやすい、真っ赤になっちゃって！　あはははは」
「だ、黙れ！　親孝行しないぞ将来！」
「脅しがかわいい！　あはははは」
「うう……」

青田は、彼にとっては意味不明な会話を聞きながら、美代の父に話し掛けた。
「俺が世話になるってどういうことです？」
「……聖司君。俺は君を信頼しているし娘もやぶさかでもないんだが、どうしてそう残念なんだ？」
「はい？」
「……相変わらずダメだな、聖司君。盛りが過ぎる前には引き取ってくれよ」
やはり意味が分からなかった。
そんなアホ会話をしていると、ラファエルがわざとらしく咳払いをした。
「ん？　どうしたラファエル」
「あの、もうそろそろ私天界に帰らないといけないんですけど」
「……そうか」
青田が静かめに返事をしたのを、ラファエルは逃さず、
「あれ？　もしかしてこの超天使美少女ラファエルちゃんが帰ると寂しいとかですか？」
「……聖司？」
「いや違うしというかお前は腹つねんなさっきから痛いんだよ！」
美代の嫉妬心は結構強いようだったが、青田の知る由もない。
「じゃあ、あの、あんまり別れのあいさつとか出来ませんでしたけど、これで帰ります。じゃあ、さようなら」
「ああ、さようなら。ほんの短い間だったけど、ありがとな」
青田がそう言うと、ラファエルは不思議な顔で青田を見詰めた
「……なんでお礼を言うんですか？」
「え？　なんで？」
少女の質問に質問で返した青田は、先に少女の疑問に答えるべきだったと思い直す。
「あー、いや、なんだ……、まあ、一緒にいて楽しかったしな。契約は半強制的だったけど、色々面白かったし、その、うん……。楽しかったから、お礼を言った」
「……」
ラファエルは無言で青田を数秒間見詰めると、
「……そうですね。私も楽しかったです。それじゃあ、さようなら」
と言って、姿を消した。

「……」
もういないラファエルのいた空間を見詰めること十数秒。
「……随分寂しそうだなあ。そんなに仲良かったのかなあ。美少女と仲良くなれてよかったなあ！」
幼馴染の右フックが少年の腹にめりこんだ。

六月十一日　天界　エゼキエル宅

「というわけで、逃げてきました」
「神様、もう下界に降りるのは赦しませんよ」
「えーっ！　うそーっ！　なんでーっ！」
「なんでもどうしてもありません。無理です」
取り付く島もないエゼキエルに、神はすがるように頼みこむ。
「頼むよー、俺殺されるよー」
「いいんじゃないですか？　どうせ三日すれば生き返るんでしょう？」
「死の間際って、死ぬほど苦しいんだよ！　というか死ぬんだよ！　マジヤバイのキツいの」
「下界の文化を安直に取り入れないように」
ただでさえ神の支持率が下がっているのに更に下がるのは御免こうむるエゼキエルだった。
「……でもさ、あれだろ？　天使の中には人間になろうとしてるやついるんだろ？」
「ああ、彼女のことですね？　彼女は特別です」
「ええ？　神様の俺より特別な天使ってなにそれ。いいなあ」
「ある人間の協力者がいましてね、彼に見合う報酬として、『自分が一生付き添うこと』を選んだんですよ」
それを聞いて神が話に興味を持った。
「え？　何、恋してるの？」
「本人いわく、恋はしてないそうです。しかし、心がもやもやするそうですよ。将来的には恋に落ちちゃうかもしれないと語っています」
「……下界に降りるのも、人間に干渉するのも、恋するのも、職務放棄も、俺が言えることじゃないけど、全部禁忌じゃない？」
「まあそうですけどね。でも、禁忌かどうか、最終的な決定権を持つのはあなたですよ」
「……面白いな、それ」
神はしばし思案した後、
「……それって前例あったよね？」
「ありますね。たしか四世紀ごろの話ですが」
「……古いな。古すぎる。今の人間の情報とは合致しないよな」
「……はい」
「……人間界文化の主観的なサンプル、人間の恋愛のサンプルとして、非常に有用なものとなるだろうな」

「まあそうなるでしょうけど、本音は違うでしょう？」
「三角関係って見てて面白いよね！」
「彼女は天使なので、男が幼馴染と結婚して、かつ彼女つき……とか面白そうですよね」
「報酬といえども一応契約だから離れられないしな。やっべ、オラわくわくしてきたぞ」
「では、天界全体に通達を出しておいてください」
「オーケーオーケー。内容は、これでいいんだよな？」
そう言うと神は筆で紙に文字を書いていく。
「ラファエルの青田聖司への派遣、これを特例として認める」

# 現代の娯楽小説におけるキャラクターポジションの役割についての浅い考察

日高　呑

太古の時代から、世の中には物語がある。洗練された文章からなるそれは、人を楽しませ、ときに笑いを、ときに涙を誘うものである。

その物語のほとんどには、まず「主人公」がいて、他に、恋愛ものなら「ヒロイン」、バトルものなら「ライバル」といる。そういった固定化されたポジションについて、またそれにあてはまるキャラクターについて、独断と偏見を存分に交えて考察していきたいと思う。

なお、この考察でも主人公は男であるとする。また、著者の参考にしている物語は主にマンガやゲームであるので、ハードカバーとかを専攻している人は理解できない部分も見受けられると考えられる。

初めに、「主人公」について考えていく。

主人公は物語の中核だ。読者が最も感情移入するキャラクターであり、物語に進展を与えるポジションであり、そして物語中の困難を突破する当本人である。

基本的に主人公は善人である。自分なりの正義を持ち、困難に果敢に立ち向かっていく英雄である。主人公が犯罪者である物語でも、自らの正義に従って行動している者ばかりだ。

そんな主人公には、主に三つの種類が存在すると思われる。

まず、勇気と正義で突っ走る熱血の主人公。このタイプは原則、自らの行動理由に「自分の正義」の占めるウェイトが非常に大きい。悪を見逃せず、いの一番に殴り込んでいく。解決方法は実に単純で、悪の根源となっている要因なり人物なりを力でぶっとばすという、見ていてすがすがしいものである。物語中での成長も顕著に見受けられ、感情移入もしやすい。反面、偽善者的で独善的になりやすく、挫折も多い。また、この手の主人公がいる物語はしばしばご都合主義になりがちで、嫌いな人は嫌いである。

次に、主人公が既に完成しているタイプ。この主人公は最初から高い能力を持ち、それを存分に発揮して事態解決にあたる頼もしい存在である。一方的に殴って解決、ということはあまりなく、思考や会話を十分に用いて一歩進んだ解決を行う。主人公の引き立て役となる助手役がいて、その助手が窮地に陥り助けに行くことがままある。また逆に、主人公が才能を妬んだ誰かの謀略にはまり、助手が綱渡りで助けに行くこともある。

助手の成長は見られるが、主人公は既に完成しているためほぼ成長しない。この種の主人公には気の合う仲間は数人しかおらず、同業者や近所の人からはうるさく思われていることがあったりするが、解決すると一気に信頼を得る。今の若い人には古いと思われるかもしれない主人公である。

三つ目、巻き込まれ主人公。主に最近のライトノベルに多いタイプ。本来これといった能力のない平凡な人間だったが、ある日突然（もはやこの手の主人公には定型句）、見知らぬ誰か（主にヒロイン）と出会い、事件に巻き込まれ、初めは役に立たないもののすぐに新しい能力を覚醒させて一瞬で解決し、関係者からは天才だと一目置かれるようになり、あげくヒロインには愛されてしまうと言う、ご都合主義の凝り固まった存在だ。

根本的に才能もやる気もなく、巻き込まれると文句を言うが、いざとなるとやる気を出し妙に活躍して大成功する。顔は地味だがイケメンで、不幸だ不幸だと嘆いているが運が強く、細身だが意外と筋肉があり、ちょっと優しくしただけでヒロインを恋に落とし、そのくせ不自然なほど鈍感でヒロインをやきもきさせる。往々にしてヒロイン（候補？）は複数いる。このタイプの主人公は、以上の特徴の八割は適合すると思われるくらいスレテオタイプである。正直、この手の主人公は飽き飽きだ。

次に、「ヒロイン」……と思わせて、「友人」の考察をする。

このキャラクターは概して三枚目であり、それでいて窮地には主人公より頼りがいがある。主人公との掛け合いか主人公への助言がメインで所謂「縁の下の力持ち」である。主人公より人気が出たりするのはお約束。

主人公との掛け合いでは主に「いじられる」側。三枚目として、主人公にはさせられない離れ業をやってのける高性能で便利な存在だ。だが、主人公に助言をする場面では誰よりも頼りになり、そのアドバイスに間違いはなく、事態解決のカギとなる。そして多大なる感謝を受けつつ、現場へ駆けつける主人公を見送る。とてもいい人だ。大体同性だが、もし異性であるのなら、主人公はヒロインより彼女と結ばれた方がいい。

三つ目、「仲間」ないし「ライバル」。

仲間に当たるキャラクターは主人公がどのタイプかによって若干性質が分かれるが、概ね、主人公を見守るか敵対心を燃やすかのどちらかに当てはまり、そしてどちらの場合でも、時折主人公と共闘する実力者である。

主人公が既に完成している場合は同業者で、能力的には主人公と同等。主人公とは別の特技を持ち、別の方向性から事態解決に当たるライバルでもある。

主人公が成長するタイプだと、登場当時は明らかに主人公より格上で、初見の主人公を完全に舐め切っている。しかし、主人公が才能の片鱗を見せると豹変し、有望な後輩として見たり、強力なライバル候補と危惧したりする。このタイプはいつも、どこかで主人公に追い越され、そして影が薄くなっていく。

四つ目、「敵」について。

彼らに打ち勝つことが物語における明確な目標であり、そのため彼らは主人公に痛い目にあわされるために存在する。また、主人公とは正反対の意見を持つことで、また主人公の反感を買う言動をすることで、主人公を挑発し、全力で打ちのめそうとして、そして最後には負ける。そ

の後反省し、仲間になることも多い。
敵は所謂「悪」ではあるものの実力者であり人格者でもある。自分の過去や世界の現状を思い、考えに考え抜いて出した自分の正義を持ち、たとえそれが間違っていたとしても、それがあるから彼らは強いのだと思う。
まがりなりにも強い信念を持っている彼らが突然現れた主人公に負けてしまうのは、色々思うところがある。

五つ目、「親族」について。
親族、といっても主人公からどの位置にいるのかによるが、少なくともライノトベルやゲームでは、影が薄い。同性の兄弟なら友人のかわりに助言をするキャラであることもあり、異性の兄弟だと低確率で恋愛対象だが、やはり影は薄い。祖父母は稀に主人公の主義主張に多大な影響を与えていることもあるが、両親は本格的に影が薄い……というよりむしろ、片親で一日中働きに出てたり両親揃って海外出張中だったりといないも同然の扱いをされている。ただ、ディープな作品となるとむしろ積極的に絡んでくる。その場合、父親が博打好きだったり母親が不倫してたりとロクな人物でなく、最終的には主人公含め一家でバッドエンドを迎える。
最後、お待ちかねの「ヒロイン」である。著者の考察の本領発揮である。サブカルチャー耐性がない人はこの先は読まない方がいいかもしれない。
ヒロインは、主人公の恋人か、もしくは彼に思いを寄せる人物である。現代は様々なバリエーションがあるが、原則として以下のような特徴がある。
・美少女だ。主人公より身長が低い。バストは様々だが、全体的に細身である。
・性格がいい。欠点もあるが、根は至って善良。主人公をいたわる優しさも持つ。
・一途である。一度惚れたら裏切らず、過去に恋人がいたこともない。ゆえに、処女である。
・何かしらの問題や悩みを持っている。主人公がそれを解決すると、主人公との仲に進展が生まれる。
・主人公に陥落した後は、主人公が困難に立ち向かっている際に、その背中を押してくれる。
以上の特徴を見てつくづく思う。男の妄想が具現化した存在が「ヒロイン」であると。しかし、物語なのだから理想像を描いて当然、といった意見も説得力があり、なんとも言い難いが、自分の主観からすると、「理想像でいいじゃないか。男なんだもの」と思う。
では、ヒロインを、彼女達の立ち位置という観点から見ていく。
まず、「幼馴染」タイプ。
主人公の幼馴染である。幼少時からずっと一緒にいるケース、幼い時に仲が良かったがある時引っ越してしまい数年間出会わなかった末に再開するパターン、この二つが存在する。前者は主人公が新しく出会った女の子と仲良くしているのを見てやきもちを焼き、後者は自分の知らない間に主人公と仲良くなっている女の子がいてやきもきするのがお約束。それ以外に両者間の差はないと思われる。
幼馴染は、物語開始前、幼少時代からずっと主人公に恋している。しかし、あまりに長い間友達以上恋人未満の関係が続いたせいか、あるい

は今までの関係が壊れてしまうのを恐れるためか、今更告白できないと思っている。また、気心知れた仲であるために、ちょっとやそっとのことでは主人公が動じず、具体的には、他の娘と一緒に歩くと妙に緊張してしまう主人公が幼馴染と一緒だと一切緊張しないなど、かなり可哀想な状況にある。

しかし、幼馴染は特権階級でもある。性質上、どう考えても他の立ち位置のヒロインより主人公と一緒にいることが多くなる上、学校や部活などが終わった後のプライベートの時間すら共有でき、互いにわがもの顔で相手の家に上がりこめる。互いが互いの一番の理解者であり、頼ることも頼られることも圧倒的に多い。欠点などは昔から知られており、隠すことは出来ないが隠そうとする努力もいらない。前述の通り主人公から意識されないことが多いが、「昔と変わった」ことを認識させることで主人公の意識を向けさせられる（例：昔は男みたいだったのにめっきり女の子っぽくなった、と思わせると主人公は急に意識し出す）。二人の思い出の量も半端ではなく、子供時代の約束なんかが主人公と結ばれるためのポイントだったりする。このように、主人公と非常に仲が良く、きっかけとなるハプニングはそこかしこに散らばっており、結ばれる確率はかなり高い立ち位置にいる、ある種幸運なキャラクターだ。

次に、「同級生」系のキャラクター。

主人公の同級生であり、例として、転校生、委員長、図書委員、部活の仲間などが存在する。いずれも主人公とは縁もゆかりもない人達である。実は昔会ったことがあると後になって判明することもある。

この手のキャラクターは個性が強く、その個性が主人公との出会いの引き金となる。もはや古くなってしまったが、新学期、遅刻寸前で走っていると主人公と道の曲がり角で衝突してしまい、不運（主人公にとっては幸運）にもスカートの中身を見られてしまうというのが王道パターンだ。

個性が強く、ひとくちに言えないのが同級生の特徴だが、あえて共通項目を述べるとすれば、ヒロイン達の中ではあまり高くない立ち位置にいるということになるだろう。

三つ目、「先輩」キャラ。ここでは「教師」も含める。

主人公の部活の先輩、もしくは学び舎の若い女教師である。いずれにせよ年上で、年長者らしい包容力や頼りがいはあるものの普段はそれを見せず、しょっちゅう主人公を困らせては楽しんでいる。年下の主人公に助けられると年上のプライドを捨てて恋に落ちるが基本スタンスは変わらず、他の女の子に嫉妬すると言うこともかなり少ないように見える。また、十中八九、影が薄い。なお、最近はロリ先輩、ロリ教師というのも増えているようだ。

最後に、「後輩」のタイプ。

このタイプは両極端で、見た目も性格も幼く頼りないくせにハイテンションでタイプ、あるいは逆に主人公より年上に思われるほど落ち着いていて能力もあるが内面は外面以上に幼いタイプのどちらかに当てはまる。

前者は基本的にはトラブルメーカーだが、意外と努力家である。芯は強く、主人公と一緒に事態解決に望むこともしばしば。明るさの裏には悩みがあったりして、それを主人公が解消してくれたりすると、主人公のとりことなる。

後者はやはり努力家で、トラブルは起こさないが意外と芯が弱い。威勢はいいし努力もするが空回りで、問題を自力で解決できず、主人公が奔走しているのを後ろから見て応援し、非力な自分を嫌悪してさらに努力するがやはり空回りする。がむしゃらな原因は自分の悩みであり、悩みが悩みを呼ぶ状況となっているため、主人公は彼女にあまり思い詰めすぎないように諭さなくてはいけない。

後輩というキャラは悩みが持ち、意外と扱いが難しいのだ。

以上、様々に独断と偏見で考察してきたが、キャラクターにはそれぞれ「基本形」があるのがお分かり頂けたであろうか。世の中には様々なキャラクターがいるが、やはりこの「基本形」は外れていないものだ。

他にも、ここでは挙げられていない様々な「基本形」がある。これにガチガチに従ってキャラクターを創っても個性がないが、あまりにかけ離れていても一般人に受け入れられないことが多い。王道とは王道であるからこそ王道なのだ。

最後に一つ。

読むだけの人には関係ないが、本気で物語を創る場合は、キャラクターより先に世界観を考えるべきだ。キャラクター第一の物語など、学園祭で発表するくらいならいいかもしれないが、賞に応募する場合は論外である。

# Good-bye Master

小金井ささら

ついにこの時が来たようだ。
「率直に申します……手立てはありません。余命は一か月程度で――」
「全く問題ありません」
「えっ！？」
余命一か月だってさ。笑わせるな。
そんなわけ、ないんだから。

先代から受け継いで、三十年。……済まない。鯖をよんだ。二十六年だ。四捨五入して三十年。うん、そういうことにしておこう。とうとうやってきた。弟子に全てを託す、この時が。そしてそれから、引退だ。まあ、確かにそろそろ潮時だろう。その時を七日後と決め、準備に取り掛かった。まず初めに身辺整理、それから必要なものを揃えて、……あ。別に七日も要らなかったか。

目の前に立つのは、たったひとりの弟子。確か歳は三十八だと記憶している。
「そろそろ、私は身を引くことにするよ」
一言、告げる。
「え」
「今日を以ってお前に全てを託し、そして私はここを去る。いいな？」
「……はい」
「まず、先に伝えておくことがある。お前は今日からここの師範となり、弟子を育てることになるのだが、それは一人にしておけ。信頼できるその一人に、全てを託すのだ。これは技の発散を防ぐためでもある。むやみやたらに教えれば、悪用する者が現れ、世界中が混乱に陥る。それ

だけ、この技が強いということだ。そんなことにならないためにも、弟子は一人、だ」
「はい」
「他には……」
「……と。こんなところか。では、こっちに来てくれ」
「はい」
連れて行く先は隠し部屋だ。引継ぎのときだけ使われる、そのためだけにある部屋だ。開け方を教え、中へ入る。
「そこに立て」
「はい」
免状を取り出し、手渡す。
「……貴殿をこの道を極めた者として認め、第六代長命道師範となることを認める」
……文章がどことなく変なのも伝統だ。
「謹んでお受けいたします」
「それでは、これから長命道の最終奥義を伝授する。一度しか見せられないから、そのつもりで習得せよ。お前なら、できるはずだ」
「……はい」
「まず、右手を手刀の形にし、正面に持ってきて指先を前に向けて静止させる。それから……」
「……最後に、格好つけるためにこう叫んで、全力で手を一度だけ叩く。……長命道最終奥義、生命反転！」
パンッ！
身体で余ったエネルギーが変換されて、叩いた手の間から光が溢れ出す。
光が消えたとき、そこにいるのは手を合わせている少女と、唖然として立ち尽くす青年だった。
「……とまあ、こんな感じにやる訳で。わかったか？」
「え？　あ、はい……なんとか」
青年は無理やり正気を取り戻す。
「そうだな、補足しておくと、これを使うとあらゆる病気や怪我その他の不調が全て治る。と同時に、肉体が四十歳程度若返り、また性別が変

わる。だから、そう簡単には使えない。若返りすぎて消えてしまうからな」
「はい。ところで、格好つけるために、と仰っていましたが、ということは最後の叫び声は――」
「別に無くても問題ない」
「あ、そうですか」
格好つけるためだけに叫んだからな。ついでに名前の紹介も兼ねて。
「これで道の全てを授けた。これからはお前がここを守ってゆけ。わかったな？」
「……はい」
「では、またな」
「……さようなら」
弟子の目には、うっすらと涙が浮かんでいた……気がする。

そして、静かにここを去る……。

「あ」
「……どうしました？」
「忘れ物した」
「あー、そうですか」
涙は引っ込んだようだった。……それでいい。

# あとがき

再び早朝からこんにちは。小金井ささらです。
ついにやって参りました、第６３回宇高祭。無事作品が完成して、載せることができました。あーよかった。

ここで問題。

「どうしてわたしは毎回締め切り直前に徹夜をするのでしょう？」

……わたしが悪いですすいませんでした。

今回でわたしの文芸部での活動は（おそらく）最後になるわけですので、回顧を兼ねて今までに参加した本を並べてみますと、最初の活動、「夏の夜風と上弦の月」（宇高祭61）から、「表現86」（2010/03/21）、「宇高書房」（宇高祭62）、「橡32」（外部）「表現87」（2011/05/02）、「橡33」（外部）……そして今回。全部で十九本。きりが無いので細かく踏み入ることはせずに、これくらいでとどめておいて、おいとまることにします。
あ、同時に個人でコピー本「それは点描ティッシュ箱」というのを出します。こちらもよろしくお願いします。

それでは、さようなら。もしくはまた逢いましょう。

……とか言いつつちゃっかり表現８８に寄稿するに一票。

二〇一一年〇八月十九日

小金井ささら

HomePage：http://straight.suki-ari.net/（ＰＣ・携帯電話共通）
Mail：kgneissr.contact@gmail.com
Twitter：@kgneissr

# トラゴエディア

八咫烏

◆仕事を楽しくやれるって素晴らしいことだと思うんだ

「神様は死なない」とかって多くのニンゲンは信じてるけどさ、実際はそうでもないんだなこれが。神が死なないなんてのはニンゲンの勝手なイメージに過ぎない。全く、勘違い甚だしい。訳もなく憤ってみる。

神様だって生き物だ。差別は良くない。そして生き物ならいつかは必ず死ぬ。神様はその「いつか」を自分の好きなように変えられるってだけ。まぁ、その意味では不死とも言えるだろう。そこは認めようと訳もなく譲歩してみる。

けれど、長らくある状態でいると、この力は衰えてしまう。ニンゲン共の言う「なまる」ってのと同じだ。どんなに優れた力を持ってようがそれに満足して現状を維持することすら放棄すれば力は錆びついてしまう。

一つは、存在を忘れ去られ信仰されなくなること。生きること自体に退屈した神は、同時に生きる意味を失う。生きている意味を失ったものは、たとえ神であろうと薄っぺらいものだ。神ではなく紙だそいつは。易々と引き裂かれ死んでしまう。死んでしまっても誰の問題にもならないんだがな。

二つ目はこの俺、デスの機嫌を損ねることだ。どれだけ立派で輝いてる奴だろうが、死神に逆らう奴には身の程を教えてやらなきゃならない。痛みを感じず一瞬で逝けるだけ良い。他にはもっと酷いことする奴もいるからな。そいつらじゃ相手を殺すことはできないんだが。……まぁ俺は心が広いしこれで消えた奴なんて死んだ神全体のうち七割ほどしかいないけどな。

最後の一つは最高神の奴に目をつけられること。やるべき仕事をすっぽかしまくったり悪ふざけしまくってたりすると消される。ビームみたいので焼かれて死ぬ。ビームとかなにそれこわい。これは相当きついらしいが死んだことはないし死んだ奴と話なんてできないのでどれほどのものなのかは分からない。地上界のテレビに出てくる悪役のように笑いながら殺傷行為を行うのかもな。いやーほんとに怖い怖い。

とふざけてみるが俺は今、三つ目のおかげで死にそうになっている。以前にも同じようなことがあった気もするが、昼寝のつもりで寝てたらキレられた。どうしてこうなった。最近は比較的真面目にやってたのに一度でこれだ。とんだ差別だ。神の間でもこんなことがるくらいなのだ、ニンゲン共の中ではもっと激しいのも頷けるな。

死神なのに死ぬなんておかしいが割とあっさり死ぬ。他の奴らのように死に対してビビッてなんかいない。というか他の奴らがビビり過ぎてるんだ。いつも自分たちの仕事の過程で多くの命を無情に奪う癖に自分たちが死ぬのは異様に怖がる。……こんなのは『死』に失礼だと思うんだよ俺は。死の重さはどいつのものであろうと平等だ。平等に、軽い。

話が逸れたが俺は死への恐怖を感じてはいない。ただそれなりに神としての地位を気に入ってる今、死ぬわけにはいかない。面白いこともまだまだあるしな。

ということで久々に仕事をしてみることにした。増えすぎた生命の数を適度に減らし、地上界を温かく見守ってやるのが俺の仕事だ。地震雷火事竜巻なんでもいいがチマチマやるのは面倒なので隕石でも落としてみるかーおりゃーとやってみれば地上界が滅んでしまった。

創造の神様に頭を下げて仕切り直し。さじ加減がつけられない性分なんだよ俺は。だからそんな目で俺を見ないでくれ神々よ。

色々試行錯誤しながらやっていたが、どのくらいかかったのか、そこそこ良いバランスに生命を減らすことができた。退屈しのぎにもなったし、やはり向いてるな俺。うんうんと頷いていたら何を察したのかいろんな奴から殴られた。

◆「もう喋るな」って弱ってる奴にいうのは逆効果に思える

仕事の報告を最高神にし、多少たしなめられ、一応仕事は果たしてるようですねなどと腹の立つことを言われた帰り道、なにやら呻き声が聞こえたので辺りを見渡すと、病気の神様がぶっ倒れていた。元から悪い顔色がさらに悪くなっている。……つーか消えかかっている。ご覧ください皆様、これが神の死ぬ瞬間にございます。

「おーい、大丈夫かー。介錯なら手伝ってやるぜ？瞬きする間にあの世逝きだ、苦しまなくて済む」

俺なりの親切心ではある。こいつとはそれなりに付き合い長いしこんなにもでかい声で唸って苦しんでるのを見るのは中々忍びなかったからな。

「介錯なんていらねぇよ……もう、いいんだ俺なんか。生まれてきたって意味のない神だったんだよ元々。それを思い知るいい痛みだこれは、身の程って奴をきっちり教えてくれてんのさ」

「不貞腐れた人間みたいなこと言ってんじゃねぇよ。お前あれか、最高神の奴に目ぇつけられたのか？……いや、違うな」

こいつが死にかけてる理由が分かったが、なかなか言い出しにくいなコレ。面と向かって言えるようなことじゃあねぇ。

「……分かるか。そうさ俺を信仰する人間がいなくなっちまったんだよ。いつかは来ること分かってたがこれは辛いぞ。地上の奴ら、発展し過ぎなんだよ。病気に罹っても即直しやがる。おかげで相手を呪ったりなんだりするために俺を崇めてた奴らも離れていっちまったよ。」

「で、このザマって訳か」

「そういう訳だ。あーやばいなコレは。っ痛、お前これマジやばいぞマジやばい。死ぬほど痛いぞこれマジで。あ―痛ぇ―わー マジこれ痛ぇーわー」

「やめてくれそういう置き土産は」

「！……置き土産か……。そうだデス、お前にこれをやろう。俺の残す置き土産だ。まぁなんだ、暇潰しにでも使え。昔からのよしみの印だ」

そういって何かを渡してくる。結構な重さがあった。

「ん、そろそろ終わりみたいだ。達者でなデス、お前も俺みたいなことには――」

風の吹きぬけるような音がして、奴は消え去った。あいつだった物――何色と形容したらいいのか分からない砂の中に、あいつの置き土産があった。箱……地上でいうアタッシュケースのような形状をした箱だった。鍵がかかっていたが数回いじくったら壊れた。初めからこの程度の強度で作られた鍵だったんだろう。

中身を見、それが何かを理解した時、ふと笑みが漏れた。俺の趣味ってものが分かっていやがる。……畜生、惜しい奴を亡くしたな。

まぁいい、奴の弔いとして俺が思う存分遊びまわってやることにするか。

◇ネコババってもう死語なんだろうか

落し物、というのは見つけたらすぐ届け出た方がいい。たとえそれが五百円玉だとかシャープペンシルだとかコンビニで売ってるような袋入りのパンだとか、別に持って行ってしまってもあまり問題はなさそうなものであっても、だ。

とにかく、元の持ち主が誰か分からないような物をあれこれいじくり回すのは止めた方が良い。これに気をつければ、五百円玉がなんか知らんがプレミア物で元の持ち主が血相変えて迫ってきたり、あのシャープペンシルは亡き祖父が買ってくれたのだと廊下のド真ん中で大泣きされたり、パシリに買ってこさせたパンを待っていた不良に絡まれたりすることなんてない。絶対にない。死んでもない。安心してくれ。

そう、落し物なんて拾ったらさっさと届けるか放っておくか投げ捨ててしまった方が良いに決まってるんだ。

経験から理解しているはずなのに、俺はある物から目を離せない。

「なんだこれ……」

何かのイベントの参加を募るビラだった。黒地に赤文字というなんとも毒々しい色の組み合わせで作られている。やけに凝った作りなのだが、捨てられて放置されていたせいなのか内容がほとんど削られてしまっていて読むことができない。

ただ、かろうじて読める部分の中の、ある一文がなんとも凄まじい内容だった。

「イト募集……報酬二十万？なんだこれバイトの求人……？怪しい仕事でもやらされんのかよ、二十万って」

『イト』がなんなのかは判別つかないが、十中八九『アルバイト』の『イト』だろうな、募集とか書いてあるし。ただ、明らかにまともな内容ではない。何か、法に触れる内容の仕事なのかは知らないが報酬二百万ってのは冗談にしてはへたくそだ。バイトの求人である以上、年収ってのは考えにくいし月給だとしたって二百万は相当な額だ。まともではない。間違いない。

ビラを丸めて投げ捨てる。落し物といえば落し物だが届ける必要なんてない。投げたビラはゴミ箱の縁に当たって落ちる。誰が見ているわけでもないが、つい辺りを見渡してしまう。だっせぇと声が聴こえるような錯覚に襲われた。

さっさと、帰ろう。そう思ったが、『あいつ』のことが頭に浮かぶ。……このままでいいのか？そんな疑問が浮かぶ。思い悩んできた過去が頭の引き出しから溢れてくる。畜生、なんだよこれは。いつまでも終わらないかに思えた記憶の奔流は、出るだけ出尽くしたのか、いつの間にか止まっていた。

すぐ近くのゴミ箱を見つめる。一度深呼吸し、さっきのビラを拾いあげる。もう一度、全体をしっかり――。

あたりの風景が持っている、色彩が一斉に反転した。……殴られたのか？横から。不良かなんかに。金目のもののために。

ああ、どうせ……また痛い目を見るんだろうな。もういい、慣れた。落し物には常に疫病神がついてるんだ。そんなこと、これを拾った時から決めていた。

ビラを握りしめる。これから何が起ころうとこれを離すわけにはいかない。このバイト内容だってやばいものに決まってる。それでも、今の俺を取り巻く状況を打破するために、少しの痛い目を見るだけで済むなら安いものだ。

意識が糸のようであるとするなら、まさしくピンと張った糸に刃を振り下ろす感じで、つまり一瞬で俺は意識を失った。

◆神様にせよ人間にせよ大切なのは第一印象

「おいもう一人招待客が来てくれたぞ。ほら見てみろよこの間抜け面、頭の単調さが顔に出てるようじゃねぇか」

天上界のハローワークに来ている。神様だって就職難なのだ。最近の地上界はどうも発展し過ぎて神への信仰心ってのが薄れていやがる。まぁ就職難とかどこ吹く風の俺からすれば、見ていて笑いが出るけどな。

ある程度生きた時点で、なんかの仕事を手に入れないと天上界の奴

は死ぬ。仕事がない時点でそいつは神にすらなれてないからな、寿命をどうこうする力もないって訳だ。たとえ神になれたとしても今度は信仰集めるためにあれこれやり始める日々が始まる訳だがな。本当にのんびり生きられる奴なんてのはよほど地上界の奴らの生活に密接に関わっている奴らだけだ。

受付け待ちで暇そうにしている奴を探す。……探すと言ってもそこらじゅうにいるから大した時間はかからず目的の人数が集まった。仕事をくれてやると言った時の様子を思い出すと反吐が出る。まるで地上界の犬のように血相変えて飛びついてきやがった。

「仕事ってどんな仕事ですか教えてくださいまずいんですこのままだともうすぐ寿命が来ちゃうんです死にたくないです助けてください死神様お願いしま」

「うるせぇ、黙れゴミ共。いいか、お前らはこのまま放っておかれるだけで消え去るやわな存在だ。そこに俺が仕事を与え一時的にだが使いとして雇ってやる。寿命でもなんでも勝手に伸ばせ」

うわーっと文字が出てきそうな歓声が上がる。切羽詰まると皆こうなる。別にこいつらをどうこうしよう思うわけではないがあまりにも盲目的すぎる。こんな奴が神候補とか何考えてんだよ。

「ここみたいに煩雑な手続きもいらん。お前らが守るべきルールは一つだけ、『絶対服従』だ。言われた仕事を言われた通りにこなせ。手柄をあげようとして工夫なんぞせんでいい。ミスを犯した奴はどうなるか分かってるな？」

異様に神妙な顔で頷いている。いや、別にここに戻すだけだが。人を見た目って言う第一印象だけで判断してんじゃねぇよ。俺は自分の手で何かを殺すってのは嫌いだ。疲れるしな。

「じゃあ今から説明する。耳かっぽじって聞けよ、ミス＝死だ」

……適当に脅した方が扱いやすいのは見た目で分かってる。

◇得体の知れない人からの電話は無視に限る

「つく……」

頭がガンガンする、というのはこの感覚をいうんだろう。今まで頭痛なんてそうなかっただけに酷く強烈だ。目の前がぼやけていて良く見えない。数回頭を振り、頬を叩く。体が重い。

日差しを感じられない。あのビラを拾った時はまだ昼前だったはずだ。

――あ、

「ビラは……！？」

どこかに落としたのか、紙はもうポケットの中に入っていなかった。元々期待してはいなかったが、起死回生の手段になるのではないかと思う自分もいたのは確かだった。くそっ。手を振り下ろす。

柔らかい感触がした。と同時に、自分がどこにいるのかを俺ははっきり理解した。……ベッドの上……。俺は今までここで眠っていたのか？というか誰がこんなところに俺を連れてきたんだ？倒れていた俺を可愛い女の子が助けて、そこからドラマが始まるなんてことは考えない。……なんというか、雰囲気がそれらしくない。どちらかといえば牢獄のような印象を受ける。質素なベッド、ひび割れた壁、大して役に立ってない明かり、鉄格子のついた窓……。

本能的に、ここは危険だと感じとった。幸いにも服は元のままだし、特に体に傷はない。じゃああの時頭に受けた衝撃はなんなんだという疑問が浮かんだ。だけどそんなものを考えている訳にもいかなさそうだ。こんな陰気くさい所、さっさと出るに限る。

靴の状態も確認し、ドアに向かって走り出そうとしたその時、かなり大きな音を立てて電話が鳴った。放っておこうかと思ったが、俺をここに運んだ奴からのものかもしれなかった。俺を運んだ理由が悪意にしろ善意にしろ、話はしておくべきなんじゃないか。

「どこだ……？」

暗いためにどこで鳴ってるのかが分からない。壁に手をついて少し

ずつ探していく。……壁を一周しようかという位置でようやく電話は見つかった。結構長い時間探していたはずだがまだ鳴っていった。おそるおそる受話器を取る。

「もしもーし……」

返事がない。電話に出んわ、自分からかけてきたくせに。もう一度聞き返してみる。……耳をすますと、なにやら空気を吸い込んでは吐くような音が聞こえた。エアコンでもつけているのだろうか。……今度は少し大きめに話した。すると受話器の向こうで、なにやら物をひっくり返したような音がした。思わず声が漏れる。少し受話器を耳から離した。今度は返事があった。

「も、ももも申し訳ございません！飛龍想一さまでよろしいですか！？」

「はぁ、そうですが。というかおたく誰？なんで俺をここに？つーかここどこだよ、もう帰りたいんだけど」

聞き覚えのない声に、少し警戒する。

「お帰りになられるのですか？それですと今回の『ゲーム』の参加権は失われてしまいますがよろしいのですね？」

んん？ゲーム？予期せぬことの連続で頭がくらくらしてきた。そんなものに参加する意思を表明した覚えはないんだが。……思ったことをそのまま伝える。こんな訳の分からん奴に付き合っていていいものかとも思ったが、とりあえず何を言ってるのかくらいは理解しておきたい。

「あれれ？私の主からあなたさまが一番早くにこのゲームの参加を希望なさったと聞いたのですが、拾いませんでしたか？こう……なにかの募集要項のような紙を。……お金が必要なんですよね？」

紙と言われて思いつくものは一つしかなかった。あれを拾ったからここに連れてこられたってのかよ、冗談きついな。しかし、相手の口調から考えるにどうも冗談ではないっぽいな。なんだってんだ。

ここで、引っかかることがあった。こいつの言った最後の言葉だ。

「お金が必要なんですよね」……人間なら誰だって金は欲しい。当たり前だ。……ただ、『必要』って言い方はおかしくないか、金に困ってるのを知ってるような口ぶりだ。

「おい、お前一体何だ？俺の何を知ってる？ゲームってのは一体何をやらされるんだ？」

「そういくつも質問されましても……余計なことは口にするなと主から言いつけられておりまして、私が言えるのは一つだけ、ゲームの内容についての質問のみでございます。……あなた様は我が主の送ったここへの招待状に対し、強い関心をお持ちになっていました。言い方は良くないかもしれませんが、要するに、お金を強く欲していたということです。さらに、精神・身体ともに健康であることが確認されたので、ここへお招きした次第でございます。以上があなた様をここにお連れした過程の説明でございます。どうやってお連れしたか、なぜあなた様の心・身体の状態が分かったのかについてはお答えできません」

「どうしてだよ、またお前の主とやらに黙ってろと言われたとでも言うのかよ」

「その通りでございます」

苛立ちのあまり受話器を切ろうかと思ったがすぐ思いとどまる。なんにせよ本当になにも分からないこの状況で好き勝手するのはかなりやばい気がする。……続きを促した。

「それではゲームの説明に移らせていただきます。ゲーム内容は単純にして明快爽快愉快奇っ怪。この広い屋敷の中で、５日間過ごしていただくこと、ただ、それだけにございます。そして、これがあなた様にとってもっとも重要でありましょう。このゲームには、報酬が存在いたします」

なんとなく、予想はついた。なにがしたいのかは知らんが、こいつ

とその主とやらは、俺にこのゲームをやらせたいのだ。『報酬』を釣り餌にして……。報酬ってのは恐らく金だろう。あのビラに関心を持っていた奴なんてのは金に切羽詰ってる奴くらいだろうしな。ゲームをやらせること自体が目的ならいい餌だ。……妙に冷静になっていた俺を、次の言葉が揺らがせた。

「報酬はお金です。まぁ、当然そうだとお思いになっておられるのでしょうがね。一時間につき二十万円、ここにいるだけ報酬は加算されていきます。ゲーム開始は丁度新しい一日が始まる時間にございます。これから五日間、つまり百二十時間の間、ここに居ていただければ、報酬は二千四百万円ということになりますね」

荒唐無稽ってのはこういうのを言うんだろうな。ただいるだけでいいって言うならずっと寝ていたって構わないことになる。確かにこの屋敷は初めて来たわけで不慣れだし、色々やりにくいだろうがここに五日いるだけで二千四百万だと？喜ぶべきなのだろうが歓喜からの笑みよりもむしろ苦笑いが出た。人ひとり拉致してきてこれだけなのかよ。

「おい……本当に『それだけ』なんだろうな。他に条件の追加とかはないのか？五日間裸でこの屋敷を逆立ちして歩き続けるとかそういうのは。お前ら側になんのメリットもあるとは思えない、個人の娯楽だというならそれで納得するしかないが」

「飛龍様、世の中には困っている人を心から救済したいと願う方もいるのでございますよ」

そういって電話は切れた。どうすべきかを真面目に考えてみるべきだ。美味い話には必ず裏がある。それをきっちり理解した上で乗るのか、乗らないのかを決めるべきだ。……本来なら、ここで乗るを選ぶかどうか悩むの自体、愚かな話なんだがな……。

「玲奈……」

苦しむ妹の姿が浮かんでくる。本当に、ろくなことがない日だな今日は。少し、疲れた。大したことなんて何一つやってないのに。

今度は自分で、意識を暗い闇の中へ沈めていく。ここからどうやって帰るのか、そもそもこの屋敷(実際どんなものかは目で見ないと分からないが)からでられるのか、そして、玲奈は……。

そう眠くもないのに目を瞑ったのは、そういった問いから目を背けたいからだったのかも知れない。

◆安全地帯っていう響きがもう素晴らしい

椅子に座ってさっき雇った奴らを眺める。同じ言葉を同じ口調に同じ速さで伝えている。どっかの苦情取扱いセンターみたいだなーと適当に例えを考える。……どうも最近、地上のものに染まっているような気がするな。別に困らないが。

それはさておき、結局、ゲームに参加することになったのは七人になった。ニンゲンの強欲さを考えりゃもっと集まるかと思ったが流石に狙いすぎたかねぇ。……まぁいい、一人も来ないなんてことになるよりマシだ。誰も来なきゃそれはそれで良かったんだがな、どうせ暇潰しだしまた参加者を探すだけだ。

「デス様、連絡が全ての人間に行き渡りました。ゲーム開始の準備もできています。なんの滞りもありません」

「なら始めろ、ぐだぐだ考えてる奴のことなんぞ知らん。今回のゲームは死ぬことが決まってるわけじゃねぇんだから良心的なもんだ。お前ら、これから忙しくなるから覚悟しとけ。死にたくねぇならな」

ふよふよとアホみたいな顔で浮かんでいた神候補共はやたらと張り切りだした。あちこち飛び回って色々と準備を始めている。扱いやすくてなによりだ。

……もうすぐゲームが始まる。非常に楽しいことになるであろうことは想像に難くない。暇潰しと言うにはあまりに刺激的なものだ。ニンゲンの悪い部分を全部かき集めたようなものがあの屋敷で見ら

れるのだと考えると自然と嗤いがこぼれる。おまけに俺がそれを眺めるのはこの天上界というセーフティゾーンからだ。巻き込まれて危害を負うなんてことを考える必要はない。まったくもって素晴らしいな。

前にも似たようなことをやったがあの時は幕切れがあまりにもあっけなかったからな……今回はありとあらゆる力を使って生きろよニンゲン共。死神が生きろと命令するのもおかしな話だ。

◇自由にやれと言われたら逆になにをしたらいいのやら分からん

電話の音で叩き起こされた。また、あいつなんだろうか。そういえば、名前聞いてないな。先ほどよりは軽くなった身体を起こし、受話器をとる。

「飛龍だ」

「ゲームは既に開始しています。一応、まだこの段階ですのでキャンセルしてお帰りいただくことも可能ではございますがいかがなされますか？」

「やらない。……こんなことを言う訳がない奴がここに来てるんだろーが。お前らが何を企んでるのかは知らんが乗ってやるよ」

玲奈……。再び心の中でその名を呼ぶ。ふと、あいつの言っていたことを思い出す。

『幸せってのはね、いつどんな時に壊れちゃうか分からないんだよ。だから私は今を精一杯幸せに生きるの。幸せが壊れちゃうその瞬間に、もっと楽しめば良かったって後悔しないように』

俺たちが少しずつ積み上げて形作ってきた幸せが壊れたあの日のあの瞬間、あいつは後悔しなかったんだろうか。夜の空気を切り裂いて、気が狂ったような速さで迫ってくる車のライトを、あいつはどんな思いで見つめていたんだろうか。あいつは今、その答えを口にすることもできず、ただただ未来を繋ぐ戦いに身を投じている。……金が必要なのは事実だ。かつてに比べ大分発展した医療技術でも、玲奈を直すのには相当な労力が、そしてそれに見合う金が必要だった。父さんも、母さんも頼れない。だって二人は――。

「ありがとうございます。ではこれより五日間、ご自由にお過ごしくださいませ。我々は陰ながら、参加者様達の幸せを願っておりますゆえ」

「なーにが幸せを祈ってますだよバーカ」

思い切り力を込めて受話器を叩きつける。少しは気分が晴れた。

「さて、どうするかな。ずっとここにいても良いけど……」

危険な気がした。このまま部屋に閉じこもって屋敷の全貌がまるで分からないなんてのはどう考えてもやばい。ぐだぐだと訳の分からないことを言ってたけどみすみす金だけ渡してハイさよならってのはバカの所業だ。

身体を動かすための簡単な準備体操を行ってから外に出た。きょろきょろと辺りを見回すが人の気配はない。安全を確認したところで改めて屋敷がどうなっているのかを確認した。

「すげぇな……とんでもなくでかいんじゃないかコレ」

思ったことをそのまま声に出してしまうほど屋敷は広大なものだった。廊下は暗く、はっきりとは全体を確認できないがそれでもここがとてつもなく大きいのは判断できた。足元の床や壁の装飾からも、良く分からないが格調高いものが感じられた。もっと奥まで行ってみようか。

急に開けたところに出た。いや、廊下も十分広かったんだがここはそれ以上だ。大広間だろうか。……つーかこんなな豪邸なのに寝室はあのボロさってどうなんだよ。天井はてっぺんの所がまるで見えない。見えないほど高いのか、それとも夜だから光が入ってきてないのかは分からない。

目の端で、なにか動くものがあった。捉えられたのは幸運だった。鼠？いやいやあんなにでかい鼠がいるかよ。身を翻して逃げていくそ

いつを、全速力で追う。他に誰かいるってだけで、なにかしら気分が晴れるんじゃないかと思ったのにこんなに気合い入れて逃げられちゃなんていうか……アレだ。

数分間の追いかけっこの後、ようやく捕まえることができた。最近運動してなかったせいか衰えが酷い。そんなに走ってないはずなのに息も絶え絶えになってるとか笑われるな。

目の前にいるのは俺と大して歳の変わらない女の子だった。

「なぁ、そんなにビビらないでくれよ。別になんかおかしなことをしようとして追いかけてた訳じゃないんだ分かるだろ？」

「……分からないんだけど」

「そうかなら仕方ないなさようなら……で済ませられるほど安易な人間じゃないぞ俺は。君は何だ、一体どこからここに来た？高給のバイトに釣られてやってきたなんてアホみたいなこと言い出さないでくれよ？」

彼女の表情が変わる。目を見開きこちらを見つめてくる。図星とかマジ笑えるんだがＨＡＨＡＨＡ……はは……。

なかなか笑えないぞこれは。俺以外にもこの舐めくさった喜劇に参加してる奴がいるのかよ。主催者はいかれてるとしか思えない。複数人参加者がいるのなら、脱落者でも出ない限りそれぞれに二千四百万ずつくれてやることになる。どんな金持ちだろうとそんなことには金を使わない。そもそも金持ちってのは無駄遣いをせずに要所要所で適切に金を使うから金持ちになれたんだ。

「君、名前はなんていうんだ？」

「……」

答えない。沈黙が非常にきまずくなりそっぽを向く。あれこれまずくねと思った矢先に彼女は駆け出していってしまった。はえぇなおい。さっきより絶対速い。……当然か。

何も聞き出せなかった自分のコミュニケージョン能力にやや絶望する。大分疲れたが、とりあえず散策は続けることにしよう。さっきの彼女以外にも参加者はいるかも知れない。

部屋に戻ると電話が鳴っていた。あの電話主のことだから、俺が出るまで待っていたんだろう。暇な奴だと呆れるよりむしろその根気に感心した。

「飛龍だけど、何？」

「重要なお知らせです。危なかったですね飛龍様。あとワンコール遅かったらゲーム脱落になるところでしたよ。……そうそう重要なお知らせ。明日の夜、食堂にて参加者様全員による会食を行います。全員揃った時点で始めますのでお遅れになることはありませんが、あまりに遅いとゲーム失格となりますのでご注意ください」

電話が切れたあともしばらく思考の糸はほつれたままだった。糸が元に戻ると同時に、背中を氷が滑っていくような感覚がした。……会食だと？さっき確認してきたが食堂もこの屋敷相応の大きさだったぞ、あんなところで会食っていったら参加者は俺とあの彼女以外に一人や二人じゃないぞ本当にどうなってるんだ。

とにかく、明日の夜になるまではなにも分からない。ゲーム失格とか言ってたな、ここにくる奴らがそんなこと望むはずがない。必ず顔を合わせることができるし話もできるだろう。

「もう、休もう。少し疲れた」

あと四日の辛抱だ。この喜劇に付き合ってやるのも。あと四日、ここで過ごせばとりあえず解放される……のか？金は手に入る……のか？何も分からない。何も分からないということだけがはっきり分かるなんておかしなことだ。

すこしずつ、意識を暗闇の中に沈めていく。明るい明日を望んで。

◇知らない奴と飯食うと味がよく分からなくなる

会食の席は案の定全て埋まった。昨日出会った女の子の姿もある。他の奴らは俺より年下の高校生くらいの奴からもうじきお迎えがく

るんじゃないかとも思えるじいさんまで様々だ。一、二、三……八人か。主催者の用意しなきゃいけない金額が一億五千万を超え二億近くになっている。やはり狂気の沙汰だ、キッチリ金をくれるのかどうかなんて分からないがな。どこに付いてるのか、スピーカーを通したような声が聞こえてくる。

「皆様、おはようございます。今回の会食は参加者である皆様の退屈しのぎとなるよう催されたものでございます。五日間の滞在をずっと一人でお過ごしになられていては精神衛生上よろしくありません。是非参加者様それぞれでご親睦を深めあっていただきたく存じます」

「なにがご親睦を深めろだ馬鹿馬鹿しい。今日会ったばかりの得体の知れない奴らとどう仲良しこよしになれというのだ」

「一人で殻閉じこもってろよおっさん、こんな訳分かんない状況の中で一人でおたおたやってる方がよっぽど馬鹿馬鹿しく思えるよ俺」

中年のくたびれた男と俺と同じくらいの年齢であろう男が良い合いをしている。……あれはあれでいいと思うな。むしろ他の奴らの方が気になる。皆一様に下を向き黙々と飯を食っている、そんなんでおいしいんだろうか。なんかこうとっかかりが欲しいな。

「とりあえず、自己紹介しません？お前とかおっさんとかで呼び合うのすげー不便でやりづらいと思うんだけど」

……な、ん、で無言になるんだよ皆！さっきまで騒いでいた二人も黙っている。何だよ何見てんだよ……。苦しみのあまり俺が悶え始めた時、助け舟が出た。

「アマクサです、よろしく」

高校生君だった。手短かだったがそれで十分だ。ぽつぽつと他の奴らも名乗り始める。

「シノミヤですよろしく」昨日出会った女の子。

「オオタワラだ」親睦馬鹿馬鹿しいの人。

「ヒムロっす。よろ」親睦馬鹿馬鹿しいの人馬鹿馬鹿しいの人。

「クジョウと申すものだ、よろしく」じーさん。

「ユヅキと申します、よろしく」お姉さん。二十代後半くらいか。

「ヤクモよ。仲良くできるといいわね」おばさん。四十くらいか？

「ヒリュウです、よろしく」そして俺。

誰も自分の字がどう書くのかみたいな日常の自己紹介でやるようなことはしなかった。すごい簡略化したものばかりだし。……まだ警戒を解くのは早いだろうし仕方ないか。自己紹介なんて提案した俺自身、胡散臭さみたいなのは感じ取っている。そもそもあんな下らない内容のビラに本気で興味を持ったこと自体おかしな奴らなのに一気に打ち解けろって方が難しい。

「皆さ、どうやってここに来たのか覚えてるか？」

口火を切ったのは今度はヒムロだった。一瞬皆の表情に翳りが見えた。皆の顔をみたヒムロはため息をつく。俺もため息をつきたい気分だ。手がかりもクソもないじゃないか。

「やっぱり覚えてないのか……。あのバイト募集みてぇな紙見た後から記憶ないんだよな俺。誰にこんな所連れてこられたのかも分かんねぇ」

「私も同じだ。家を出てすぐの所に落ちていたビラを拾ってそれを見ていたらいつのまにかここにいた。気を失う前に頭に強い衝撃があったのは覚えているんだがね」

クジョウがいきさつを話す。俺と全く同じだった。ふと思いついたことを質問してみる。これの結果によってはますます事態は混乱を極めるんだが……。

「なぁ、皆がビラ拾った場所ってどこ？公園とか家の前とかじゃなくて県とか都とか府とかさ」

ががやと声が上がる。大阪、東京、青森……。八人が各々ばらばらの場所を口にした。……これはとんでもないことだ。やっぱり俺たちをここに連れてきた奴は頭がおかしいに違いない。

「一か所ではなくバラバラの場所でって……それ、このゲームの主催者さんが全国各地に人を広げて、そこビラを拾ったり興味示したりする人を見張らせて、その上で私たちをここに連れてこさせたってこと？」

そういうことだユヅキさん。そして意味不明。全国に人員派遣してビラまいてそこでビラ拾った奴で興味持ってそうな奴選別してここに人目に触れず拉致……あり得ない、が実際にあり得ているから恐ろしい。……ただ、考えていても分からないことを考えるのは時間の無駄だ。今やれることをキッチリとこなそう。

「つーかさ、まずメシ喰いませんか？一応用意してあるんだし。皆さん昨日はどうしてたんですかメシは。俺昨日食えなくて死にそうだったんですけど」

アマクサが言いながら既に食っている。毒とか入ってるかもとか気にしないのかよ……。毒見を率先してやってくれたのはありがたいが。食い物は部屋の引き出しに携帯食料があったからそれを食ってたなと伝えるといいことを聞きましたありがとうございますとやたら丁寧に感謝された。大して歳変わらないんだしそこまで畏まらなくてもいいと思うよ。

「これから、どうする？」

ヤクモさんが今度は話を振る。これからどうしようか。とりあえず今したいことは……。

「儂は部屋にこもる。何もしなくても金がもらえるならそれでも構わんのだろう？ここにくるだけでも正直かなり堪えているんだ」

ヒムロ、アマクサ、ヤクモ、オオタワラの四人が肯定の意を示す。

それでもいいんだけどなんかなぁ……。

「私はここをもう少し調べようかな、出口とか知ってれば後々便利そうだし」

今まで静かだったシノミヤが言った。先ほど部屋に残ることを考えていた五人は目を丸くしている。なんでそんな馬鹿なこと、と口から言葉がこぼれ落ちそうだ。

「俺もそうします。色々あったけど、なんだかんだで俺たちはこの『ゲーム』とやらの主催者も、さっきのスピーカーの声の主も知らない。ここの中にいるとは思えないけど、もしかしたら……」

シノミヤに向いていたのと同じ視線が飛んでくる。やめろやめろ。

とりあえず各々の行動を話したあとは、皆普通に会食を行った。少し前は全く知らない人間同士だったわけだが、それなりに話ができることに俺は少し安堵した。疲れが僅かではあるが緩和された気がする。

「……結構遅い時間になっちゃったわね。ずっとここで話し込んでも疲れるし、そろそろ寝させてもらうわ。……部屋の位置、互いに知ってた方がいいかしら？」

特に自分の意見を言わなかったユヅキさんが一番に席を立った。部屋の位置……か。知っておいた方が便利そうだけどまだ皆の警戒心は完全に消えたわけではないだろう。今は言わない方が良いと伝えると「そう」とだけ残し戻っていった。一人が戻ると皆次々に去っていく。俺も帰るかな。席を立とうとしたら誰かに袖を掴まれた。「シノミヤ？どうしたんだよ」

あれか、ここを出たら付き合ってくださいってやつか。全く俺って奴ぁ……。なんて馬鹿なことを考えているのが顔に出ていたのかそっぽを向かれた。

「どうしたんだって」

「えーと、昨日は暴れてごめんなさい。それとこれ、渡しておくね」

会食の時に置いてあった紙ナプキンだった。なにか書いてある。

「私の部屋の地図。明日、一緒にここを見回るなら必要かと思って。それともいらないかな……」

「いや、受け取っておく。明日の朝、呼びにいくよ」

シンパシーでも覚えたのかなにやら凄い変わりようだが、それでも

自分を多少なりとも信じてくれたことに変わりはない。純粋に感謝の気持ちを持つことができた。
シノミヤの後ろから背中越しにアマクサがこっちを見ていたので、さよならとシノミヤに告げてさっさと戻ることにした。人の個人情報をそううっかりと漏らしてはいけない。

◆空気化してるキャラほど物語後半の影響力が強い

「随分と……楽しそうにやってるじゃねぇかニンゲン共。にわか推理展開しちゃいるがそんなのは無駄だ無駄だ。さっさと止めて部屋に籠ってるのがいいって絶対」
デスはけらけらと嗤っている。笑う、ではなく嗤う。プラスでなくマイナスの方向に自分の感情を吐き出す。それを見た神候補たちは将来こいつにだけは逆らっちゃダメだとの認識を固くした。デスに消されている神の数を鑑みれば賢明な判断である。
「さて……そろそろこいつの出番かな……と。二日もこの俺の手の上でまともに暮らせたんだから喜べニンゲン共。……おいお前ら、仕事をくれてやる。行ってこい」
あいつのくれた土産を使う時がついに来た。死亡確定じゃない分ある程度の救いはあるがこれは死を即宣告されるよりある意味残酷だな。……病気の神ねぇ。もう少し長生きできたんじゃねぇの、こんなもの作れるならよ。
「デス様、運搬の準備ができました。あ、今連絡をニンゲンに届けるための準備も完了したようです。今すぐ始めますか？」
あいつ――病気の神様『疫神』の作ったものについてもう一度考えてみた。あいつは一体、何を思ってこれを作ったのか。
地上界でいう銃とその弾丸に模して、あいつは自分の力を結晶させた。六つの引鉄はそれぞれ視覚・聴覚・味覚・嗅覚・味覚・触覚を破壊する弾丸と、破壊された感覚を蘇らせる弾丸に対応している。
弾丸には相手を殺す力はない。ただある感覚を失くし、力を削ぐだけのもので、相手の命を奪うのはこれ以外での攻撃ということになる。すぐに殺さずに甚振って殺れる仕様になっている訳であり、そのぶん通常の銃より非情な面も強い。
自らの存在を感じて欲しくて奴はこれを作ったんだろうか。こんな代物が作れるのならもっと強力に、殺すことに特化した凶悪な威力のものも作れたはずだ。だがあいつはそれをしなかった。光、音、香り、感触、味それらがない空間の中で、あいつは自らの恐ろしさを再び示そうとしたのかもしれない。回復のための弾丸も、『無』から脱した時地上界の奴らが感じる安堵によって、そこからの転落という怖さを知らしめるための物なのかもな。……だがな。
「よし、落とせ。連絡は一斉に行えよ、ラグが出ると面白味がなくなるからな。今度はマジでミスは許さん、失敗したら本当消すぞ」
あいつがなにを考えてたなんてどうでもいい。俺はこいつで遊ぶだけだ。言ったろ？命は平等に軽い。それの積み重ねてきた歴史やそこに重ねられた思いなんて関係なく、軽いんだよ。
◇上を向いて歩こう
電話の内容は、想像を遥かに絶していた。こんなことになるなんて予期してなかった。昨日の会食以後府抜けてた自分が腹立たしい。
「二日間が終了し、現在皆様がお持ちになっている報酬は四百八十万円となりました。これからも徐々に増えていくはずでしたが、予定を変更させていただきます。これより三日間、皆さんの報酬は一時間ごとに減っていきます。五日後、つまり今回のゲームが終了する時には、皆さんが現在お持ちになっている報酬は0となります。ここまで聞いただけでは憤られる方もいらっしゃるかも知れません。しかしご安心ください。報酬をもってここを出る方法は存在します。皆様方それぞれ以外の参加者の方を殺してください。一人殺すごとにその方が現在お持ちになっている報酬が手に入り、報酬の減少がストップします。

さらにそれ以後十二時間の間だけ、報酬が今まで通り加算されていきます。ふふ、一石二鳥とはこのことですね。また、この屋敷の中に残っている参加者様がお一人のみになった場合、その方にはその時点での報酬の額、さらにプラスして十億円を差し上げ、ここより解放いたします。私どもは約束を破ったりはいたしません。確実に規定の金額をご用意させていただきます。死体の処理は確実に行わせて頂きますのでご安心ください。そして、最後になりますが、このデスゲームを戦うための強力なアイテムを用意いたしました。それぞれのお部屋のクローゼットの中をご確認ください、取扱説明書も同封されております。是非有効にお使いください」

こちらの質問も批判も怒号も何一つ受け付けず、電話は切れた。

はい？と訳も分からず俺はしばらく硬直した。……それから数瞬遅れて激しい憤りを感じた。……それから数瞬後、やっぱりこうなるんだな予想通りだと頭を冷やした。……それから数瞬後、今度は静かな怒りが芽生えるのを感じた。

くそっくそっ、なんでこんなことになったんだよ畜生。やっぱり手を出すべきじゃなかったんだあんなのに。今更ながら後悔の気持ちが強く滲みだしてくる。後悔したっていいことなんかなにもないって普段はそう思えるんだがな。やっぱりどこかおかしくなっているに違いない。

狂ってる。なにもかも狂ってる。俺も世界もどっちも狂ってるよ。それも狂い方が尋常じゃない。コードが絡みついた時のように一か所直せば済むと言うんじゃない。これは、言うなればドミノだ。一つ狂えば全てが狂う。たった一度のミスで取り返しのつかないことになる。

殺られたくなきゃ殺らなきゃならない。なんでだよ、少し前まで普通に話してた相手となんで殺し合いしなくちゃいけないんだよ。

神も仏もないとはまさにこのことだ。いや、むしろ神様がこんな狂った事態をけしかけてるのかもな。人間にできるような所業ではない、こんなこと。もしそうなら……救いなんて求めちゃいけない神頼みなんてしちゃいけない。初めからそんなもの期待しちゃいないが。自分を救うのは、自分しかいないんだから。それはこのゲームでもその外でも同じことだ。

「どうする……！？」

今はとりあえず皆と会って話したい。……だけどこんな状況だ、出会ったその場で『これ』を撃ち込まれるかもしれない。目でも潰されたらその場で殺されるのはほぼ決まりだ。『これ』が本当にあの説明書通りの性能だとは到底思えないがな。あまりにも現実離れし過ぎてる。

この狂った世界の中じゃ『現実』なんて言葉自体何を意味するのかすら分からなくなってきている感覚もあるけどな。

足音が聞こえた。気のせいかと思ったが違う。廊下を走ってるのか？……こちらへ近づいてくる！

足音は部屋の前で止まる。ドアノブが回るが、開かない。当然鍵はかけてある。……ノックがされる。コンコン。

出るべきか。ドアにのぞき穴なんて物はついてないから、誰が来たのかは開けて確かめる他ない。それは相手も同じだ。ここが参加者のいる部屋だとすら分かっていない可能性が高い。このまま黙っていれば自然と去るだろう、相手だってずっとここにいる訳にもいかないだろうし。

あれだけ短い間でここまで多くのことを考えられるのかと極限状況の脳に感心しつつ、結局俺はドアを開けた。

「おお、ヒリュウ君。君の部屋はここだったのか、もぬけの空なのかと思ったよ。ずっと一人でいるのは辛くてね、こんな訳の分からない状況なんだ、助けあわなくてはな」

随分、饒舌じゃないか。昨日親睦なんて馬鹿馬鹿しい、得体の知れ

ない奴らと仲良くできるかなんて言ってたのに。
「それ、持ってきたんですね」
電話主の言うとおりに、クローゼットの中にあったガンケース。非情に眉唾ものだが、電話主が言っていた通りの性能なら強力なものであることは確かだ。
「ん？ああ、どんなものなのかは分からないが誰かに奪われてしまうよりはマシだと思ってな。それなりに重いがこうして運んできたんだ、そういう君も持ってるじゃないか」
警戒してるのが言葉の端に現れていた。自分が持っていても不自然じゃないだろ皆持ってくるだろ普通お前バカだろ――。本当はこう喚きたいんだろうな。
「ここからどこに行くつもりですか？アテなんてありませんが」
「そうだな、とりあえず――」
オオタワラがこちらに走ってくる、どちらかというと突進？狙いは俺でなく足元のガンケースだ。……ありがちな展開すぎて欠伸が出る。誰かを信頼しようとした俺が馬鹿だったんだな、分かったよ、踊ってやるよ。
ベルトに差していた銃を抜き取る。ガンケースの中身は空だ。こっちの武器を奪えれば生殺与奪を握れると思ったんだろうが、そんなことをするくらいならさっさと手持ちの武器で攻撃すべきだったんだ。
目を丸くしているオオタワラの顔面に向かってガンケースを蹴り上げる。歯って意外と簡単に折れるんだなーと下らないことを考えつつ、銃の引鉄を二度引く。相手も撃ってきたが、焦点の合わないだろう目で撃っても当たる訳がない。
引いた引鉄は、視覚・聴覚の弾に対応したものだったが、ぱん、と破裂音がしただけで、弾丸が発射されたようには思えなかった。舌打ちし、新しい攻撃手段を探そうとした時だ。
「は……？なんだこれは、一体何が起こったというんだ……まさかあれは、本当に……！」
あらぬ方向を見てオオタワラがなにやら呟きながら大暴れしている。挙句の果てに一人でひっくり返っている。
「効いたってのかよ本当に……。こんなものがなんで存在してるんだよくそっ」
耳と目をあれこれいじくり回している。どうやら本当にこの銃は説明書に書かれたのと同じ性能のようだ。……そうなら、これは一つだけじゃ足りない。オオタワラの銃を拾いあげ、ポケットに無理やり突っ込む。ついでに――、
「殺してしまおうか、こいつ」
今なら楽勝だ。目が見えず耳も聞こえない人間を殺すなんて赤子の手を捻るようなものだ。このガンケースでも使って脳天をかち割ってやれば、それで終わる。さっさとやれよと誰かがささやいたような気がした。玲奈の顔が浮かぶ。減っていく自分の報酬額を思い浮かべる。
「誰が殺すかよバーカ」
オオタワラの銃の弾丸の一つ、他の銃弾の効果を消すものを放つ。途端、暴れていたオオタワラが静かになった。きょとん、という効果音が聞こえそうな顔でこちらを見る。そこに思い切り蹴りを入れる。歯がまた折れないか気にはなったが、一本も折れることなく気絶してくれた。俺の部屋のなかに連れ込み、ベッドの中に押し込んで、その上からシーツとごちゃごちゃしたガラクタをかぶせた。このいかれたゲームが終わるまで眠っててくれ。
なんで俺はあいつを殺さなかったんだろう。そう考え始めたのは部屋を出てから十分ほど経ってからだった。明らかにあのまま助けたのはおかしいだろ俺。自分を嘲る言葉ばかりが浮かんできたが、さらに五分もすると別に間違ったことをしたとは思わなくなった。
だって、考えてみろよ。命は重いんだぞ皆平等に。ゲームだなんだといって弄んでいいものじゃないだろ、それに、それにそんなことし

て手に入れた金で救ったところで玲奈は喜ぶのかよ。むしろ自分から身投げするだろそれを知ったら。

ここから逃げる方法を考える。やっぱりまず、同じ考えの仲間を持つべきだ。人を信じるって大切。――シノミヤ。あいつにもらった地図を確認する。……近いな。全速力で駆け出す。生きるために。

あとがき

えー、まず言わなきゃいけないと思うことなんですが、命は重いです当たり前です。理屈なんてのは必要ありません命は重いです。存在しなくていい命なんてのは一切存在しません。大して世の中のことを知らない私でもこれは分かります。

今回の話の中で死神デスは命は軽いという意見を貫きますが、命を『軽い』とか『重い』って考えること自体、あくまで『命は重いのではないか』ということを念頭に置いた上での議論になるのではないかと思うのです。つまり、軽いという意見を結論として出していても、その結論を出す過程には必ず『命は重いのか』を考える必要性が生じてくるはずなんじゃないか、そしてそれを少しでも考えたのは、多少なりとも命の重みについてなにかしら理解があるからなのではないかと……。

本当に命自体を軽いと思っているなら、命の重さについて考える必要なんてありません。命という事柄自体が無視されるはずです。無関心が愛情の反対であるようにね。

ごちゃごちゃと書いといて自分でもなんだか訳分からん方向へ進んできたのでそろそろ止めますね。

実際のところ、ゲーム終了まで書こうかと思いましたが、どういう風に立ち回りが行われるのかを考えてみるのもいいかなと思いまして途中で切らせていただきました。

締切間に合わないとかそんな理由ではないですよハイ違います断じてそんなことはありません。八人の参加者についてはもっと掘り下げても良かったかとは思ってはいますが、明記しないことで想像の幅も……うん。

それと、疫神の残した武器の意味についても、読んで頂いた方それぞれの解釈が異なるんじゃないかと思い明記しませんでした。性能設定については完全に思いつきです。眠っている中二心が芽を出したものだと思って頂きたいです。

いつもに比べ少し長くなりましたが最後に。

このような拙い文章を読んでいただきありがとうございました。少しでもなにか思うものを感じて頂けたのなら幸いです。ワンパになっているような気がするので次は趣向を変えて書けたらなと思っている次第です。

余裕を持って作品出せなくてごめんなさい部長。

盟友、喜多宮枕くんに捧ぐ――

# gloaming

夏炉かなた

A―1

紙飛行機が背面飛行している。ふりふりのドレスを着せられた人形が逆立ちしている。虎の尾が地に向けて葉を伸ばしている。それらの物体は皆奇妙に平面的で、まるで一枚の絵画を観ているかのようだ。

私は眼をぐっとつむり、ゆっくり開く。

世界は全く変化していなかった。

瞳に映る全てのものが逆さまで、奥行きを感じられない。

「なんなのだこれは…」

私は呟くが、私の耳には声がどうも不自然に聞こえる。これは本当に自分の声だろうか。もしかしたら、舌を切り取られ話すことのできぬ私の変わりに誰かが私の心中を語っているのではないか。確かめるために私は舌を動かして上の歯に当て、同時に周りを見渡そうとした。

つるりとした口内の感触を確かめられたので舌があることは間違いないが、周りを見渡すことはできない。脚を動かすことも、身体をひねることも、首を回すことすらできない。

私は首から下をそっくり無くしてしまったのではないか。不安に襲われた私は腕を動かす。顔の前に両手を持っていくとそこにはちゃんと二つの手のひらが存在する。手のひらで顔全体を撫でる。右眼は正常だが、手のひらが左眼にさしかかった際に異常に気付く。どうやら私は左眼を眼帯で覆っているらしい。奇妙に平面的な風景の原因はこれであろう。私は眼帯を外そうとするが眼帯は微動だにしない。不思議に思ったが、奥行きの無い風景に特に問題は無いので眼帯を外すのは諦めることにする。その他は、手のひらの感触も顔面の感触も正常だ。

首、肩、胸、腹、腰、太股、腕の届く範囲を全て確かめた。全て正常のように感じる。私は服を着ている。手触りからしておそらく背広のようなものを着ているのだろう。身体を動かせないのではっきりしたことは判らない。首には何か細い紐が巻かれている。ネックレスを着けているのだろうか。材質は皮だ。下を向くことができないのでこれもはっきりとしたことは判らない。太股から下がどうなっているかも同様に判らない。

だがとりあえず身体がちゃんと存在していることに私はほっとした。

さて、どうしたものか。

動かせるものは腕と顔面の筋肉のみ。

しょうがないので眼球をぐるぐる回し、辺りの状況を確かめる。

私の前には大きな窓があり、そこから青空が見える。雲一つ無い綺麗な空だ。下の方から太陽の光が差し込んでいる。この青空の下を飛び回りたい。

空を飛び回りたい？何故そんな発想が浮かんだのだろうか。私は鳥か？タンポポの綿毛か？年端もいかぬ夢見る少女か？それとも飛行機乗りなのか？

そもそも自分は何者なのか？背筋が凍りつく思いがした。先程確かめたときに自分が人間で男性であることは判った。足は確かめられな

かったからもしかしたら幽霊なのかも知れないが、とりあえず人間であることははっきりしている。

だが、そのほかのことは何も判らない。自分の名、顔、住所、年齢、職業、思い出も何一つ頭の中には存在しない。家族や友達や恋人なども思い出せない。人間の顔といえば数百通り思い浮かべることができ、人間の名前といえばやはり数百通り思い浮かべることができるが、その二つでペアを作ることができない。この顔と名前には私のそれも含まれているのだろうが、どれがどれだかさっぱり判らない。

自分が何者なのか判らない恐怖。損失感。

けれども、こうして窓の外の青空を眺めると、どこか懐かしい気持ちになるのはどうしてだろうか、また同時に憧れのようなものを感じるのはどうしてだろうか。もしかしたら私は空に関する職に就いているのかもしれない。

観察を続けることにする。窓枠の一方の端には虎の尾の鉢植えが置かれている。上の窓枠に逆さまに置いてあり葉を下向きに伸ばしている。物理法則を完全に無視している。もう一方の端には人形がやはり逆さまに物理法則を無視して置かれている。ラベンダー色でたっぷりレースをあしらったドレスを着ている。可愛らしい人形だ。男の私が持つには不釣り合いだからここは私の部屋では無いのかもしれない。もしくは私にはこのような趣味があるのかもしれない。

左手には紙飛行機が見える。折り紙で作るようなちゃちなものではなく、上質な紙と接着剤で組み立てられた本格的なものだ。飛行機の胴にはたこ糸が結びつけられていて、糸は下へと伸びている。やはり物理法則を無視している。飛行機は背を下に腹を上にして制止している。糸の先はおそらくは床にくくりつけられているのだろうが、確認することはできない。

眼に映るものはそれだけだった。あとは白い壁が広がっているだけ。天井も床も見ることはできない。壁にはポスターの類はなく、時計もかかっていない。だがこの窓が南向きで今が正午の前後であること太陽の位置から推測できる。

その時音楽が流れ始めた。『天空の城ラピュタ』の『君をのせて』が鳴り響いている。何故曲名を知っていたのか疑問だが、ともかく自由に動く両腕で音の発信源を探るとそれはズボンのポケットの中だった。取り出してみるとそれは携帯電話だった。メールの着信を知らせている。

ただのアドレス変更のメールだった。名前を見ても顔が思い出せない。とりあえずアドレスの登録を変更した。

この携帯電話は役に立ちそうだ。誰かに電話してみよう。電話帳を開いて名前の羅列を見る。だが顔は思い浮かばない。しかし、ア行、カ行、サ行と順番に見ていって、タ行のある名が目に留まった。

タカナシ

何故か片仮名で名字しか登録されていないが、私は彼を思い出せる。タカナシは占い師だ。彼はこういう奇妙な状況を扱うのが得意なのだ。彼なら私を救ってくれるだろう。電話をかける。懐かしい声が聞こえる。

「もしもし、どうしたんだ」

「タカナシ、助けて欲しいのだ。今私は大変奇妙な状況なのだ。聞いてくれないか。…」

私は今の状況を語った。自分の記憶がごっそり抜けていること。身体が動かないこと。世界が全て逆さまなこと。

「なるほどな」

「頭が狂っていると思うかもしれないが。本当に起こっていることなのだ」

「お前の頭が狂っているかどうかは俺が実際に見てみないことには判らないな」

「ではここに来てくれるのか」

「ああ、行ってやるぜ。そんな人形があるってことはそこはお前の部屋なのだろう」
「ありがとう、タカナシ」
「待っていろよ。…ところで、一つ質問だが、今、お前は空が見えているんだろう？空は何色だ」
「何色って…綺麗な青色だよ。雲一つない」
「青色だって？それは確かにやばいかもな」
「何がやばいのだ」
「空は青色なんて聞いたことないぜ。今の空は綺麗なレモン色だ。朝はライムグリーン、昼はレモンイエロー、夕方はオレンジオレンジ、夜はピンクグレープフルーツピンクってのが空の色だろ。俺やお前が生まれた時からそうだし、きっと空ができたときから空はグリーン→イエロー→オレンジ→ピンクを繰り返しているはずだ。待ってな、すぐにお前をその奇妙な世界から解放してやるからよ」
　電話は切られた。彼は何を言っていたのだろう。空の色？青に決まっているではないか。

B―1

　奇妙な電話を受けた俺は旧友の様子を見に行くために出かけることにした。旧友の家は塙田にある。豊郷台にある私の家からはそう遠くない。俺は家の屋根の上に立ち、翼を広げ飛び立った。
　この辺りは住宅街なので人通りは少ないが、それでも多くの人が車や自転車や箒や絨毯などで空を飛び、行き交っている。今日も天気は快晴。太陽は輝き空は綺麗なレモンイエローだ。俺は旧友の家の方向を向き、翼を羽ばたかせる。
「おーい、タカナシ」
　俺の名を呼ぶ者がいる。地面を見ると、同級生のキキさんが手を振っていた。
「どうした？」
「カササギに箒の鍵を盗まれちゃってさ。取り返してほしいんだけど」
「何だって？ドジな奴だな」
「仕方ないじゃん。ぼんやりしてたんだから。お願い取り返してよタカナシ。あんた高校生兼何でも屋でしょ？」
「違う。俺は高校生兼占い師だ」
「何でもいいわよ。ちゃっちゃと飛んで取り返してよ。そのご自慢の翼でさ」
「しょうがないなあ。それで、カササギはどっちへ行ったんだ？」
「東の方」
「判った。待ってろよ」
「ありがとー」
　やれやれ、頼まれ事が一つ増えてしまった。俺はお人好しなのだろうか。まあいい。カササギの巣の位置はだいたい判る。この仕事はすぐに片付けられるだろう。俺は東へ方向を変えるとカササギの巣を探し始めた。

A―2

　空は依然として雲一つ無く、真っ青だ。私もまた依然として動くことができず、ただ逆さまの景色を見ることしかできない。風景にほとんど変化は生じないが、時折小鳥が空を背面飛行で飛び交った。私はそれに憧憬の眼差しを向けながら依然として変わらないこの状況を憂えた。
　とても静かだ。物音一つ聞こえない。空を舞う小鳥の鳴き声さえも。タカナシはまだ来ない。何をやっているのだろうか。
　それにしても、何故私はタカナシのことを覚えていたのだろう。彼は私にとって特別な存在なのだろうか。まだ多くは思い出せないが、

彼を糸口に私の記憶を呼び覚ますことができるかもしれない。
その時、轟音が響き渡った。何か巨大なものがこちらへ急速に接近しているようだ。私は身構えた。
それは旅客機だった。ボーイング **777-300** が空気をふるわせながら空を横切った。私は息をのんだ。遠くを飛んでいるために小鳥ほどの大きさだが、それでもその存在感に私は圧倒された。なんて力強く、優雅なのだろう。相変わらずの背面飛行だが、それでも飛行機の持つ美しさは変わらない。ああ、なんて素晴らしいんだ。私はボーイングが窓の外に消え轟音が聞こえなくなるまで、瞬きするのも忘れて空を見入っていた。
ああ、飛行機に乗りたい。飛行機に乗って、それを操縦し、空を自由に飛び回りたい。いや、自由でなくてもいい。操縦席に座って、ただ飛行機を操ることができればそれでいいのだ。ああ、空を飛びたい。空を飛びたい。この青空を飛びたい。輝ける太陽のもとに飛行機を操縦して空を飛びたい。
私の胸に空への憧憬が溢れ出る。記憶は失っているのに、空への想いだけは強く強く残されていたのだ。
しかし私には空を飛ぶことはできない。眼に映る風景は逆さまで左眼は見えない。身体は腕を除いて動かない。これでは飛行機を運転することなど絶対にできない。
ああ、タカナシ！私を早く助けてくれ。この奇妙な状況から私を救ってくれ。くそう。せめて、せめてこの煩わしい眼帯が外れればいいのに！
しかし状況は依然として変わらない。タカナシが現れる気配もない。
日がいつの間にか傾いていた。中央の低い位置にあった太陽は左上の方へと移動していた。

B—2

泥棒カササギの巣を探すのに思ったよりも時間がかかってしまい、箒の鍵を手に入れた時には日がだいぶ傾いていた。空の色はレモンイエローとオレンジオレンジの中間色だ。
キキさんの家に戻ると彼女は家の屋根の上でのんびりくつろいでいた。ビーチパラソルを広げデッキチェアに寝そべっている。
「おーい、キキさん。起きろ。鍵を持ってきてやったぞ」
「おそーい。なんでこんなに時間がかかったのよ。日が暮れちゃうじゃない」
「おいおい、せっかく持ってきたのにそんな言い方無いだろう。それにまだ日は暮れてない」
「今日はデートだったのよ。あなたのせいで行けなかったじゃない」
「理不尽なことを言うな」
「まあ、仕方ないわね」キキさんは俺の方へ手を伸ばした。「鍵は？」
「ほれ」俺は鍵を放り投げた。キキさんはキャッチする。「じゃ、俺はもう行くよ」
「あら？うちに寄っていかないの？お茶ぐらい入れるわよ。いっぱい飛んで疲れたでしょう？」キキさんは俺の翼を指差した。「それにしても、なんで翼なんて使ってるのよ。私みたいに箒を使えばいいのに。箒なら羽ばたかなくていいから疲れないし、免許もいらないし」
「いいんだよ。これは俺の主義なんだから」
「変わった人ね。それで、今日はこれから何か予定があるの？」
「ああ。俺に助けを求めている奴がいるんだ。俺はそいつを助けに行かなければならない」
「あらそうなの。大変ね。ま、頑張って」
「おう。じゃ、また学校で」
「ばいばーい」
俺は今度こそ旧友の家の方へ飛び立った。
俺が翼を使って空を飛ぶ姿に好奇の視線を向ける輩は多い。大抵の

人がお手軽な自転車や箒や自動車なんかで空を飛ぶ中で、体力を大量に消費する翼を羽ばたかせ飛んでいる俺の姿が奇異に見えるのは仕方が無いかもしれない。だが、俺はやはり翼で空を飛び続ける。何故なら、翼はかっこいいからだ。箒や絨毯などは本来の用途が別にあるものであるし、自動車や自転車やオートバイなどはもともと地面を走っていたものを無理矢理飛ばしている。そういうのって美しくないと俺は思う。その点、翼は空を飛ぶためだけのものだ。だからこそ、それを使って空を飛ぶ姿はシンプルでかっこいい。

もちろん、空を飛ぶための道具の中で一番かっこいいのは飛行機だろう。あれこそ、まさに飛ぶために生まれてきたものだ。たまに旅客機や自衛隊の飛行機なんかが頭上を横切るが、あれは本当に美しい。空を飛ぶものの中でも別格って感じがする。

実際、飛行機乗りになりたいという者は多い。しかし、飛行機乗りになるためには国家資格が必要で、それを取るためには厳しい試験と身体検査をクリアしなければならない。そしてそれに合格できる者はほんの一握りにすぎない。

特に旅客機のパイロットともなると、数十人あるいは数百人ものの人間を乗せ音速に近い速度で飛ぶ飛行機を操るわけだから、責任重大な仕事で、また最も名誉な職業だとも言われる。なれる者はわずかだ。

誰しも一度は飛行機を操縦したいと思う。俺だって同じだ。だが、それは大抵の場合夢で終わる。俺の場合もおそらく同じだろう。

俺は旧友の家までの道を急いだ。

A—3

日は傾き、向かって左の方の空はオレンジ色になった。真ん中は紫色で、右側は暗い青色だ。

とうとう夕方になってしまった。タカナシはまだ来ない。

私の空への憧れは増すばかりであった。私は頭を掻きむしった。喉が酷く渇いている。これは拷問だ。憧れの空をただ見せられるだけで、自分は動くこともできない。顔を背けることすらできないのだ。

早く来てくれ、タカナシ。私はもう気が狂ってしまいそうだ。

その時、背後でドアを開ける音がした。懐かしい声が聞こえてくる。

「待たせたな。もう、大丈夫だ」

「遅いぞ、タカナシ。もう日が暮れるではないか」

「悪かった。途中トラブルがあってな」

男が背後から歩いてきて私の前の窓枠に座った。タカナシだ。もちろん彼の姿も上下逆さまだ。学生服の上に白衣を着ている。

「さあ、早く助けてくれタカナシ」

「助けろと言われてもなあ」タカナシは顎をさすりながら言った。「俺はお前の間違っている部分を正すことしかできないぞ。それでもいいか？」

「私の間違っている部分とはどういうことなのだ？おかしいのは世界ではなく、この私なのか？」

「そりゃそうだろ」タカナシは携帯電話を取り出すとこちらへ向けた。シャッター音が響く。「ほら、これがお前の姿だ」

逆さまだったのは周りではなくこの私だった。調度のない殺風景な部屋の中で、私は頭を床に向け足を天井に向けて宙に浮いていた。いや、浮いているのではない。床から革ひもが真っ直ぐ伸びていて、先が輪になっていて私の首に緩く巻かれていた。私は物理法則を完全に無視していた。

私は学生服を着ていた。そして左眼には白い眼帯がついていた。

「なるほど。確かに私は間違っているな。では早速これを正してくれ」

「本当にいいのか？正すのは簡単だが…、正してしまうとお前は死ぬことになるぞ」

「何だって？」

「首に巻かれた紐を見ろよ。お前が正常の姿になれば、紐は天井から

下がることになる。重力に従ってお前の身体は沈みこみ、紐がお前の頸動脈を圧迫する」
「何てことだ…。嫌だ。私は死にたくない。助けてくれよタカナシ」
「無理だよ。だって、お前は自分で死をえらんだんだろ？」
「私は自殺したというのか…。そんなこと、とても信じられない。第一、動機は何だというのだ」
「自分が自殺した理由も判らないのか」タカナシはひょいと立ち上がると私の前に立った。逆さまなのでお互いが相手を見下ろしているようになる。「憐れだな。右眼を瞑って眼帯を外してみろよ。そうすればすぐに判るぜ」
私はその通りにした。あれほど外れなかった眼帯が今回は簡単に外れた。そして私は真実を知った。
眼前にはただ闇が広がっていた。眼帯などあってもなくても全く変わりは無かったのだ。私は左眼の視力を完全に失っていた。私は涙を流した。右眼からも左眼からも大粒の涙がこぼれ落ちた。
「お前は飛行機乗りになりたかった。小さかったときからずっとそれだけを夢見ていた。しかし、左眼の視力を失ったことでお前は夢も失ったことになった。飛行機乗りにとって眼は命だ。両目とも視力が1.0未満の者が飛行機乗りになることはできない。まして、片目だけとはいえ全盲になってしまったお前に飛行機乗りになることは不可能だ。それを憂えたお前は自殺を決意した。しかし、運命のいたずらでお前は逆さまになり、思考のみを許されるようになった。自殺の方法が悪かったのだろうな。何故首吊りにした？そんなに空が飛びたかったのなら飛び降りにすれば良かったのに」
「飛び降りなんて、ただの落下じゃないか」私は小さな声で答えた。今ではもうすっかり思い出せる。全てタカナシの言う通りだ。左眼が光を失ったことで飛行機乗りから見放されたが、しかしそれへの憧れは燃え上がるばかり。どうしようもなくなった私は死を決意したのだった。「死ぬ間際まで、大好きな空を見たかったのさ。運が良ければ飛行機が通るかもしれないし」
「なるほどな。…さ、そろそろ終わりにしよう」
「ちょっと待ってくれ。最後に一つお願いがある。そこに紙飛行機があるだろう。それを窓から飛ばしてくれないか。本当は私自身の手でやりたいが、逆さまじゃ絶対に上手くとばせないからな」
「…これか」タカナシは糸をほどいた。「いいぜ。ただ飛ばせばいいんだろう？」
「上手く飛ばせよ」
「責任重大だな」
タカナシは微笑むと窓を開け、紙飛行機を飛ばした。夕焼けでオレンジ色に染まった空を紙飛行機はびっくりするくらい良く飛んで、やがて見えなくなった。
「ありがとう。これでもう心残りは無い。さあ、正してくれ」
「判った」タカナシは私の後ろに立つ。「ところで、今は、空は何色に見える？」
「オレンジ色だよ。綺麗な夕焼けだ」
「おお、良かった。俺と同じになったな。俺にも空はオレンジオレンジに見える。雲一つ無く、実に美しい」
「でも、右の方は暗い青色だぞ。夜になるからな」
「ふうむ」タカナシはうなった。「結局最後まで俺とお前の世界は重ならなかったな。それが幸せかどうかは判らないが」
「世界？」
「いや、何でもないよ。じゃ、さよならだ」
「ああ、さよなら」
タカナシは私の背中をぽんと押した。世界がぐるりと反転し、風景は正常になった。そしてすぐに私は目の前が真っ暗になった。私は眼を閉じた。

B―3

旧友の家を出た後、俺は飛び上がった。

街は崩壊していた。建物は例外なく崩れ、植物はみな枯れ果てていた。生命の気配が全く感じられない。これが世界の終わりなのだろう。世界が終わるのも当然だ。支配者が死んでしまった今、誰がこの世界を維持できるのだろうか。

俺は彼の家のすぐ近くにある宇都宮タワーへと飛んだ。先端が折れているが、まだ辛うじてその姿を留めている。俺はタワーの展望室の屋根に着陸した。ここからは宇都宮市全体を見晴らすことができる。

もちろん全てが崩壊していた。廃墟となった街を淡いピンク色で染めているのは空だ。いつの間にか日はすっかり沈み、空はピンクグレープフルーツピンクになっていた。世界の終わりだというのに、空はやはり美しい。

俺はため息をついた。

エピローグ

1

「……以上が、Aさんが死ぬ間際に脳内で再生された映像、つまり、Aさんが見た『走馬燈』の映像です。人が眼で見て認識している視覚情報を映像化し、人が見ている夢を映像として再生する技術は既に開発されていますが、今回はそれを応用し、人が死ぬ間際に起こるとされる走馬燈現象を実証する、という実験を行いました。結果はご覧の通りです。確かに、人間は死ぬ時に走馬燈体験をするということが実証されました。映像が計測された時、彼はもちろん眠っていませんでしたからこれは夢ではありません。まさしく、彼は走馬燈を見たのです。ただし、その内容は非常に夢的なものでした。一般に、走馬燈で人は自分の生涯を振り返るような映像を見ると言われていますが、実際は、自分の心理が織り込まれた『夢』と全く同じ種類の映像を見るようです。今回の走馬燈の解釈も、夢分析と同じように行うことができるでしょう。

さて、ここで被験者の方について簡単にご紹介したいと思います。Aさんは、パイロットであった父の影響もあって、幼い頃からパイロットへの強い憧れを抱いていました。高校に入学した時もその想いは強いままでした。自分はパイロットになるのだということを信じ、全く疑っていませんでした。しかし、ある日彼は伝染病にかかってしまい、左眼の視力を完全に失ってしまいました。これによって、彼の夢は絶対に叶わないものとなってしまいました。パイロットは眼が命。身体検査の中には、遠見視力が各眼とも**1.0**以上、近見視力が**0.8**以上という項目があり、これをクリアしないとパイロットにはなれないのです。夢は砕かれましたが彼はパイロットになる夢を捨てられず、苦悩し、最終的に自殺を決意したのです。

今回の実験にあたって、精神科医の小鳥遊先生にご協力をいただきました。先生は、Aさんが精神を病んでしまってからずっとAさんの治療を続けていた方なのですが、とうとう彼の心を癒やすことはできませんでした。彼が自宅で首吊り自殺してしまうだろうということを、先生は長年の勘で感じ取りました。自分の力不足で尊い命が失われてしまうが、せめて科学の発展に協力しようと、我々に連絡をくださったのです。先生のお姿は走馬燈の中にも『占い師』として登場しますね。ただし、Aさんが自分自身の姿を重ねているのか、走馬燈内のタカナシは高校生の姿をしています。先生のおかげでこの実験は成功を収めました。改めて、お礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

そして、若くして命を失ってしまったAさんに謹んで哀悼の意を述べたいと思います」

2

小鳥遊医師は、先程の発表会が終わった後、研究所の喫煙室のほこり臭いソファに座りため息をついた。喫煙室の明かりは点けなかった。

俺はもう精神科としてやっていくことはできないだろう。俺にはあの少年のことが最後まで理解できなかった。何故、あれほどまでに空へ固執するのか。パイロットになることに固執するのか。叶わないと決まってしまったのに、何故あんなにも頑なに夢を持ち続けたのか。叶わない夢を諦めるのと、それでも追い求め続けるのと、一体どちらが正しいのか。全てがさっぱり判らなかった。俺は精神科医としてのプライドを打ち砕かれた。それでも、彼がいつどこでどうやって自殺するかは判った。俺は彼の自室で彼を待ち構え、今回の実験の協力を要請した。自殺を止めることはできなかった。ここで自殺を止めても、彼は結局別の方法で自殺してしまうからだ。少年は要請を受諾した。俺が自殺を制止しなかったことに礼を言った。俺は自分の無力さを侘びた。彼は薄く笑うと、これは自分の問題ですからと言った。俺は何も答えられなかった。彼の頭に電極を取り付けた。

そして少年は死んだ。

あんなにも何かを求めたことが、俺にはあっただろうか。あんなにも何かになりたいとこいねがったことが、俺にはあっただろうか。精神科医は確かに憧れの職業だった。だが、なれないからといって自殺してしまうほどそれに固執してはいなかった。医師になれなかったらなれなかったで、おとなしく諦め、別の道を選んでいたに違いない。

喫煙室の窓は西向きで、夕焼けの光が部屋をオレンジ色に染めていた。雲一つ無い、綺麗な空だ。

さて、この後空の色は何色になるだろうか。暗い青色になるか、それともピンクグレープフルーツピンクになるか。できれば前者であってほしい、と小鳥遊医師は思った。もしこの世界が、少年の走馬燈の中の、願望の世界と同じように、奇妙で美しい空を人が自由に飛び回ることができる世界であったなら、あまりにも少年が報われないからだ。

そして日が暮れた。

# 一〇〇の穴と ストロベリー・ワンダーランド *in Labyrinth, the Strawberry Dream.*

夏炉かなた

脳みそが疲れてる。身体が休んでいても脳が活発に動いてるのだから、仕方ないのだけど。

え？お前は誰だって？俺は……いややめておこう。まだ名乗るタイミングではないようだ。それまでは好きに読んでくれて構わない。

うん？お前も〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟のメンバーなのかって？何を言ってるんだかさっぱり判らねえな。なに？お前も幼女を愛してるのか？おいおい勝手な想像はご免だぜ。俺はそんな変態じゃない。俺の好みのタイプは美人で背が高くておっぱいの大きな年上の女性だ。普通だろ？男子高校生で、美人で巨乳なお姉さんが嫌いなやつなんているわけがない。

はあ……。さっきから何を言ってるのかさっぱり判らないよ。俺は疲れてるんだ。寝かせてくれよ。今はもう眠りたい。夢も見ずにな。

◇

まろにえ県宇都宮市環状線（通称ウツ環）を自転車で一周しようと企む酔狂な奴らはけっこういる。まあ俺もその一人なんだけどさ。あなたも一度やってみなさいよ。疲れるけど楽しいから。

一周やって満足して帰っちゃうのは素人。ウツ環の本当の面白さは、一周して、二周して、三周して……何周したか判らないくらいぐるぐるぐるぐるまわってから始まる。そんなにまわったら日が暮れてしまうって？普通はそう思うだろうな。ちなみにウツ環の全長は34㎞。山手線の全長と同じらしい。三時間も走れば一周できるかな。一周しても気を抜かず、休憩なしでひたすら走り続ける。すると突然気がつくんだ。あれ、何時間も走っているのに全く日が傾いていないってね……。ようこそ！裏宇都宮シティへ！空を見てごらん。太陽も月もなく、広がるのは一面レモンイエローの天蓋。なんてファンタスティック！さあ市街に自転車を向けるんだ。素敵な冒険が始まるぞ……。この不思議体験君もレッツエンジョイッ！

なーんて滝の原高校チャリンコ部の面々がさかんに勧誘してきたけど無視無視。何がレモンイエローの天蓋だ。自転車漕ぎすぎて幻覚見てるだけじゃん。僕は写真部に入るのだ。写真部の扉をノックする。沈黙。鍵が掛かっている。

「あー君もしかして写真部入部希望？君がほんとに写真が好きで入るならやめといた方がいいよー。ここは写真部っていうよりカメラ部。写真なんか全然撮らないでカメラいじりばかりしているから。そこに今週の一枚が貼ってあるじゃん」

見れば扉の横に〝今週の一枚〟というプレートが下がっていて、その下に写真が貼ってある。白黒。木の下で桜が舞う。その中、くるりとこの学校の生徒が回転しているその瞬間を切り取ったものだ。男は学ランを一番上のボタンだけ留めていて、マントのようになったそれがふわりと広がっている。両腕を大きく広げ、にやにやしている。坊主頭。タイトルはついてないが……『馬鈴薯桜旋風』とかどうだろう。

「それ、今週どころか〟今世紀の一枚〟だともっぱらの噂だぜ。少なくとも、俺が入学したときから全く更新されていない」

「〟今世紀の一枚〟と呼べるほどの作品には見えませんね」僕は振り向いた。知らない人だ。襟章から判断するに二年生である。先輩だ。黒縁眼鏡の奥で細い目が光っている。「まず、被写体が男子高校生というのがいただけない。ベタだけど、これがかわいらしい幼女とかの写真だったらもっといい写真になると思いますんですがね……」

つい〟幼女〟なんて言っちゃったけど、そこは華麗にスルーしてくださいな。

「お？判る？俺も全く同じことを考えていたんだよ。素敵な情景なのにさ、無粋な男がモデルの写真ってことで全て台無し。しかも見ろよこの表情この格好」

「ふざけているのか……もしくは自分に酔っているんでしょうね」

「もったいないよなー。写真自体はすごく上手く撮れているんだから、やっぱりモデルだよ。桜吹雪の中で踊るのは、幼女こそふさわしい」

あれ？今〟幼女〟って言ったよこの人。

「桜吹雪に似合う幼女といえばやっぱりお嬢様みたいな子かな？長いストレートの黒髪をなびかせて、ふりふりのドレス着て……」

「いやいやもっと快活な感じの子でしょう。髪型は短いポニーテールとか、ボブとかかな。格好は、体操着じゃ行き過ぎだけど、動きやすいもので……」

「お、語るねえ。ま、それも一理あるかもな。だがあくまで俺はお嬢様路線を推す！……」先輩はにやっと笑った。「さっきからの君の発言から判断するに、君はもしかして幼女が好きなんじゃないかね？」

「……」

「隠しても無駄だぜい。それに隠す必要もない。なぜならこの俺も幼女を愛しているからだ」

「へえ……」

「君、まだ部活決まってないんだろう？俺たちの部活を覗いてみないか？」

「え？部活……」

先輩はきびすを返すとすたすた歩いて行った。迷ったが、後を追う。

たどり着いたのは文化部棟二階の一室。扉には〝ロシア文学研究会〟なる看板が下がっている。木製の看板は黒っぽく薄汚れており、年期を感じさせる。

「ロシア文学研究会……？僕、ロシア文学なんてなんにも読んだことありませんよ。前に『アンナ・カレーニア』を読もうとして挫折して、それ以来……」

「へえー！『アンナ・カレーニア』！すごいなあ。そんなの読むんだ」

「へ？」

「これは表向きの顔」先輩は看板を軽く撫でる。「裏は……」

先輩が看板を裏返すと、そこには〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟と記されていた。裏も表と同じように古めかしい雰囲気。

〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟？

「俺たちは騎士だ。……自分で自分のことを騎士と呼ぶのはちょっと小っ恥

ずかしいがな」
「騎士？」
「細かい説明は中に入ってからにしよう」
先輩は看板を元に戻すと扉を開き、僕を招き入れた。まず目の前にぬっと立ち塞がるのはどっしりとした木製の本棚。そこには『カラマーゾフの兄弟』『戦争と平和』『桜の園』といったロシアの名著が並んでいた。『アンナ・カレーニア』もある。全て未読であるのがひどく恥ずかしく思えた。
先輩は本棚を迂回して奥へ向かう。僕もあとを追うと、部室の奥は、一見普通の部屋のようであったが、もちろんそうではなかった。
決して広くはない室内。中央には大きくてどっしりとした机が据えられている。周りにはパイプ椅子が並んでいる。机の上には、ノートパソコン、文房具、たくさんの紙類（何が書かれているのかは判別できない）、美少女フィギュア、幼女のポートレート（イラスト、写真どちらも）その他様々なものが乱雑に散らばっている。
その奥の壁には窓があるが、灰色のブラインドがせっかくの南からの陽光を遮っている。さらには青いソファが壁に背をつけて置かれている。埃でうっすら白くなっていて、いかにも安物の風情がするソファだ。
東側の壁は一面本棚だ。すり切れた背表紙のすごく古そうな本から、最近買ったのだろうカバーが白く光る新しい本まで、革表紙の上等そうな本から、漫画週刊誌のようなチープな本まで、ありとあらゆる体裁の本が詰め込まれている。背表紙に書かれたタイトルまでは近寄らないと読み取ることができない。
西側の壁にはカレンダーやポスターが貼られていた。たくさんの幼女達の姿が並んでいる。ある者は笑い、ある者は泣き、ある者はぽかんと口を開けてこちらを見つめ、ある者は体育座りをし、ある者は雨に打たれ、ある者はスクール水着を着、ある者は魔法を使い、ある者は蝶を追いかけ、ある者はこたつで居眠りをし、ある者は電球を替えるためにはしごを登り、ある者は翼を生やして空を飛び、ある者は金魚をすくい、ある者はある者はスカートをたくし上げ、ある者はソフトクリームを鼻先につけ、ある者は花の匂いをかぎ、ある者はCDをくるくる回し……、ありとあらゆる幼女の、純情可憐な姿がそこにはあった。
なんて素晴らしい眺めだろう。でもこれだけ並んでるとちょっと狂気を感じるかも。
振り返ると、ダミーの本棚の背板に大きな紙が貼ってあって、

エンチャンテッドナイツ
“魅せられた騎士たち”四戒
一、幼女を傷つけてはならない。
二、幼女を蔑んではならない。
三、幼女を疑ってはならない。
四、幼女を犯してはならない。

と書かれていた。
「ほら座って座って」
先輩は僕を、東側の本棚を背にした椅子に座らせると、自分は向かいの椅子に座った。
エンチャンテッドナイツ
「我が“魅せられた騎士たち”のアジトにようこそ。まずは自己紹介といこうじゃないか」先輩は眼鏡の奥の瞳をきらりと光らせた。「俺は浦水那琴うらみずなこ。エンチャンテッドナイツ二年生で“魅せられた騎士たち”副会長だ」

「僕は伽羅瑠衣人（きゃらるいと）といいます。よろしくお願いします」
「よろしく。……さて、何から説明したらよいかな？」
「騎士と言いましたが、一体どういう意味ですか？」
「もちろんそのままの意味だよ。守るんだ。幼女を」
「その、何から守るのですか？」
「ありとあらゆるものからだよ」

◇

伽羅瑠衣人が“魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）”に入団してから一年後、季節は再び桜が舞い散る頃になった。
春休みのさなか、瑠衣人はデジタル一眼レフを片手にウツ環を走っていた。とはいっても彼がチャリンコ部の一員としてウツ環周回レースに参加しているわけではない。彼は長岡百穴古墳に向かっていた。ウツ環北部。寿司屋や焼き肉屋やらパチンコ屋やらを右手に見ながらいそいそと自転車を漕いでいくと突然奇妙な建造物が現れる。こんもりとした丘。頂上には草木が生い茂るが、側面は岩肌が露出し、そして無数の横穴が開いているのだ。百個というのは誇張しすぎだがそれでも四・五〇個は開いているのではないだろうか。穴の大きさは人が一人中で雨宿りできるくらい。奥には必ず仏像のようなものが彫られている。
穴が並ぶ様子は不気味に病的でウツ環を走る自動車に不快な空気を発し続けている。
多くの者が忌み嫌う場所だが瑠衣人はたまにこの地を訪れていた。道路に近く喧噪が聞こえてくるがしかし周囲には静謐のドームが覆う、その独特の雰囲気が好きなのだ。緑が多く、写真の被写体も多い。そしてなお重要なのは、この地は近隣の小学校の生徒や幼稚園の園児らがよく遠足に訪れる場所であるということだ。
残念ながら今日の収穫はないようだが彼はさほど落胆した様子も見せずに、周囲の写真を撮りつつ、横穴を尻目に、岩肌を上へ上へと上っていった。やがて林の中へと入っていった。のんびりとした足取りである。彼は長岡百穴に写真を撮りに来たのだ。幼女はいないが、撮るものは他にもたくさんある。
やがてちょっとした広場のようなところについた。午後の太陽が柔らかく照らしている。草地はほどほどに乾いている。瑠衣人は一休みしようと、広場の中心に生えている大きな樫の木の下に腰を下ろす。
今日は春にしては少々暑すぎる気候だが、木々の間を駆ける風が瑠衣人の汗ばんだ肌を乾かしていく。
空を見上げれば太陽が眩しい。

◇

K-01
なんだここは滝高じゃないか。僕は滝高講堂の屋根の上に立っている。
木々がざわめき、冷たい風が吹き抜ける。
僕は学生服を着ていた。ポケットの中を探ると、愛用しているデジタル一眼レフが出てくる。それは僕を安堵させる。
僕は屋根から飛び降りた。校庭に行かねばならない。僕には判る。
木々の間の小径を、風に押されるように歩いて行くと、果たして校庭に着いた。

校庭には、校庭全体に達するほどの巨大な穴があった。
穴は満月よりも綺麗な真円だ。穴の底を見ることはできない。覗き込んでも、なんの気配を感じることもできない。
さあ行こう。ダイブ。
この穴の先に待つ素敵な冒険を、僕は確信している。

S-01

あれ？ここは……。
僕は長岡百穴に戻っていた。広場ではなく、横穴が並ぶのを眺める位置だ。風は止み、生暖かさが残っている。
どういうことだ？
僕は辺りをきょろきょろした。そしてとりあえず写真でも撮ろうと、カメラをポケットから取り出した。
げ、なんだこれ。僕の愛用のデジタル一眼レフが、ものすごーくレトロな一品に変わっていた。縦に長い直方体で、レンズが二つもついている。かっこいいけどさ……、どうやって使うのよ。
あ。
僕はこのカメラの使い方を知っている。そして素敵な写真が撮れることも。
さっそくファインダーを覗く。
こんにちは！
振り返るとそこにはかわいらしい幼女が満面の笑みを浮かべ立っていた。金色の長い髪。青いドレスに白いエプロン。それだけ見ると西洋人だが顔立ちは日本人だ。もちろんかわいいからこんな格好でも許される……というかすごくよく似合っている。
こ、こんにちは？
やん、しゃべった！不思議なウサギさんね。
うん？ウサギさんだと？何を言っているんだこの幼女は？
お名前はなんとおっしゃるの？
僕の名前？……僕の名前は伽羅瑠衣人だ。
キャラルイト？おかしな名前！
君はなんていうんだい？
あたしはアリス！
アリス……？ああ、それでそんな格好なのね。
ステレオタイプだな……。
ステレオタイプって？
いかにもアリスっぽい格好だ、ってこと。
ふーん？よく判んない。
うーん、つまりそのドレスよく似合ってるよ、てことだよ。
ほんと？ありがとー！
そのとき眼前に広がる百個の横穴の内部が一斉に点灯した。次に端の穴ひとつだけが点灯し、ルーレットのように点灯する穴がくるくる変わっていった。やがて目の前の穴で光は止まり、もう動かなくなった。
びっくりしたー。この穴に入るってことかな？
……そうみたい。
行ってみようよウサギさん！アリスは僕の手を取った。どきっ。落ち着け。
幼女に手を握られたくらいで何を動揺している。
そうだね。行ってみようか。
アリスと一緒に穴の中へるんるん入っていった。横穴の中の地面には縦穴が開いていて、僕らはそのまま落ちていった。

やっと僕は幼女に出会うことができた。校庭の穴を抜けた先の長岡百穴で。そしてなんと会話し手を握ることまでしてしまったのである。あわわわ、くらくらしそうだ。

そして今、僕らは再び穴の中にいる。今度の穴は長い。墜落を始めてからもうずいぶん経つけど、まだ底にたどり着かない。

僕とアリスは、これからどこへ行こうというのだろう？

穴は、入った初めこそ長岡百穴の横穴にぴったりサイズだったけれども、すぐに大きくなって、二人でマイムマイムを踊れるくらいの円周となった。壁の材質は、よく判らないが見た感じプラスチックのようだ。水色半透明。灰色の外の世界がおぼろげに見える。

アリスは初めの方は目を丸くして周りを見ていたけど、ずっと同じ景色でさすがに飽きたのか、おとなしくしている。

アリス。とりあえず呼びかけてみた。

なあに？ウサギさん。

君は、あの辺に住んでいるの？

うん。そうだよ。

なんで、あんなところにいたの？

お散歩してたのー。

散歩？渋いなあ。

みんなからもよく言われる。でもなんでみんなお散歩しないのかなあ？こんなに楽しいのに。あなたみたいな不思議なウサギさんにも出会えるのに。

……さっきから気になっていたんだけど、ウサギさんって誰のこと？もしかして、僕のこと？

うん？そうだよ。かわいいウサギさん。

ウサギ……。僕は自分の身体を見たり顔をぺたぺた触ったりしたが、いつもの自分のように感じられる。

無邪気に微笑んでいる彼女を見やる。彼女の目には、僕がウサギに見えるのだろうか。

ねえウサギさん。その手のものは何？

これ？……これはカメラだ。

カメラ？面白い形だね。

お、そうだ。じゃあ今から君の写真を撮ってあげよう。

ええーいいよ撮らなくて。

いーじゃんいーじゃんまだ墜落終わらなさそうだし。

僕はカメラを構えると、パシャパシャし始めた。いいなあ画になるなあ。色々とポーズを指示し、自分も穴の中を動き回りながら写真を撮り続ける。空中を自在に飛び回れるのは奇妙だが、こんな不思議な写真を撮れることって今後一生無いだろうし、感謝こそすれ気にしないことにしよう。この一連の作品群、タイトルは……『墜落幼女、あるいは上昇世界』とかどうですか。

初めは緊張している様子だった彼女も、今では自然に笑えるようになっている。

ただ背景が代り映えしないというのがどうもな……。ちょっと墜落感の演出に欠ける気が。

今度はアリスを上下逆さまにしてみた。頭が下で足が上を向く。不思議なことに、おさげは重力の影響を受けて下に下がるのだが、スカートが下がらず、ドレスは正常な形を維持していた。僕は下の方に回り込んで、慌てふためいているような顔をしてくれない？

えーできないよう。

慌てているというより驚いているような顔だな……。ま、いいか。カメラの上からファインダーを覗く。
は。
僕は気づいた。アリスの平らな胸とドレスの間に、大きく隙間が空いていることに。
いけない。そんなの撮ったら、僕の写真はひどく低俗なものになってしまう。だが僕はシャッターボタンから指を離すことができない。アリスはドレスの下には何も着ていなかった。顔や脚などと比べると、日焼けしていない白い肌があらわになっている。そして、もう少しで見えそうなのが……。
その瞬間、世界は真っ赤になった。
壁の色が水色からまるで血のような赤色に変わったのだ。そして僕の手からカメラが離れ、ものすごいスピードで落下していった。慌てて取り戻そうとしたが、もう遅い。
こちらを見ていたアリスも、驚きで目をまん丸にしている。
大丈夫？ウサギさん。
しかし僕が口を開くより早く、見えない何かが僕を奈落の底へとやはりめちゃくちゃなスピードで引きずり込む。
ウサギさん！
アリスの声が響く。

K-02

あらら～ん！
背中から硬い石の床に叩きつけられ、激痛が走った……ような気がした。今はもう全然痛くない。衝突時に発生した轟音が反響している。あらら～ん、あらら～ん、あらら～ん……。
天井には僕が落ちてきた穴が開いている。真っ赤なトンネル。なんか不気味だ。しばらく見ているとアリスが普通に足を下にしてゆっくりふわふわ落ちてきた。立ち上がろうとするが、身動きできない。
ふむす。
アリスは僕の腹の上に綺麗に着地を決めた。
あら？ウサギさんごめんなさい！知らずにあなたを踏んづけちゃった。
彼女はぴょんと飛び降りると、僕の顔を覗き込む。
大丈夫？
ああ、なんとか。君が怪我しないで良かった。
僕はやっとこ起き上がる。
ここはどこ？
古い遺跡のようだ。六畳ほどの広さで、正六角形の部屋。壁や床は全部黒に近い灰色の石でできている。ところどころ、茶色に苔むしている。三方には壁が無く、通路が伸びている。
カメラ、大丈夫だった？
おおそうだった。どこにいってしまったのだろうか。
なくなっちゃったの？……探してみようよ。
二人で部屋の中をあちこち探す。狭い部屋だ。すぐにカメラが消失したことに気が付く。
ないねー。
みたいだね。残念だなあ。ここの風景も、是非写真に納めたかった。
あ！ウサギさん、見て！
アリスは天井を指さした。見上げると、さっき僕達が落ちてきた穴がなくなっていて、代わりに
**ニンフェットは真っ赤な苺の夢を見るか？**

という文字があった。
何故こんなことが書いてあるのだ？
ニンフェットって何？
アリスが問う。
君のような女の子のことだよ、という言葉が喉元まだ出かかったが、しかしそれは誤りだ。
さあ？なんのことだろう。
ニンフェット……。あるいはそれは僕たち〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟にとって忌むべき存在かもしれない。たとえそれが幼女であっても。僕らの幼女崇拝はニンフェットを対象としたものではない。
絶対に。

〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟四戒
一、幼女を傷つけてはならない。
二、幼女を蔑んではならない。
三、幼女を疑ってはならない。
四、幼女を犯してはならない。

僕は四戒を心に再び刻み込んだ。
なんで穴なくなっちゃったんだろ？
どうしてだろう？訳が判らないな。
それに、不思議な言葉だね。〟ニンフェットは真っ赤な苺の夢を見るか？〟〝ニンフェットは真っ赤な苺の夢を見るか？〟……。
あまりその言葉を繰り返さない方がいい。
なんで？
理由は判らないけど、なんとなく不吉な言葉って気がするんだ。……忘れちゃった方がいいよ。
理由が判らないというのはもちろん嘘だ。
判った。そうするねー。
さあ、先に行ってみよう。
僕らは三つの通路から一つを選ぶと、並んで歩き出した。何事もなく突き当たりの小部屋に到着する。そこの床にはやはり穴が開いていた。
また穴だね。
中に入れってことなんだろうな。
大丈夫かな？
大丈夫さ。僕はアリスの顔を見ると微笑んだ。僕がいるから。
僕はアリスの手を握ると、穴の中へ飛び込んだ。

S-02
森……だろうか？いや、森というには空気が生暖かすぎる。ここはジャングルだ。南国の木々が生い茂り、天を覆い隠している。
暑いなーもう。
アリスはドレスの胸元をぱたぱたして、なんとか涼を得ようとしている。
確かに暑いな。……とりあえず、歩いてみようか。
うん。
僕たちは歩き出したが、特に当てがあるわけでもない。進んでも進んでも景色がほとんど変わらないのには閉口した。だけど時々鮮やかな色をした大きな鳥が飛び立ったり、原色の美しい花が咲いていたりして、それにいちいちアリスが反応して感嘆するのがなんともかわいらしかった。

やがて水の流れる音が聞こえてきた。
ウサギさん聞こえる？近くに川があるみたいね！
アリスは急にはしゃぎだした。僕もなんだか嬉しくなって、
そうみたいだね！行ってみようか。
僕たちは駆けだした。木立を抜けると果たして川に着いた。流れは緩やかだが、巨大な川だ。対岸は霧に隠れてしまって見ることができない。
岸辺に着くとアリスは早速服を脱ぎ始めた。
うっぷす。
何してるの？
え？水遊びするんだよ。ウサギさんも一緒に遊ぼうよ。
いやいやいや。ちょっと待ちなさい。裸はまずいでしょ。
アリスはきょとんとしている。
いや……何を僕は動揺しているんだ？幼女の裸ぐらいで心を揺らされるなんて、〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟の風上にもおけない……。
だってこんなに暑いんだよ？いーじゃん別に。……あれ？
彼女はすっかりドレスを脱いでしまった。僕はしっかり目をそらしていたが、彼女の頓狂な声に目を戻した。
彼女はスクール水着を着ていた。
さっきまでこんなの着てなかったのに……。ま、いっか。これで好きなだけ泳げるね！
アリスは川へじゃぶじゃぶ入っていった。
どういうことだ、これは？あの穴の中で見たときは、彼女はドレスの下に何も着ていなかったはずなのに。
しかし、無邪気に水を巻き上げて遊んでいるアリスを見ると、そんな疑問はどうでもよくなった。それにしても……スクール水着、悪くないなあ。
あれこそ幼女の魅力をもっとも引き立てる服装の一つだろう。むしろ生まれたままの姿よりも……。ふるふると首を振って嫌な想像を掃き捨てた。
川ではアリスが楽しそうに水遊びしている。穏やかな時間はしかし彼女の悲鳴によって破られる。
助けて！何かがあたしの足を離さないの！
僕は川を突進して彼女のもとへ参上した。彼女は今にも溺れてしまいそうだ。僕は彼女をしっかり胸に抱きかかえ、彼女の足を掴んでいるものを蹴った。何度も何度も。
痛い痛い痛い。
それはアリスを離した。僕は彼女を抱いたまま一歩下がった。
ワニだ。緑色の、ずんぐりとしたワニが姿を現した。
痛いなあもう。ちょっといたずらしただけだろう。なにも蹴ることないじゃないか。
確認したが、アリスの足は無事だった。
それに、お前さん達がおれのねぐらを荒らしてきたんだぜ。足をばっくりやられても、文句は言えねえってもんだ。
あら、そうだったの。アリスは言った。ごめんなさいね。
いいよいいよ気にしちゃいない。それはそうとお前さん達はいったいこんなところで何をしているんだ？
〝穴〟を探しているの。
そうだ僕らは穴を探しているのだ。
どこか近くに穴はありませんか？僕も訊いてみた。
穴ね……。あるにはあるが……。
本当⁉どこにあるの？教えてくれる？
そっちだ。

ワニが鼻先を向けた方向。やはり木々が生い茂っている。
そこの茂みを探してみな。古い穴が開いているはずだ。
僕らは礼を言うとその茂みへと歩み寄った。確かに地面に穴が開いていたが、その上にはたくさんの草木が生い茂り、とても中に入れるものではなかった。引っ張ってみても、とても穴は露出しない。
だめだね……。
ああ。これでは穴には入れない。草を払わないと……。
あ、そうだ！
アリスは何かを閃いたのか、先ほどのワニのもとにとてとて走っていくと、
あなたの一番鋭い歯をくださいな。
おれの歯だと？
あの草を切って、穴に入れるようにしたいの。
おお、そういうことなら。ワニはぐわりと口を開けた。ピンク色の口腔と、ぎらぎら並ぶ歯が見える。アリスは怖くないのだろうか。興味津々に中を覗き込む。持っていきな。
どれがいいかなー？
アリスは頭をワニの口の中に入れた。
むきゅり！
ワニは丸呑みした。アリスを。森を。僕を。げっぷ。

◇

M-01
どうも皆様。素敵な春の午後のひとときをお過ごしでしょうか。え？ミィですか？いやはやミィなんかのことを気にかけてくれるとは、あなたはなんと優しい人なのでしょう。ははは。見ての通り、楽しんでおりますよ。
ふふふふふ。そうですねーそうですねー。今回は特別に、皆様にもミィの珠玉のコレクションをご覧いただきましょう。
さあご覧あれ！ミィの幼女コレクションを！
かわいいでしょうかわいいでしょう。冷たい鉄格子の奥、恐怖でぶるぶる震えながら縮こまっている幼女達。その震えは寒さからくるのでしょうか？それとも恐怖から？彼女たちの一糸まとわぬその姿から、涙を浮かべたその瞳から判断するに、両方かも知れませんね。寒くないように、一応ミィのお気に入りのテディベアをたくさん檻の中に入れているんですがね……。
ああ、熊さん達に囲まれた幼女達……なんてプリチーなんだ。時を忘れて見入ってしまいますよ。
ふうむ。しかしそろそろ彼女たちにも飽きてきましたね。こう何日も同じものを見続けちゃうとね。……というわけで今から幼女を捕獲しに行きたいと思います！
さあ扉を開けて外の世界へレッツゴー！

Pるーるーるー。さあどこかに素敵な幼女はいないかなー？ふうむ、この時間ならお昼寝している子とか、簡単に見つけられると思ったんですけどね。なかなかいません。
あー桜が美しいですね。もうこんな季節ですか。
あ！
発見しましたよー。まさにぴったりの幼女。私の好みにぴったりの可憐な幼女。さあ、私の巣にお持ち帰りしましょうか。
しかし、余計なものがくっついていますね……。ま、どうでもいいことです。

K-03

◇

びっくりしたー。
突然食べられちゃうなんてね。怪我はない？
大丈夫！……ここはどこ？
どこだろう？
一面の砂漠だ。地平線を三六〇度切れ目なく見ることができる。ただし砂の色が蛍光グリーンなのだ。なんだこの目に悪い砂漠は。
風が時折吹き、空気を薄く緑に染める。空は雲ひとつなく、冗談みたいに青い空。明るいが太陽はどこにもない。不思議と暑さは感じなかった。
とりあえず、歩いてみようか。
穴はどこにあるのかな？
僕らは当てもなく歩き始めた。砂に足をとられて歩きづらい。
気持ち悪いよ。
アリスは身体についた緑色の砂を不快そうに払うが、ほとんどくっついたままだ。それもそのはずアリスはびしょ濡れの水着姿のままだったのだ。これは不快だろう。しかしあの青いドレスは先の森に置いたままだし、他に着る服もない。
どうしたもんかねえ。
あ、あれ見て。ウサギさん！
アリスが指さした方には泉があった。砂漠のオアシスというやつだろうか。砂の不自然な緑と空の強烈な青に挟まれて、泉の水の自然な青色はとても目に優しかった。
早く行こう！
アリスは駆けだした。僕も慌てて後を追う。
そんなに焦らない方がいいよ。体力を温存しないと。
僕たちは早足で泉に向かった。
歩く。歩く。歩く。
けれどいっこうにオアシスにたどり着けない。
おかしいなー。こんなに歩いたのに、どうして着かないんだろう……。もう疲れちゃったよ。アリスはぺたりと座り込んでしまった。
ベタだな……。
え？
蜃気楼だよ。あれ。泉なんて実在しないんだ。
僕は気づいた。近づいても近づいても逃げていくあのオアシスは間違いなく蜃気楼であると。
追いかけても追いかけても、離れていく。
そんなー……。アリスは顔をくしゃくしゃにした。僕も腰を下ろして、彼女の頭をそっと撫でる。
ぽたりぽたりと、緑色の砂地に黒い点を打っていくアリスの涙。
“魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）”として、僕は一体何ができるのだろうか。しかしこんな奇妙な世界で、僕はあまりに無力だった。幼女が涙を流しても、僕は抱きしめることすら怖くてできない。
時が止まったような重苦しい静寂が続く。アリスのすすり泣きだけでは静けさは破られない。静寂はアリスの涙を促し、涙は地をうがち、地には穴が開き、やがて大きくなった穴は僕たちを飲み込んだ。僕たちの後には静寂だけが残った。

S-03

ここは水の中だ。濁っていて太陽の光がほとんど差し込まない。ひんやりとしていて心地よい。息苦しさは感じない。

アリスはどこへ？

僕は名前を呼ぼうとするが、白い泡が口から出るだけだ。

探せ。探せ探せ探せ。焦りばかりが蓄積されていく……。

きゅううん。ぎゅううん。耳鳴りうるさいよ。うん？

るりりりり。水に流れが起きた。流れは僕を捕まえて、僕の目の前には穴がある。え？もう穴に入ってしまうの？穴の中に吸い込まれていく。今度の穴は細く、僕の身体がぎりぎり入るくらい。そして僕がいる穴の他にもたくさんの細い穴があって、その中にはアリスがいるのもあることが判る。穴は細い管となってより大きな管へと集まっていく。そこで僕とアリスは出会い、一緒に上方へと押し上げれていく。ごうんごうんる。やがて管の外の世界が明るくなっていく。途中、僕は脇道に入り、アリスと離れてしまう。天井には綺麗な緑色の袋がたくさんぶら下がっている。中には命の糧がどろどろ詰まっている。下のほうには、まるで唇のような形のたくさんの穴が開いている。この緑色の唇の中に飛び込むか、それとも緑の袋の中に入って太陽に焼き尽くされるか、好きな方を選ぶが良い。対するアリスはさらに上昇していく。管の出口には真っ白な袋がたくさんぶら下がっている。アリスはその袋一つひとつと溶け合っていく。

真っ白な睡蓮の花が咲いた。

その様子を、もう一人の僕とアリスが並んで眺めていた。アリスは既にもとの青いドレスと白いエプロンという格好に戻っている。

この純粋な花が汚されないことを祈ろう。

僕らは背を向けると、穴に入った。

K-04

僕たちは並んで寝転んで星空を見ている。作り物めいた満点の星空だ。きれー。アリスが呟く。確かに美しい星空だ。空気が澄んでいるのだろう。

水分を含んだ草原の背の低い草が僕の頬を撫でる。

あれが乙女座？

む。そんなこと言われても、僕は星座なんか判らないぞ。それこそオリオン座くらいしか。

さあ……どうだろ？

知らないの？ふうん……。

恥ずかしいなあもう。しかし、それにしても美しい星空だが星の配置に微妙に違和感がある。整いすぎているのだ。

やがて僕の目には星と星を結び合わせた星座が見えてくる。それは文章だった。

**れども砂まみれになって眠る。ひんやりとして心地よい。わたしの背に、砂は幾度も幾度も降りかかりわたしを埋没せんとするが、わたしの身体が大きすぎるのだろうか、わたしの背びれの大部分は空を切り続けている。わたしは赤いマフラーを着けている。赤いマフラーとは呪いだ。しかしわたしには首などないのに、いかにしてマフラーを巻いていられるのか。いや、背びれに巻けばよいのだ。それならこの忌々しい砂にマフラーがまみれることもない。ああ、だがわたしの腕は既に砂の中だ。さらには砂がどうにも鋭くなってきたようだ。少しずつではあるが砂は確実に**

なにこれ？意味判んない。
アリスにも見えているようだ。
僕にもさっぱり判らないよ。
文章はまだまだいっぱいあって空を覆いつくしている。
うかあなたが持っている銀の時計をわたしにいただけないだろうか。単身が子猫のように愛らしいその時計を。わたしにはその時計が必要なのだ。ありがとう。わたしは時計を受け取ると、それを回転木馬のただ中に放り込む。馬に蹴飛ばされ馬車に踏まれて時計は割れ、中からぽにゃりとした塊が現れる。それは真っ赤な塊で、ぬれぬれと光艶めくがそれも木馬の餌となってしまうだろう。しかし心配はいらない。なぜならわたしは既に
ぽにゃり！突然アリスが叫んだ。ぽにゃり！
どうしたの？
面白い言葉ね。ぽにゃりぽにゃりぽにゃり！
お気に召したようだ。
たぶん“ぽんやり”のタイプミスだと思うけど……。
その瞬間、星の並びが変わった。
ぽにゃりぽにゃりぽにゃり

やりぼにゃりぼにゃりぼにゃ

その瞬間六方全ての壁が文字で溢れかえった。
Adfkjf dn ekn vrnir me;v; k2 f he f n hf d3u ir f43 jh 32 jq d; s h8 hv hjw 9 jnw ij dn 9rfa e wq pkwlaoc pkjda ikejiqij ua koqwu nmo king ado wdk ad23 ajdu „amni 3jwc. Oqwdkm, jfijwf9 Kefwk? Lkokwf ! p eked f efdjei aloko l0 dwfcok, wekf, fwc ,wimfiwm qok. Loviw ,aief Oiowi .f iiiwdaok koiu. Misrabuo lpiwi lean fsbvxzz juzy. Mitorerune,
さらに困ったことには、さっきから狂ったように猫の鳴き声が響き続けるのだ。なーなーなーなー。
やめて！
アリスが目を閉じ耳を塞ぐ。しかしもちろん奔流は止まない。
Qdmii ldndl diqk. Qwdiel qdki, dwqedi? Dji, 2ei kojuzcx koi, oisoumi katzo. Dekiounzaejui okdai I moado, iasdki. Diaqdjil Kijao akdpk p kodkoasi mxezbvue u dnjn idjal, qjidjl mm.wjdfm a. ijdofk. Kdiqwj. Okaid. Oaidnmem uuu mwle, dm , idi. Iqwokojki.
やめてくれ！そんなのほとんど不可能じゃないか！
なーなーなー。いよいよ気が変になってしまいそうだ。
その時アリスの足元にりんごが落ちてきた。
アリス！それを齧ってくれ！
アリスはやっとの思いでりんごを拾い上げると一口齧った。
みかん！
アリスは目を丸くした。
ウサギさん、これ、りんごなのにみかんの味がするよー。不思議だね。
本当？僕にも一口くれるかい？
いつの間にか文字も猫の鳴き声も消失した。
確かにみかんの味のするりんごだ。
地面の雲に穴が開いた。僕たち二人は墜落を始める。

◇

B-01
へイー！
いよいよ俺の出番ってか？笑いだな。
さて。
まずはおっさんを探さなくちゃな。……ここはどこだ？滝高か？ま、どうでもいいことだ。すでにおっさんは俺の夢の中に侵入しているだろうから、すぐちょっかいを掛けてくるはずだ。
ねえ胡蝶くーん。お姉さんと一緒に遊ばない？
ほら来た。俺は振り向くと目の前に大人の色気たっぷりのお姉さんが立っていた。胸元の大きく開いた黒いスーツにタイトなミニスカート。
……ってそういうセレクトがもうおっさんなんだよなー。
さすがにもう引っかからないか。おっさんはいつもの姿になった。白髪交じりの頭だが、三〇代と言われても六〇代と言われても通じてしまいそうな年齢不詳の男だ。小さな目でにやにやと笑っている。やせ形で、びしっと決めたダークスーツが似合っていないこともない。つまんないなー。胡蝶くん、最初はあんなに初心だったのにね……。
うわ、やめろ。その話をするな！
僕が化けてるのも知らず、ちょっとかわいがられただけでとろんとした目をしちゃってさ。確かよだれも垂らしてたよね。かわいかったなー。
言うな！俺のトラウマを蹂躙なくえぐりやがって。
ははは冗談だよ。それにしても一瞬で僕の正体を見分けられるように

なるとは。ずいぶん進歩したね。明晰化も申し分ないし。

そりゃあ俺だって努力したからな。

うんうんその意気だ。……さ、じゃあ今日も僕の仕事を手伝ってもらおうかな。僕は先に外に出ているから、早く来てね。

そう言うや否や、おっさんは自分の真横にドアを出現させると、それを開き、中に入ってドアもろとも消えてしまった。

くそー。勝手に他人の夢を改変しやがって。むかつくなあ。平気で自分の姿も変化させられるし。どんだけ意識力高いんだよ。

俺はまだ自分の夢でも自由に出入りできない。とりあえず今の俺にできる方法で外に出よう。切れ目を探さないと。俺は滝高をあちこち探検する。

切れ目が見つかるまでの間、簡単に説明しよう。今いるここは俺、夢乃（ゆめの）胡蝶（こちょう）の夢の中だ。夢といっても将来何になりたいとか、そういう夢じゃないぜ。みんなが夜寝ている時に観る、あの夢だ。

皆様は夢の中で、〝俺、今夢を観てるんだ……〟なんて自覚しながら観る、いやにはっきりした夢を観たことはないだろうか。これは〝明晰夢〟と呼ばれるもので、それを意図的に起こすのが〝明晰化〟だ。これによって俺たちは自分の夢の中を自由に行動できるようになる。

俺は鏡を創り出すと、それで自分の格好を確認した。いつも滝高で来ている学生服だ。問題なし。ひどい時は人外になっていることもあるからなー。おっさんなら外でも他人の夢の中でも自由に姿を変えられるけど、俺はまだそこまでの意識力を持っていないから、融通が利くホームでちゃんとした格好になっておかないと、恥をかくことになる。箒も創り出しておく。これは空を飛ぶために必要だ。

夢とは自分の無意識のメッセージである。それを意識の力によってねじ曲げることで、夢を改変し様々なことができるのである。自分の夢（ホーム）ならば勝手知ったる自分の無意識だから容易に改変できるが、他人の夢（アウェイ）となるとそうはいかない。その意味では、自由に姿を変えられるおっさんは相当な意識力を持っているのだ。認めるのは癪だがな。

さて、切れ目が見つかった。ここからホームの外に出る。そこは公共の空間（パブリック）だ。

Pパブリックは通常現実世界と変わらない構造をしている。ここを支配しているのは俺たちの共通無意識だけだ。基本的にはあまり突飛な世界とはならないが、現実世界との大きな違いは全てがモノクロに見えるということだ。世界はずいぶん論理的に運営されている……らしい。俺はよく知らんけど。

今俺は自分の部屋にいる。ベッドの中で俺自身があほ面さらしながらぐうすか寝ている。俺の鼻のあたりに緑色の直径一メートルくらいの球がくっついている。これが俺の夢で、俺はさっきここから出てきたというわけだ。俺はこれを〝鼻ちょうちん〟と読んでいる。

隣にはおっさんが立っている。

遅いぞ。自分のホームからすぐ脱出できないのはまだまだ修行の余地があるよな。

すいません。俺は素直に謝る。

まあ努力しなさい。さて、じゃあ行くぞ。

おっさん。今日の仕事はなに？

ちょっとした調査だな。

この男こそ俺の師匠であり実の叔父でもある、夢乃Q作だ。ふざけた名

前だろう？もちろん本名ではない。ある作家から名前をとったらしいが、俺は知らん。彼は、普段はハロウィン通りの路上で店を開いているしがない夢占い師だが、裏では〝眠り〝や〟夢〝に関する様々な問題を解決する夢探偵として有名らしい。

まずはお宅にお邪魔するぞ。おっさんはふわりと浮かび上がった。俺も箒にまたがり空に浮かぶ。いつか道具なしで空を飛べるようになりたいものだ。

とある民家の屋根に降り立つと、そのまま屋根をすり抜けて、幼い女の子の枕元に立った。

彼女、ここ二ヶ月くらい眠り続けているんだって。最近、いつまで経っても目覚めない小さな女の子が市内にたくさん確認されるようになった。僕はそれの調査を任された、ってわけさ。

おっさんは女の子の姿を一目見ただけで状況を把握したようだ。

駄目だこの子。意識を奪われている。

俺も彼女の鼻ちょうちん見て理解した。彼女の薄桃色のそれには、無残に開いた穴があった。彼女の意識はそこから無理矢理連れ出され、そのままどこかに閉じ込められているのだろう。

でも、意識を誘拐するなんてできるのか？

常人には無理だろうね。僕たちのような夢を扱う術を持つ者でも、絶対にそんなことできない。なぜなら、僕たちは眠らなきゃいけないが、それと同時に目覚めなきゃいけないからだ。誰かの意識を連れ出してホームに拘束しても、自分が目覚めてしまえば夢は消え、この子はこの子の夢に戻って来られるはずだ。

つまり、この誘拐事件の犯人は、永遠に目覚めていないということなのか？

そういうことになる。……よーし。こうなったら絶対に犯人を捕まえてやる。行くぞ胡蝶！

おう！

俺たちは女の子の家を後にした。

宇都宮市の上空を飛び回るがしかし、なんの手がかりもなく途方に暮れるのだった。

ずっと寝たきりの男ってだけだからな……。

男と決め付けるのは早計じゃないか？胡蝶。女にだって変態はいる。

いやー。どんな叙述トリックよそれ。ないない。

そうか……。しかしそれにしてもどうしようもないな。こうなったら今寝ているやつの夢ん中片っ端から覗いてやるか？

頭の悪い作戦だな。……しかしそれが一番確実か。

今は平日の昼間だ。こんな時間に寝ている人間は少ないはず。

そんなこと言ってるおっさんはどうなんだよ。

うっさい。これが仕事なんだ仕方ないだろ。……うん？

どうした？

あの夢を見てみろ。

このとき僕らはウツ環北部を飛んでいて、おっさんが指差したのは長岡百穴ぶつぶつ古墳で、そこのちょっと開けたところには大きな樫の木があって、それが〝鼻ちょうちん〟で大変なことになっていた。二色の鼻ちょうちんが樫の木をすっかり覆ってしまっている。一つは水色で一つは赤。梢の方にあるのが水色でそれは綺麗な卵形をしていて、根元の方から伸びる歪な赤い鼻ちょうちんがそれをぐるぐる取り囲み、交差し、貫き、もつれ合っているのだった。

なんて一方的な感情なんだ……。
Aさんと B さんがすぐ近くで寝ていて、AさんがBさんを思う気持ちが余りに強すぎるとき、このような事故が起こってしまうことがある。Aさんの夢が、Bさんの夢を侵食してしまうのだ。この場合、Aさんの意識とBさんの意識はお互いの夢の中をさまようこととなる。普通は相思相愛じゃないと成り立たない現象だが、今回は特別なケースだ。
ありゃまずいな。ほどいてやらんと。このままじゃ、どちらも夢の迷宮に囚われて、目覚めることができなくなる。
おっさんが言った。俺はうなずく。
近くまで降りて、木の根元で寝ている赤い夢の持ち主を確認する。それは俺の同級生の伽羅瑠衣人だった。
伽羅っちかよ。
知り合いか？
俺のもとクラスメート。クラス替えだから、次同じクラスになれるかは判らない。
そうか。ならなおさら助けてやらんと。……こういうときどうしたらよいか判るか？
ああ。取り敢えず二人の意識をそれぞれの夢の中に戻す。意識が無意識の深奥に入ってしまっているときは、そのまま目覚めさせてしまうと意識が戻って来られなくなるかもしれないから、夢の入り口あたりまで意識を引っ張って来た上で目覚めさせる。
上出来。じゃあやってみなさい。
俺が？一人で？
そうだ。もうそろそろ一人でこれくらいのトラブルは解決できるだろ？
判ったよ。やってやんぜ。
光栄だ。俺は友達を救うため、飛び上がって夢に入り込もうとした。そして伽羅っちがご執心の、木の上で眠っている水色の夢の持ち主を確認する。
それはかわいらしい女の子だった。さっき会った被害者の女の子くらいの年齢だ。幼女といってもいいかも知れない。……いや間違いなく幼女だ。
伽羅っち……。
俺はため息を一つつくと、赤い鼻ちょうちんに飛び込んだ。

◇

K-xx
真っ暗な空間だ。闇に目が慣れてきてやっと周囲の様子がおぼろげに判るようになる。
怖い……。
アリスが僕の手をそっと握ってきた。僕は優しく握り返す。
大丈夫。
僕たちは穴を探すために歩き出した。固い床にカツンカツンと足音響く。
行けども行けども闇が広がるばかり……かと思われたが、途中僕は何かを蹴飛ばした。拾ってみると、それはあの長い穴で落としてしまった二眼レフカメラだった。
あの時のカメラ！見つかってよかったね！
ほんとによかったよ。まさかこんなところにあるなんてね。
ここ、どこなんだろ？
うーん……。取り敢えず歩いてみよう。何か発見があるかも。

しかし、今度はもう何にも出会わなかった。行けども行けども濃密な闇が広がるばかり。
どういうことだろう？
もう、疲れちゃったよ……。
そっか。じゃあ休憩しよう。
僕らは立ち止まった。
静かだね……。
うん……。
ああ、僕は今幼女と手をつないでいるのだなあ……。それだけで、なんて心が華やぐのだろう。いつまでもずっとこうしていたいよう。
無粋な声が静寂を破った。
こんばんは。お二人さん。いったい何をお探しで？
振り返ると男が立っていた。醜い男だ。鼻はひしゃげ、眼は落ち窪み、唇は紫色でひん曲がり、顔中は汗でてかてかで、頭には縮れた髪の毛が少しだけ残っていて、小太りな体形、よれよれのスーツにやたら派手なネクタイをしていた。
アリスは僕の手をぎゅっと握り締めた。
言っとくけどね、ここにはなーんにもありゃしないよ。なんでこんな奥の方まで来ちゃったのよ。
あの、僕たち、僕はつっかえながら言った。僕たち穴を探しているのですが。
穴、だと？男はにたりと笑った。穴ならそこにあるじゃねえか。男は僕の横で震えているアリスを指差した。
殺してやる。
僕はこの男を許さない。
その時僕の手の中にあった二眼レフカメラがカタカタ震えた。僕が男のほうにカメラを向けると、上側のレンズから一本の矢が飛び出し、男を貫いた。
ふむっる。男はにやにや笑いながら白いもやもやとしたものになって、最後には消えてしまった。
なんだったの？あいつ。
判らない……。でもすごく邪悪なやつだ。
だよね。すっごく悪そうな顔だったもん。……でもウサギさんがやっつけてくれたから、もう安心だね。
そうだね。きっと、大丈夫だ。
しかし……。僕は途方にくれる。穴はどこにあるのだ？
あ。
穴がなければ作ればいいのだ。僕はカメラのレンズを自分の喉もとに向けた。きっとさっきと同じように、レンズから矢が飛び出て、僕の喉に穴を開けてくれるだろう。この時僕の頭には前に読んだ澁澤龍彦の『穴ノアル肉体ノコト』というエッセイがあった。
これで僕が両性具有になれば、あるいは……。
その時、
おーい！
再び振り返ると、見覚えのある人物が手を振りながら駈けてきた。もとクラスメートの夢乃胡蝶くんだった。
夢乃くんじゃないか！どうしてここに？
いやー探したよ伽羅っち！こんな奥の方まで入っちゃってたんなんてね。さあ早くもとの世界に戻ろう。

もとの世界……？
こんなところ、いつまでもいちゃ駄目なんだ。さあ、その子も連れて……。
帰るの？
アリスが問う。
そうみたいだね。
残念だな……。でもすっごく楽しかったよ。
僕もさ。
ちょっと怖かったけどね。
さあ行こう。夢乃くんを先頭に歩き出したその時、
おやおや。もうお帰りになられてしまうのですか？
三度振り向いた僕の前には、奇妙な風体の男が立っていた。
ミィの名前は田中アレクサンドロス太郎。ですがどうぞ皆様、親愛と敬服を込めて、まりもVistaとお呼びくださいな。
男は言った。

◇

男は本当に奇妙な格好をしている。中国系の顔立ち。黒髪。片眼鏡をかけ、アロハシャツを着ている。短パンのポケットからカラフルな携帯ストラップをじゃらじゃらさせ、頭には海賊の船長がかぶるような帽子をかぶっている。そして、片手には大きな大きなテディベアが握られていた。
いったい何のコスプレだ？これは。
こいつは伽羅っちの夢の住人でも、この女の子の夢の住人でもない。俺と同じ部外者だ。俺には判る。
同業者か？いやそんなはずはない。こんなやつおっさんの知り合いの中にはいなかった。
それならば、彼こそが一連の誘拐事件の犯人なのだ。彼はこの女の子を誘拐するために、夢の中に入り込んできたのだ。
逃げろ！俺は駆け出した。伽羅っちと女の子も後に続く。他人の意識を誘拐して自分の夢の中に幽閉しているんだぞ。どんだけ意識力高いんだよ。俺の勝てる相手じゃない。
判らないのですか？逃げても無駄ですよ。
しかし男は俺達の目の前に瞬間移動して、まず俺の両脚を根元から切断し、天井から釣り下がってきた鎖つきの手錠で伽羅っちの両手を万歳の形に拘束し、伽羅っちの手から女の子を片手でやすやすと奪い取った。
一瞬だった。これで終わりだった。
無様に床に転がった俺は、それでもやつを睨みつける。
伽羅っちも鎖をガチャガチャさせるが、抜け出すことはできそうにない。
はははは。別にあなた方に恨みはないんですがね……。しかしミィの邪魔をするというのなら、動けなくなっていただかないと。
くそが！
俺は叫ぶ。
女の子が悲鳴を上げる。
離して！離してよ！助けてウサギさん！女の子は男の腕の中で身をよじるが、抜け出すことはできない。
アリスを放せ！しかし伽羅っちもその場から動くことはできないようだ。
ここは伽羅瑠衣人の夢だぞ。ホームの人間すらつなぎとめてしまうなんて……化け物か。あいつは。

そうだ化け物だ。化け物で変態だ。あんな常軌を逸したやつに、俺たちが勝てるわけがない。
くそ……。俺は目を伏せる。
やつの高笑いがこだまする。

◇

何が起こっているのか全然判らない。
唯一判っているのは、謎の男にアリスが捕まってしまい、僕は動けないということ。本当に動けないんだ。びくりとも。
ただ、僕はアリスが泣いているのを見ていることしかできない。
放して！放してよ！助けてウサギさん！アリスが泣きながら男の腕の中で助けを求めている。
アリスを放せ！せめて僕は叫ぶ。
ふうむこんな服など持ち帰ったところで仕方ありませんね。男は指を鳴らすとアイスのドレスは消え去った。自分で自分の身体を抱こうとするアリスの両手を掴み、高く持ち上げる。アリスの白い身体が露わになる。
やめろおおお！死ね！この変態が！
くくく変態ですか……。確かにミィは変態かもしれません。……しかしあなたはどうなのですか？
なんだと？
あなたの夢を覗けば判ります。やめろ、言うな。あなたもまた公言するのは憚られるような嗜好をお持ちなのではないですか？やめてくれ、それ以上は。
男は満面の笑みを浮かべ言う。
あなたとは、美味い酒が飲めそうです。
あああああああああああああああああああああああああ。
僕は！あんたとは違う！
何が違うもんですか。もっと自分の欲望に忠実になりなさい。
黙れ！
僕はこの男を殺す。絶対に殺す。しかし身体が動かない！
いつもならお持ち帰りするところですが、そうですね……。今日は特別にこの場で少しお楽しみの時間としますか。男が再び指を鳴らすと、男の下半身を覆う布が全て消えた。
いやあああああああああああああああああ！
アリスの悲鳴が空を切る。
五月蝿いですよ君。熊ちゃんあげるから泣くのはおよしなさい。男は片手に握り締めていたテディベアをアリスに押し付けた。そのまま熊は地にぽたりと落ちて転がる。男はアリスを床に寝かせると、馬乗りになった。
あなたも是非お楽しみください。
あがああ何故だ。くぎぎぃ今こそ幼女の危機なのに。僕はアリスを守らなくちゃいけないのに。くっ、くっ、何故僕は身体を動かすことすらできないのだ！
ここは君の夢だ。伽羅っち！さっきから床を這っていた夢乃くんが言う。
伽羅っちの意識が、やつの意識に負けるわけがないんだ。思え！やつの蛮行を止められるのは、君しかいない！
そうだ。僕はアリスを救わなければならない。僕の強い思いがこの手かせを外すなら、僕はあの男を、その思いだけで殺してしまえるくらいに憎もう。騎士として、僕はあの男に鉄槌を下すのだ。
アリスを守る。決意。

僕こそが〝魅せられた騎士たち（エンチャンテッドナイツ）〟が一員伽羅瑠衣人！僕は叫ぶ。
身体の芯から力が湧き上がってくる。それは手錠を粉砕する。
死ねええ！僕は叫び、男の前に移動して、男の身体を渾身の力を込めて殴る。男の下半身が丸ごと吹っ飛んだ。仰向けに倒れた上半身、唖然としている男の顔を、何度も、何度も踏みつける。踏みにじる。その時僕の腰の辺りを背中からぎゅっとする者がいる。
もうやめて。ウサギさん。
アリスだった。
男は粉々になっていた。
僕は振り返って、アリスをそっと抱きしめた。アリスの頭を撫でる。
助けてくれてありがとう。ウサギさん。
アリス……。アリス……。
間一髪だった。もう少しで、アリスは……。
アリスは僕の服でごしごし涙をぬぐった。
よくやった伽羅っち！夢乃くんが言う。さあ、その子に服を着せてやりな。
どうやって？
イメージすればいい。彼女が服を着ているイメージだ。
アリスが青いドレスに白いエプロンというお馴染みの格好をしているという想像をするとすぐにアリスは服を身にまとった。
えへへ。ありがとう。
よしよし。その調子で俺にも脚をくれないか。と夢乃くんが言うのでそちらを向き、イメージするとやっと夢乃くんは五体満足になった。
大丈夫かい君たち!?ってあれ？もう終わっちゃった？
その時スーツを着た見知らぬ男が闇の隙間からひょっこり現れた。
おっさん！てめえ今頃出てきやがって。大変だったんだぞ。あんな化け物がいるなんて聞いてねえよ。
ごめんごめん。胡蝶くんを送り出してから待ってるの暇でさ。やっぱりついていけばよかったかなーとか思いながらうろうろしていて、木の裏側にまわったわけよ。そしたらなんと、二つの夢もろともでっかい穴が開けられちゃってんの。これはもう誘拐事件の犯人の仕業だなとぴんと来ちゃって、¥僕でも苦労しそうな意思気力の持ち主に胡蝶くんが敵うわけないと慌てて追ってきたんだけど……。すごいね。まさかやつを倒してしまうとは。それで、やつは今どこに？」
夢乃くんが指差した方には僕が粉々にした男の残骸が転がっていた。
あーあー派手にやってくれたね。これじゃあもう彼の意識は助からない。
まじっすか。
まあやっちまったもんは仕方ないな。それに、ここまでやらないとこいつは危険かもしれない。
とりあえず。とスーツの男は言うと、どこからともなくたらいを取り出し、僕はこいつの意識の断片をこいつの夢の中まで運んでしまうから、胡蝶くん、後は頼んだ。
任しとき。さあ、二人とも、帰ろう。夢乃くんが扉を創り出した。中に入る。

◇

S-01
長岡百穴に戻っていた。ここはあの女の子の夢の、ほとんど外側に近い場所だ。ここにアリスの意識をとどめておく。

さあお別れだ。
お別れなの？ウサギさん。女の子は伽羅っちをぎゅうっと抱きしめた。すごく怖いこともあったけど、とても楽しい冒険だったよ。
その時一陣の風が桜吹雪を起こした。女の子はぱっと手を離すと、はしゃいでくるくると舞った。綺麗な桜だなー。
記念に。と伽羅っちが言って、カメラを構える。かしゃり。
俺は扉を創り出した。さあ行こう伽羅っち。
あたし、あなたのこと忘れないわ！
僕も君のこと忘れないよ！
また会えるよね？
会えるとも！
俺と伽羅っちは扉の奥へ消える。

K-01

滝高だ。
かわいい女の子だったな。伽羅っちはああいう幼い女の子が好きなのか？
ああ。どうやらばれてしまったみたいだね。
ばればれだよ。とは言わない。
もちろんあの男のような変態ではないからね。僕は純粋に、幼女を守りたいだけなんだ。邪な気持ちなしに幼女を愛しているんだ。
……。いや、何も言うべきじゃない。
さあ、そろそろ目覚めの時間だ。
じゃ、またな。
またね。ばいばい。伽羅っちの長い両耳がぴょんと揺れた。……時折、彼のいつもの姿の上に、ウサギの姿が重なって見える。これはあの女の子の無意識だ。それと同時に、女の子の姿も二重に見えていた。
俺は伽羅瑠衣人の夢から消失した。一度出入りするポイントが判れば、容易にできることだ。
後は、彼らが自然に目覚めるのを待てばいい。俺はおっさんと合流しようと思い、どこかで箒を落としてしまったことに気がつき、仕方がないので歩いていくことにする。

◇

伽羅瑠衣人は樫の木の下で目を覚ました。日が傾いている。彼は長岡百穴をあとにした。
家に帰り、写真をチェックすると、一枚だけ撮った覚えのない写真があった。桜舞い散る中、幼女が楽しそうにくるくる舞っている。青いドレスに白いエプロン。金髪だが日本人のとてもかわいらしい幼女だ。どこでどのようにして撮った写真か判らないが、これこそ〝今世紀の一枚〟に相応しい写真だと、彼は思った。

〈作者コメント〉
感想ください。→twitter: @karo_kanata

# 夏炉かなた　début!?

夏炉かなた氏の作品『“魅せられた騎士たち”』が、講談社 BOX-AiR 新人増刊号に掲載されている。




閲覧はこちらから↓
http://www.bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-box/boxair/
　または“講談社 box-air”で検索。
PDF で配布されており、無料で読むことができる。

# 編集後記

こんにちは、文芸部です。冊子「木々の語らい」をお手にとってくださり、真にありがとうございます。

お気づきの方がいらっしゃるかと思いますが、今回の作品にはやたら「G」という頭文字がついたものが多いのです。というのも、実は企画として、「Gという頭文字から始まるタイトルの作品を作ろう」ということをやってみました。しかし面白いことに、いや当然ではありますが、作品の中身は十人十色多種多様であり、個性が出ています。

勿論、企画関係なしの作品もいつも通りあります。タイトルに縛られないだけあって、より奥深いものになっていると思います（新部長のはずの私はGの作品しか出していません。しかもタイトルに無理やり感があります。すいません）。

また、この冊子をご覧になっている他校の皆さんへ。宇高文芸部は他校との関わりを増やしたいと思っております。もしよろしいのであれば、好きな本についてや、お互いの作品について等を語り合いませんか？　こちらから声をかけるかもしれませんが、いつでもお誘いを待っています。

文章というものは面白いもので、ひとたび夢中になるとその世界に引き込まれ、時間という概念を失い、まさにその文章と一体化し、我を忘れてしまいます。面白い文章ほど、その度合いが強くなります。このような読書ならではの体験が、私は大好きです。

そしてこの冊子によって皆さんが喜怒哀楽様々な思いをしながらも、最後のページまで読み終え、その後読感をたっぷり味わい、そして「良かった」と思えることを切に願います。

最後に、この冊子に関わってくださった全ての方々に最大の感謝を込めて。

ありがとうございました。

二〇十一年八月二十三日

宇都宮高校文芸部　編集担当兼部長　古口駿太郎

# 奥付

文芸部誌「木々の語らい」PDF 版

2011 年 9 月 4 日　発行
2011 年 9 月 5 日　PDF 版発行

著者　　宇都宮高校文芸部員

発行者　宇都宮高校文芸部

印刷・製本　宇都宮高校文芸部

〒320-0846
栃木県宇都宮市滝の原 3 丁目 5 番 70 号

| | |
|---|---|
| MailTo | utakawriters@gmail.com |
| Twitter | @utkwriters |
| HomePage | http://utkwriters.iza-yoi.net/ |
| Weblog | http://utkwriters.sugo-roku.com/ |